ぼっちのシンフォギア

ミネラルいろはす

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シンフォギアの世界に俺ガイルの人物を追加した話になります。

原作改変になりますので、それが嫌な方はブラウザバックお願いします。

投稿は不定期になりますので、、いつ投稿できるかわかりませんがなるべく早く投稿できるようにしたいと思います。

目次

一章
やはり俺の休日はまちがっている。
1
コンサートに行くのは大変である
5
双翼のライブ ―― 9
コンサートの終わり ―― 15
手にした力とは… ―― 28
彼が纏うものは… ―― 39
戦場にて…… ―― 49
契約した力の正体は…… ―― 58
2年後 ―― 69
彼が取った手段とは…… ―― 78
経緯 ―― 90
彼の新たな居場所は… ―― 98
目覚めると… ―― 104
再び現在へ… ―― 114
彼女が奏者になった理由 ―― 122
鎧の少女 ―― 131
新たなる槍 ―― 141
彼女の力 ―― 149
事の顛末 ―― 157
運命の再会 ―― 168
兄妹 ―― 180
捕獲 ―― 188

塗り替えられたもの ―― 198
新たな仲間 ―― 212
可能性の光 ―― 222
対峙 ―― 230

一章
やはり俺の休日はまちがっている。

俺は、この歌を忘れることは一生ないだろう。
会場から戦場へと変わったこの場所で、うるさいほどに鳴り響く赤色と青色の2人の少女の歌。
人類共通の脅威とされる認定特異災害ノイズ、彼らには通常兵器は通用せず、触れた人間を炭素化する。
そのノイズを相手に戦っている2人の少女。
赤色の少女が使うのは槍、青色の少女が使うのは剣。
そして、観客がいなくなった会場に鳴り響く2人の少女の歌を忘れることはできないだろう。

～数時間前～

『休日』休む日と書いて休日である。

社会人、学生が、会社や学校の疲れを癒すための日である。

なので、休日は家でごろごろしながらアニメやゲームをして、来週からの会社や学校に行く英気を養うためにあるので、休日に出かけることなど論外だ。

ましてや、満員電車の中などもってのほかだ。

やっぱり家にいるのが一番だと俺は思う。

例えそれが今人気沸騰中のツヴァイウイングのコンサートであろうと、

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。また、変なこと考えてるでしょ。また、顔が変な顔になってるよ。やめてよね、そんな顔してると、響ちゃんが怖がっちゃうでしょ」

と言ってくるのは実の妹である比企谷小町、世界一可愛い俺の妹だ。異論は認めん

実の兄に対してとは思えない言葉にお兄ちゃんは、妹の将来が心配です

「そ、そうか、ごめんな」

「いえいえ、お兄さんの顔は怖くなんかないです！面白いですよ！」

ちょっと変わったフォローをしてくれたこの子は、立花響。

うちの妹の小町と同級生で、小学生の頃からの幼馴染だ。

いつもは、もう1人小日向未来を合わせた3人で遊んでいる。

今日も本当は小町と立花と小日向の3人で今人気のツヴァイウイングのコンサートに行く予定だったらしいが、小日向に用事ができたらしく、休日の朝早く妹に叩き起こされ、小日向の代わりにに同行することになったのだ。

そして、今はツヴァイウイングのコンサート会場に向かっている電車の中で、電車の中の混み具合から、相当人気であることがわかる。

だって、朝の通勤時間帯並に混んでいて、俺は3人分のスペースを死守しながら、ドアの前で目的地につくのを待っているのだ。

会場に近づくにつれて増えて来る人に、もみくちゃにされながらもなんとか小町と立花のスペースを死守していたせいで目的地につく頃には、全身汗だくになっていた。

電車での苦行を超え会場に着くと、電車の時とは比べようにならないくらいの人の量に驚いてしまった。

「小町、お兄ちゃんコンサート終わるまでそこらへんのネットカフェで　で時間潰してちゃだめか？」

「お兄ちゃんこんなとろまで来て何言ってんの？いいから、さっさと行くよお兄ちゃん響ちゃん、ツヴァイウイングのコンサートが待ってるんだよ！」
と言いながら立花の手を引っ張ってどんどん先に行ってしまう、
「はぁ、やっぱり行かなきゃダメかぁ」
いつもよりもその腐った目を濁らして、先に進んで行った妹たちを追いかけて行く。
やはり、俺が休日にも関わらず外に出るのはまちがっていたようだ。

コンサートに行くのは大変である

「はぁはぁ、お前ら歩くの早すぎだろ、よくあの人混みの中をあんなに素早く動けたな」
俺を置いて先にどんどん進んでいる妹たちに追いつくために必死に走って来た俺は、持って来ていたタオルで顔を拭きながら走る原因となった妹を見る
「ふっ、お兄ちゃん知らないの？ツヴァイウイングのコンサートを見に行くと決まった時点でいつもの小町と思わないでもらおうか！」
芝居がかったセリフをドヤ顔で言う小町にイラッとしたことは否めないが、まぁ、小町たちがずっと楽しみにしていたのは知っていたので、多少いつもよりテンションが高いのは大目に見ることにしよう
「あっ、でもしっかりついて来てくれたのは小町的にポイント高いよお兄ちゃん♪」
ウインクしながら言ってくる俺の妹とは違い
「ご、ごめんなさい、生でツヴァイウイングが観れると思ったらいってもたってもいられなくて、気付いた時にはお兄さんが見えなくなってました」
あははと苦笑いをしながら立花が謝ってくる。

「まぁ、2人とも反省しているようだし許す、それにこんなに人が多いから逸れると危ないから次からは急に走り出すなよ」
　とはいったものの、あれ？うちの妹は反省してたっけ？……　なんかそう考えて見ると反省と言うよりはよくついてこられたなって上から目線だったような
「お兄ちゃんぼっーとしてるとまた置いてくよ」
　なんて言いながら元凶は俺を叩きながら、さっさと歩けと催促してくる。
　さすがの俺もこの人混みの中また2人を見つけるのは大変なので黙って言われた通りに歩く

「で、小町ちゃんなんで、お兄ちゃんが先陣を切るのかな？お兄ちゃんは、電車と小町たちを見つけるので体力を使い果たしちゃたんだけど」
　今俺たちは自分たちの座席まで歩いているのだが人が多すぎて全く進めず、進むにしても沢山の人達とぶつかるはめになる。
「あっ、ならお兄さん私が先陣を切ります席まで一直線に行けばいいんですよね？それ

ぐらいなら私に任せてください」

などと、立花が意気込んでいるので、立花に変わってもらおうかなと考えていると、

「ダメだよ、お兄ちゃんじゃないと、ね」

と、俺に同意を求めてくる小町、いやいや小町ちゃんお兄ちゃん言ったよねもう疲れたよって、もしかして聞こえてなかったのかな？

「それともお兄ちゃんは小町たちの肌を見知らぬ人がベタベタ触ってもいいんの？」

「そんなもんダメに決まってんだろ‼？そんなことになるぐらいなら俺が先陣をきる‼？誰にも小町の肌は触れさせん‼？」

小町の言葉を聞いた途端即答していた。いくら疲れていようと可愛い可愛い小町の肌をどこの馬の骨かわからない奴に触らせるわけにはいかない、もちろん立花も同じだ。

「じゃあ、よろしくねお兄ちゃん♪小町的には、ポイント高いけど最後の言葉はさすがに引くよ」

「そこまで言うならお任せします、ありがとうございますお兄さん」

満面の笑みを浮かべる2人を見て俺は今更撤回できないと思い諦めた。

「はぁ、わかったよ、やればいいんだろうやれば」

俺は、ぶつぶつ文句を言いながら、自分たちの座席まで歩いて行った。

双翼のライブ

「Ｆの２５、２６、２７は、この辺りのはずなんだが・・・・　お前ら見つかったか？」
　自分たちの座席を探してキョロキョロしていると
「う～ん全然見つからないよお兄ちゃん」
「そうですね、全然見つからないです、人が多すぎて席を探すのも苦労しますね」
　たくさんの人たちが自分たちの席に向かうため、自分の席の場所にたどり着くのも一苦労しそうだ。
　すると、小町が
「あっ！お兄ちゃんこっちこっち、こっちにあったよ！」
「お兄さん見つかりました！こっちですこっち」
　とぴょんぴょん跳ねながら席が見つかったとアピールしてくる２人の少女たちのもとへ歩いて行った
　２人がいる座席にはＦの２５から順番に数字が書かれていた。
「おっほんとだ、やっと席見つかったな、でかしたぞ小町と立花」
「ふふ～んでしょでしょ、もっと小町たちを褒めなさい」

小町はまだ成長途中の胸を張りながらそう言ってきた。
「いえ、これくらいなんてことないですー・さぁ早く座りましょう」
目をキラキラ輝かせて、こちらを見てくる立花は、ツヴァイウイングのライブが楽しみで仕方がないと言った感じでそわそわしている。
とりあえず、立花の提案に従って全員で席に座った。
小町と立花は席についてから、ライブが楽しみで仕方ないらしく2人してそわそわしている。
「お兄ちゃんお兄ちゃん、ライブ開始まであと何分？」
そう聞いてくる妹のために時間を確認する。
今の時刻は、２時３０分、ライブ開始は、３時なので後３０分くらいか
「ライブ開始まで、後３０分くらいだぞ」
「あと少しで生のツヴァイウイングが見られるんだね響ちゃん」
「そうだよね小町ちゃん、楽しみすぎて、テンション上がってくるよ！」
２人でがっしりと握手しながら共鳴しあっている2人をよそに俺は、少し休憩することにした。なにせ、普段家から出ない俺が、電車や会場から席につくまでに、１ヶ月分の労力を消費したような気がする。
「小町ちゃん、お兄ちゃん少し眠るから始まる直前に起こしてね」

「はぁ、しょうがないなお兄ちゃんは、ここまできて、ライブ始まっても寝てたら可愛そうだから起こしてあげる。あっ今の小町的にポイント高い‼？」
「はいはい、高い高い。じゃあよろしくな小町」
そう言うと、大きくあくびした後に目を閉じて少し休むことにした。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

暗闇の中響き渡る音に驚いて、目を開けるするとそこには……………
２人の少女がステージの上で歌っていた、それはまさしく２人が１つになったかのような一体感。そしてそれを行なっているのが……
赤色の髪をしている少女、天羽奏。

青色の髪をしている少女、風鳴翼。
この２人によって構成されるユニット、ツヴァイウイング。
日本語にすると双翼、その言葉通りで２人で１つのパフォーマンス。
２人でだからできる踊り、２人でだから歌える歌、どちらか一方でも欠けることは許されないそんなライブだった。
……　ってか、ライブ始まってね？あれ？おかしいなお兄ちゃん小町に始まる前に起こしてって言ったよね、あれ？まさかうちの妹は３０分たったら頼まれたことも忘れてしまう妹だったのか、お兄ちゃんは小町ちゃんの将来が心配だよ
などと考えていると
「お兄ちゃん、小町たちはお兄ちゃんのことを起こしましたよ、そしたらお兄ちゃんは、まだ眠いからって言ってまた眠ちゃったでしょ、せっかく響ちゃんも起こしてくれたのに、ね!!」
「ハイ、モウシワケアリマセンデシタ、オコシテクレテアリガトウゴザイマシタ」
激おこぷんぷん丸の小町ちゃんに俺は謝ることしかできない。
起こしてくれたのに、また、寝ちゃってたってどんだけ疲れてたんだよ俺、
そんな２人の空気を察してか、立花が、
「まぁまぁ、小町ちゃんも落ち着いて、お兄さんも疲れてたんだよ、電車の中や、会場か

ら席までずっと頑張ってくれてたし、それにまだとっておきの歌が残ってるよ」
とあわあわしながら必死に小町の機嫌を治そうとしている。

「まぁ、響ちゃんの言う通り、今日は頑張ってくれたので、許します。
ただし・・・ 罰として最後の歌を全力で楽しむこと‼?わかったお兄ちゃん?」
「お、おう任せとけ、今まで寝てた分全力で楽しむからよ」
立花のおかげで小町の機嫌が治ったので礼を言っておこう。それに小町が言うには立花も俺を起こそうとしてくれたらしいしな、
「立花」
すると本人はなんで呼ばれたかわからないようで頭に???って出てきそうな顔していた 。
「どうしたんですか、お兄さん?」
「いやな、小町の機嫌を治してくれたこともそうなんだが、俺を起こそうともしてくれてありがとうな」
面と向かって礼を言うのは少々恥ずかしいものだ。
すると立花は顔がどんどん赤くなっていった、あれ?怒らせちゃたかな、お前の面倒なんて見たくねぇんだよってことかな?そんなこと言われたら俺立ち直れない。

すると、ドーンと言う音ともに再び音楽が流れ２人の歌声が会場中に鳴り響く、
「さぁて、最後の曲らしいし、最後くらいは楽しみますかね」
っていうか、最後以外は見てないんですけどね

コンサートの終わり

～コンサートが始まる数時間前～

会場の控え室に2人の少女と厳つい男が話をしていた。

2人の少女とは、ツヴァイウイングである天羽奏と風鳴翼である。

厳つい男の方は名は風鳴弦十郎、この2人が所属している特異災害対策機動部二課の司令官である。

この特異災害対策機動部二課とは、ノイズが出現した際にノイズを倒し、人的被害を少なくすることを主に活動としている組織だ。

そして、現代の兵器では倒せないノイズを倒す方法を持っている組織でもある。

その兵器の名はシンフォギア、聖遺物の欠片を歌を唄う事により活性化させて、聖遺物の欠片を身にまとう事によりノイズによる炭素化を無効化でき、こちらからの物理的な攻撃を与えることができる。

今現在ノイズに対抗できる唯一の兵器である。

しかし、そのシンフォギアも全員が身に纏えるわけではなく、適合係数を満たせなければ、扱えるものではない。

現在政府が適合者とカテゴライズされているのは、風鳴翼ただ1人である。
もう1人の天羽奏は、薬を打つ事により時限式のギアを纏うことができている。

そして、今日は特異災害対策機動部二課とツヴァイウイングにとってはとても大事な日となっている。
それは、完全聖遺物であるネフシュタンの鎧とある妖刀の実験日であることと、ツヴァイウイングのコンサートであるということだ。
日本政府から寄越された聖遺物のネフシュタンの鎧の起動と妖刀の分析と解析
この2つの実験が行われる。
そして、コンサートの開始時間が迫る。
「じゃあ、弦十郎のだんなそっちも頑張れよ、こっちはすげぇの見せてやるからよ」
そう言ってニコッと笑う奏に対し翼は緊張しているのか余り自信がなさそうだ。
「あぁ、わかった。こちらも君たちのステージに負けないくらいの成果を上げることを期待していたまえ、それではな、奏、翼、気張れよ！」
バシッンと2人の背中に喝を入れ実験場に向かう弦十郎。
その背中に何か言いたそうな翼に奏が背中を叩く
「私たち、2人揃ったツヴァイウイングなら飛べない空はないんだぞ、もっと自信を持て

よ翼」

オロオロする翼に続けて奏は、

「ほら、弦十郎のだんな行っちまうぞ、言いたいことがあるなら言っちまえって」

それでも数秒オロオロしていた翼だったが吹っ切れたのか、それとも自信がついたのかは、わからないが、去って行く弦十郎を追いかけた。

「お、叔父様」

翼に呼ばれて振り向く弦十郎

そして、翼が言う

「見ていてください私たちのステージを、今の私たちの全力の歌を、それと、実験頑張ってください」

一瞬驚いた弦十郎だったが、そっちも頑張れよと言って今度こそ去っていた。

～実験場～

「了子くんアレが例のネフシュタンの鎧かね」

と風鳴司令が実験室の真ん中に置かれている白い塊を指をさして聞く

「ええ、そうよ、もう一つの妖刀の方はこちらのネフシュタンの鎧の方を優先するから、そこに置いてあるわ」

と了子さんと呼ばれた頭がソフトクリームみたいな髪型をした女性は、すぐそばに

あった黒い箱を指差した。
ちなみに、この了子という人、本名は、櫻井了子と言いノイズを倒すことができる兵器シンフォギアを作ったにじゅうかっの『櫻井理論』を書いたひとである。
「なるほど、概ね理解した、それでネフシュタンの起動準備の方は順調かね」
「ええ、順調よ、もうすぐ起動実験を始められるわ」
そして、コンサートが始まるのと同時に実験が開始された。

コンサート終盤
～コンサート会場～
会場は未だかつてないほどの盛り上がりをみせていた。彼女たちの一挙一動に観客たちは湧き上がっていた。

まぁ・・・　なにを隠そう俺もその1人なんだがな。
でも、そんなコンサートもいよいよ終盤である。
っていうか、終盤以外は見れてないんですが・・・・
まぁそんなことは置いといて、彼女たちの最後の曲を楽しもうではないか、それに、終わりよければ全て良しって言うしな。
そして、最後の曲は、『逆光のフリューゲル』

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

そして、最後の曲が終わった。

その瞬間、会場は盛大な拍手とともに彼女たちの歌を褒め讃えた、

俺と小町と立花はコンサートの余韻が抜けておらず、未だに興奮が止まらなかった。

「小町ちゃん小町ちゃん、すごかったね、奏さんと翼さん2人とも歌も踊りもとっても上手だったね」

そう言って、小町の手をブンブン振り回しながら同意を求める立花に小町も負けずの興奮具合で、

「ほんとほんと、最後の逆光のフリューゲールとかほんとにやばかったよ」

なんて、ライブの感想を言い合っていた。

すると小町が急にこちらを向いた。

「ねぇ、お兄ちゃんどうだったツヴァイウイングの奏さんと翼さんのライブ？

最高だったでしょ」

と言いながら可愛い八重歯を見せながら笑う。

そうだな、たしかに来るまで大変だったし、見れたのも結局終盤のライブだけだったが確かに来てよかったと思う。

アイドルなんかには、余り興味はない俺だがあの2人からは、言葉にできない信頼が見ているこちら側にも伝わって来るほどだった。そうでなければ、あんなに息のあった踊りはできないと思う。

…　いや、それでめっちゃ仲悪いとか聞かされたら、もう、俺誰も信じられないうわーん。

いや、それはキモいわ俺がやるとなんか、うん、気持ち悪い。

なんて、馬鹿なことを考えてないでそろそろ最高のステージを見せてくれた小町にお礼を言わないとな

「あぁ、本当に最高だったよありがとう小町」

なんて言うと、満足気な顔でこちらにブイサインを送ってくる。ほんと我が妹ながらあざとい。

ライブは最後しか見られなかったが、楽しめたからよしとするか、それに終わりよければ全て良しだしな。

しかし、

ドゴーーーーーン

と大きな爆発音が聞こえたと思ったら、すぐに各所で

「キャァァァァ誰か助けてノイズが出たわぁぁぁぁ」

ノイズが出現した

爆発音と共に現れたノイズたちは瞬く間に観客たちを炭に変えていった。

あまりの事態にしばらく頭が動かなかったが、すぐにここから逃げないと、と思い。

慌てて小町と立花を探す。

「小町、立花早く逃げるぞ、ノイズに触られると炭になっちまうんだからな、早く逃げるぞ!!」

そう言って小町たちに話しかけるが小町たちはある方向見て、こちらには気にも止めていない様子だった。

「小町早く逃げるぞ何やってんだよ」

そう言って2人を会場から連れ出そうと引っ張ると、
小町が俺の服を二回引っ張ってある方向を指す
「お兄ちゃんアレって」
小町が指す方向には、大量のノイズと先程まで歌って踊っていた2人の少女が今度はステージではなく、ノイズと共に戦場で踊っていた。
「な、なんだアレ、ノイズって倒せるものなのか？いや、待てそもそもなんであの2人が戦っているんだ？わけがわからないぞ」
軽いトリップ状態に陥っていると小町が叫んだ
「お兄ちゃん!!後ろにノイズが!!」
そうだったすっかり忘れていた、今はノイズが出てきているんだ考えることよりも逃げることが優先だ
しかし、振り返るとそこには一面のノイズがいた。
これでは3人で逃げても確実に追いつかれる、だが1人が囮りなれば逃げられる可能性はある。
なら、やるしかないだろう
「小町よく聞け立花を連れてすぐに会場の出口に迎え、いいかわかったな」
そう言って小町の肩を強く掴み言い聞かせる。

「え、で、でもお兄ちゃんはどうするの？お兄ちゃんも一緒に逃げようよ!!」
「そ、そうですよお兄さん3人で走ればきっと逃げきれますよ」
そう言って既に泣きそうな小町たちを見て覚悟を決める。
この2人だけは生きて返したいと自分の命で2人を助けられるなら悔いはないと。
「小町ごめんな」
短く告げ反対方向に走り出す、俺の名前を呼ぶ2人の声が聞こえるが振り返ってはダメだ今振り返れば未練が残る。

そして、逃げると言っても、休みの日に外出しない俺に体力はなく、すぐに追い詰められる。
自分の周りのノイズを見て思う。
人間には好かれないのに、こんな化け物には好かれるなんてな、つくづくついてない。
そんな、最後の最後までどうでもいいことを考えながら迫り来るノイズを待つのみとなった。
「小町たち逃げ切れてるといいな」

次の瞬間大量のノイズたちが俺目掛けて飛んでくる

「じゃあな、小町俺がいなくても元気でやれよ」

ズバッ

俺の耳には死ぬ瞬間まで歌が聞こえていた。

ドサッ

手にした力とは・・・

俺は小町たちからノイズを引き離すために囮になったが、普段インドアのこともあり、体力に自信がない俺はすぐにノイズたちの大群に追いつかれてしまった。
「はぁはぁ、ここまでだな、どうか小町たちが無事でありますように・・」
体力が尽きたことにより会場の壁に寄りかかって、かろうじて立っている。
周りを見渡せば、今にも飛びかかってきそうなノイズの大群。
もう逃げる体力はない、ならば最後くらいは恐怖を味合わずに終わりたい、そう思い目を閉じた。

だが、いつまでたっても最後の瞬間は訪れない。
代わりに煩いほどに聞こえてくる歌。

不思議に思い目を開けると・・・・・・

そこに立っていたのは、ノイズたちの攻撃から俺を守る少女。

それは、今日俺たちがライブを見に来た目的のユニットの1人天羽奏その人だった。
「な、何してんだあんた、俺なんかを守ってる場合じゃないだろ」
俺のことを守っている少女を見て思わず言ってしまった。
彼女は、自分の身長と同じくらいの槍を円形に振り回して、ノイズの攻撃を弾いているが、それも完全に防げてはいない、少しずつではあるが彼女が身に纏っているスーツみたいものが砕けている。
それにも、関わらず彼女はあははと笑って言う
「あんたさ、なかなかカッコイイことするんだな、見えてたぜ、あんたが女の子2人からノイズを引き離すために逃げてるとこ」
「なっ、見てたのかお前、この混乱の中そんな小さなこと…」
そう、そんなこと今会場全体で起きていることに比べれば取るに足らない、小さなことだ。今もどこかで誰かがノイズにやられている。そんなことだが…
「あぁ、見てたさ、皆が出口に向かう中1人だけ反対方向に全力疾走してるなら余計にな」
「なら、尚更だろ‼?今この瞬間にも俺をここで守るよりも出口に向かった奴らからノイズを守りに行った方がいいはずだ、その方が生き残る確率があがるだろ、そうすれば小町たちも…」

今尚俺の目の前でスーツを砕けさせながら俺を守ってくれている少女に問う
その少女も、流石に大量のノイズからの攻撃を守るのも限界が近いらしく苦悶の表情を浮かべている。
「ああ、そうだろうな、お前の言ってることは正しい」
「なら、なんで⁉?」
そう聞くと彼女はこちらを振り返りニコッと微笑みながらこう言った。
「そんなもん、あたしが助けたかっただけだ、それ以外に理由なんてねぇよ」
「あ、あんた馬鹿だろ、本物のバカだ、俺を助けに来て自分までやられかかってるなんて、本当に救いようのないバカヤロウだ･･･　でも、ありがとう」
「ぷっ、あっはははは、散々バカにしておいてありがとうか、おう、どういたしましてだ」
そう言って彼女は笑っている。
だけど、多分この状態は長くは続かないだろう。小町たちだけでも逃げきれてくれていればいいんだがな。
「お兄ちゃん‼?」
「お兄さん‼?」
ふと声のした方を見ると小町たちが息を切らせながら、こちらに走って来ていた。
２人とも全力で走って来たせいか今日のためにとおしゃれして来た洋服や新品の靴

が汚れていた。
「小町‼?それに立花もどうしてここにいるんだ‼?逃げろって言っただろ‼?ここにいたらノイズに・・・」
「それでも‼?お兄ちゃんを置いていけるわけないじゃん‼?」
そう泣きながら激怒する小町に驚いていると、小町と立花は俺に抱きついてきた。
「そうですよお兄さん‼?私たちはお兄さんを犠牲にして生き残っても全然嬉しくありません‼?だから、3人一緒に逃げましょう」
立花は俺の服に顔をうずめていたと思ったら、泣き笑いを浮かべてこちらを見てくる。
「おいおい、感動の再会もいいとこなんだろうけどよ、あちらさんは待ってくれないぜ」
彼女の言うことは最もだ、彼女もあの数のノイズ相手にもう限界だろう、それに俺たちがここを離れれば彼女も守る意味がなくなる。
そうすれば、ノイズから逃げ出すことくらい簡単だろう。
今までノイズの攻撃から身を守れていたことから想像がつく。
「おい、お前らあたしがあんたらの逃げる時間を稼ぐからそのうちに逃げろ」
今はその言葉に従うことが一番生存率が高そうだと思い、すぐに逃げることにした。
「おい、2人とも来ちまったもんは仕方ない早く逃げるぞ、天羽さんが時間を稼いでくれ

ているうちに早く」
「えっ、あっうん」
「は、はい了解です」
そして俺たち3人は、天羽さんが時間を稼いでくれているうちに逃げ出すことが・・・・できなかった。
刹那

ノイズから、俺たちを守っていた天羽さんのスーツの破片が立花に刺さったのだ。
「立花!!?大丈夫か!!?返事をしろ!!?」
肩を抱き寄せ揺するご反応がない、刺さったのはちょうど心臓のある真ん中部分。小町は友達が死にそうだという現実を受け入れられないらしく、いやいやと首を横に振って狼狽えている。
最悪の事態である、ノイズと出会ってる時点で最悪だが、これ以上の最悪があるなんて、俺は不幸だーー!!?と叫びたくなってしまうくらいだ。今だってこうやって、ボケていないとあまりのことの重さにおかしくなってしまいそうだ。
俺たちが狼狽えているの見かねたのか彼女は変な質問をして来た
「なぁ、あんたらさ、この会場に来てたってことはさ、あたしらの歌を聴きに来てくれ

たってことだよな？」

今この状況で、なんで分かりきったことを聞く彼女を不思議に思っていたが、こちらの返答も聞かずに彼女は続けた。

「ならさ、あたしの人生最後の歌を聴かせてやるよ……　だから!!生きるのを諦めるな!!!」

彼女は俺たちにそう告げるとノイズたちから少し距離を開けて何かを言っている、いや謳っているという表現が正しいのだろうか

「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌｌｌｌ」

何を謳っているのかは、わからないが周りの空気が震える、それは小町にもわかったらしく、さっきまで狼狽えていたが今は天羽さんを見ている。

謳が続くにつれて、周りのエネルギーが天羽さんに集まって行くように感じる。

だが、彼女がその謳を唄い切ることはできなかった。
どういったものなのかは、わからないが天羽さんは先程まで一人で俺を大量のノイズから守っていたのだ。必殺技的なものを放つのに体力が残っていなかったのだろう、天羽さんは、途中で苦しみ出して血を吐いて倒れてしまった。

「天羽さん‼?･大丈夫ですか‼?･」
俺は立花を小町に預けて、天羽さんのもとに駆け寄る。
駆け寄って見ると天羽さんは鼻や目、口から血が流れていた。
それに気づけば先程まで身に纏っていたスーツも奮っていた槍も今はなく、あるのは赤いペンダントだけだった。
「ごめんな、ドジっちまったみてぇだ、お前らだけでも逃してやりたかったんだが、あいにくとあたしはもう動けねぇ、今ならまだ逃げられるかもしれない、あたしを置いて早

く逃げな!!」
天羽さんは瀕死の体で、必死に逃げろと、そう叫ぶが俺の耳には入ってこなかった。
今俺の心の中は、怒りと悔しさと・・・・ そして、力を求める欲望が膨れ上がっていた。

怒り、それは今尚、人々を襲い続けるノイズへの尽きることのない恨み
悔しさ、それは立花にも、天羽さんにも小町でさえも助けられない自分の不甲斐なさ
欲望、それは自分の弱さを呪い、彼女たちを守れるだけの力を欲する欲望
彼女たちに降りかかる全ての敵から守れるだけの力が欲しいと・・・・・
そして、欲望が心を満たした時、声が聞こえた。
「ふぅ～ん、君の欲望は面白いね、君が望むなら力を貸そう」
声の主を見ると先程までいたコンサート会場とは違い、あたり一面黒い場所にいた、
その少女は刀の上にのりこちらを見下ろしていた。
「だ、誰だお前は、っていうかここはどこだ⁉?俺はさっきまで、コンサート会場にいたはずだ・・・」
すると、少女は面白そうに笑った後こう返した
「うんそうだよ、君の体はコンサート会場にある。今も尚死にかけている二人の少女と

妹さんと共にね」
「なら、早く俺を返しくれ!!?あいつらを助けないと・・・「助けられないよ、今の君じゃ、今戻ったところで、皆一緒にノイズたちに炭に帰されるだけだよ」
「っつ、なら、どうすればいいんだよ、俺には天羽さんみたいなノイズと戦う力もないし、怪我人を背負って逃げられるほどあいつらは甘くない。俺にどうしろっていうんだよ!!」
　少女は不敵に笑って問う
「君は、力が欲しいかい?」
「えっ?」
　いきなりの質問で驚いてしまう
「君は、天羽奏のような、ノイズたちと戦う力が手に入るなら欲しいかと聞いたんだ」
　それは、欲しい。だってそれさえあれば小町たちを助けることができる。
　少女はこちらの心を読んでいるかのように続いて聞いてくる。
「それが、君の命を削ることになるとしても?」
　あぁ、それでも、今この瞬間彼女たちを助けることができるならどんな力でも欲しい
「そうかそうか、なるほど。なら僕と契約をしよう、僕は君に力をあげよう、代わりに君の命をもらう、そういう契約だ」

どうする?と聞いてくる少女に俺は、迷いもなく答える。
「いいだろう、その契約結ぶぞ」
そう、今のこの瞬間彼女たちを助けることができるのなら命だって惜しくない。
そう言うと少女はニコニコ笑いながら　手を出してくるのでこちらも差し出して握手をする形になる。
「うんうん、これにて契約完了だね、僕の名前は阿修羅丸。力が欲しい時は叫ぶといい、そうすれば僕は君の力になるよ」
それじゃあ、早速君を元の場所に戻すよ、戻ったら呼ぶといい僕の名を、じゃあね八幡
バイバイと手を振られながら意識が失われていくのを感じる。

目を開くと、先程までいたコンサート会場でそばで天羽さんが倒れている。
後ろでは小町が立花を見ていて先程と同じ光景だったが、
だが先程とは違い目の前には黒い刀が地面に突き刺さっていた。
そして、言われた通り俺は叫ぶ
「力を貸してくれ、阿修羅丸!!?」
瞬間、目の前の刀が俺の声に反応するかのように黒く輝き始め、
そして、地面に広がる天羽奏の血とスーツの破片を吸収し始めた。

彼が纏うものは・・・

目の前には、大量のノイズに瀕死の天羽さん、後ろには小町と胸に破片が刺さった立花がいる。

そしてもう一つ目の前には・・・・ 黒く光る一本の刀

何かを主張するように淡く光っている刀に向けて、俺は叫ぶ。

契約を交わした少女の名を・・・

「力を貸してくれ‼?阿修羅丸‼?」

そう叫ぶと先程まで淡く光っていただけの刀は途端に黒い光を放ち始め、ものすごいスピードで、地面に広がっている天羽さんの血とさっきまで、俺たちを守ってくれていた時に砕けた天羽さんが着ていたスーツの破片が刀に向かって吸い込まれていった。

唯一意識がはっきりしている小町には何が起こったのかが理解できなかったようで、ぽかんとしていた。

そして、時間にして数秒、黒い刀はこちらに向かって来て、俺の目の前で止まった。

そして、俺がその刀に触れると・・・・

「グオオオオオ・・・ アアアアアアアア・・・・」

激しい痛みと凄まじいほどの感情が自分の体の中に流れ込んでくるのがわかった。全身に伝わるこの痛みに刀を離しそうになるが、この刀を離してはいけないような気がして離すことができず、ただひたすら痛みに耐えることしかできなかった。

あまりの痛みに時間を忘れてしまっていたが、しばらくするとその痛みが徐々に無くなり、変わりに頭に声が響くようになった。

『やぁ、八幡これで契約成立だよ、これで君はノイズと戦う力を得た、その力をどう使うかは君次第さ・・・・ けど、対価は払ってもらうよ。とりあえず今回は片腕だ』

そう言われて、刀を持っている右手を見てみるとその腕は人間の腕とは思えないくらい真っ黒になっていた。

だが、腕は黒くなっただけで、特に異変はないように思える。

腕が黒くなるだけなんて対価としては安い気がすると考えていると阿修羅丸は、こっちの心を読んでいるみたいに続けた。

『その腕はただ黒くなったわけじゃない、これから君が今の君よりも力を求めた時その黒い部分は広がっていく、そして全身が黒く染まった時、君は死ぬ』

そういうものだよと少女は楽しそうに笑う。

だが、逆に考えればこれ以上力を求めなければ、死ぬことはない。

そういうことなら話は早い、これ以上の力を求めなければいいだけのことだｒｙ『それは無理だよ八幡、人間という生物は力が手に入ったら、それ以上の力を欲するものだ、そして、その欲望は尽きることがないものだ、それは君たち人間の歴史が証明してくれているよね』

彼女の言うことは確かに正論である。だが、その力を求めるかどうかは、俺次第だというのなら話は別だ、俺は更に力が欲しいとは思わない、今のまま自分の大切なものさえ守っていられればそれでいいのだから。

けど、彼女はその考えも読んでいたかのように返してくる。

『いや無理だよ君は力を求める絶対に』

そう断言する彼女に対して、そんなことはないと言い返そうと口を開けた瞬間彼女は、続けて言ってきた。

『今の力で、彼女たちを守れなくなった時、君は更なる力を求める。彼女たちを守るために。だって、今だってそうでしょ、彼女たちを守るために力を求めた。なら、その力が通用しなくなった時更なる力を求める。』

それは、図星だった。確かにそういう状況になれば迷わず力を求めてしまう気がする、いや、確実に求めるだろう。小町たちを守るためならば迷わないと俺は思う。

『まぁ、でも今は後のことよりも今この瞬間をどうするかだよ、今目の前にいる彼女も状

態が良くない、早く治療しないと間に合わないよ、それに後ろの少女も同じだよ』
だから、早くした方がいい彼らもいつまでも待ってはくれないからねと愉快そうに言った。
それもそうだと思ったが、俺はまだ力の使い方を教えてもらっていないと抗議しようとしたが
『いや、君はもう知っている筈だ、その刀を手にしたその瞬間から、その刀は君の力になったのだから、わからないわけがない』
そう、いわれてもわからないものはわからないんだが・・・・　これが新手の詐欺か・・
なんて考えていたが、今はそんな時じゃない。
はぁ、仕方ない、とりあえず刀は俺の力だといわれたので、俺は、刀に意識を向けてみる。
すると、次の瞬間、頭にある言葉が思い浮かんできた。
『思い浮かんだ?なら、その言葉を叫びなよ、そうすれば君の望んだ力が手に入る。それじゃあ、これでレクチャーは終わりだよ、君の欲望は面白いから、これからを楽しみにしているよ・・・・・　その結果破滅するのか、救われるのかはわからないけどね』
面白ければなんでもいいけどねと告げ、阿修羅丸の声は聞こえなくなった。
そして、言われた通り頭に思い浮かんだ言葉を叫ぶ

「モード”Ｇｕｎｇｎｉｒ”!?」
瞬間、刀が手から離れ、宙に浮く。
そして、刀の切っ先がこちらを向き、深く胸に突き刺さった。
「グァァァァァァァァァ」
想像を絶する痛みに悶えていたが、それも徐々に収まり、胸に刺さっていた刀は消え、変わりに先程まで天羽さんが着ていたようなスーツを全身に身に纏っていた。
ただし、天羽さんのとは違うのは、スーツの色が真っ黒で変わりに血管のような赤黒い模様が全身に張り巡らされているところだ。
見た目は、気持ち悪いが、奴らを倒せるなら何でもいいか、
ノイズに向かって走り出すが・・・・
「うぉっととと」
次の瞬間には、先程まで３００ｍくらいの距離があったのにそれを一瞬で詰めてしまった。俺は、余りの速さにびっくりしてしまった。
「な、なんだこのスーツ、スピードもくそ速いし、身体も軽い、これなら、お前らに遅れをとることはない」
よし、やるかと言った瞬間に正面にいたノイズを渾身の右ストレートでぶん殴る。
ズドン

すると、正面にいたノイズは、腹が貫通して、そのまま崩れていった。
やれる、やれるぞこの力があればノイズたちを倒すことができる。
だが、今は小町たちを助けることが最優先だ、このスーツのおかげでスピードが上がったのならば、パワーも上がっているはず、なら多分3人を抱えて、救護施設まで運ぶことも可能だと思う。
1人ずつ運んでいては、時間も足りないし、手をくれになってしまう。
それなら、いちかばちか3人を抱えて向かうしかないか、
それに迷ってる時間はない。
なら・・・・

「小町、立花を天羽さんのところまで連れてきてくれ、このまま3人抱えて救護施設まで行くぞ」
言われた小町は、何が起こっているか理解できていない様子だがとりあえず俺の指示に従って、天羽さんのところまで立花を運んでくれている間に、今目の前にいる無数のノイズたちを少しでも減らしておこうと、アニメや映画の見よう見まねでパンチを繰り出したり、キックをしたりしていた。
「お兄ちゃん、響ちゃん連れてきたよ、早く行こう」

ノイズを数十体倒したあたりで、小町の元へ戻る。
そして、俺は天羽さんを背中に背負い、立花と小町を両腕で抱き抱える形で移動する準備をした。
「小町、今から出発するが、舌噛むなよ」
「りょ、了解であります」
それじゃあ行くぞと声を掛けノイズたちに捕まらないようになるべく高くジャンプする。
すると、余りの高さに小町は悲鳴をあげた。
「キャァァァァァァァ」
その後も何度か悲鳴をあげていたが、一刻も早く立花たちを救護施設に連れて行くために構っていられるず、救護施設に着く頃には、半泣きで後で小町の言うこと小町が許すまで聞いてもらうからと言って、立花の治療についていった。天羽さんの方も、なんとか助かるらしく、後一歩の遅ければ助からなかったかもしれないと言われ、万事休すであった。
そういうわけで、なんとか3人は助かったのであった。

俺？俺はというと戦場に戻ってきていた。今ノイズと戦えるのは、俺と多分天羽さん

の相方の風鳴さんだけだと思うので、今自分にできることは何かと考えた時、他の人たちを助けることだった。一応、俺の目標である小町たちを助けること自体には成功したのだが、小町にも困ってる人がいたら助けてあげて欲しいって言われちゃったしね。まぁ、小町に言われたのなら聞かないわけにはいかないしな、

そして、俺はとりあえず1人で戦っているであろう風鳴さんを探そうと出来るだけノイズが集まっている場所を探していた。

戦っていればノイズたちもそちらに集まってくると思い、探しているのだが……

いた

そこには、傷だらけのスーツでノイズたちを相手にしている風鳴さんの姿があった。

彼女が纏っているのは、天羽さんとは、形状が違うスーツだ。

そして、天羽さんとは違い武器は刀を使っていた。

とりあえず、加勢した方がよさそうなので、武器を持ってない俺はとりあえず、パンチの形をした手を前に出し、そちらに全速力でダッシュする。

すると、なんとまあ、俺が通って来たところのノイズだけ綺麗に炭になっていた。

「な、なんだお前は、いったいそれはなんだ、それに今のはいったい、それにそのギアは色や模様は違うが奏のガングニール、君はいったい…」

突然現れた意味不明の男に風鳴さんは先程までの疲れていた様子とは違って、いきなり質問責めにして来た

「質問は後にしてください、俺もよくこの力についてはわかってないんです。とりあえず、今は、目の前のノイズの排除と避難し遅れた人の救出を優先してください。」

俺の言葉に、風鳴さんは一瞬戸惑ったような表情を見せたが、すぐに切り替えてくれたらしく、既に折れている刀を構えて、臨戦態勢を取ってくれる。

「だが、一つだけ、奏は・・・・ 天羽奏は無事か?」

そう心配そうに聞いてくる風鳴さんに向けて、俺は目の前のノイズから目を離さず答える。

「ええ、天羽さんなら無事です。先程救護施設の方に運んで起きました。だから、安心してください」

「そうか、そうか、それは良かった。」

心底安心したような顔をすると、パンパンと頬叩いて気合を入れていた。

次の瞬間には先程のような優しい顔ではなく、キリッとした冷たい顔に変わっていた。

「よし、ならば私がこんなところで折れるわけにはいかないな、防人の剣とくと見るがいい」

いざ、参ると叫びながら彼女は目の前のノイズの群れに斬りかかる。
「それじゃあ、俺もやるとしますかね」
互いに背中を合わせながら戦い、なるべく攻撃をくらわないようにしていた。
コンビとはいえるようなものではないが、今この瞬間では、それでも十分なものだった。
俺は未だに謎が多いこの力を持って、戦場に立つ。
そして、今この瞬間から、風鳴翼との共同戦線が始まった。

戦場にて・・・・

風鳴さんとの共闘をしながら、２人で手分けして避難し遅れた人たちを一人一人助けていた。だが、手分けして助けに行ったと言っても、所詮は２人だ。
超人的な身体能力を引き出せるスーツがあるとはいえ助けられない命もあった。
そして、俺の目の前でも何人も死んでいった。
初めて見る人が死ぬ様に、言葉を発することができず、かと言って、そこに止まる事もできず半ば強引に頭を回転させて、ただひたすらに、助けることのみに集中していた。

～数時間後～
「はぁはぁはぁ、これでほとんどのノイズは倒せたんじゃないですかね？」
息を切らしながら、隣にいる風鳴さんに聞く
風鳴さんの方も大分疲れている様子だった
「・・・・　そうだな、これでほとんどのノイズは、斬り伏せたはずだ。」
あの後、俺たち２人でほとんどのノイズの殲滅は終了した。

２人とも、命に関わるような傷は、負うことはなかったが、大量のノイズを相手にして、満身創痍だった。
風鳴さんが持っていた刀は原型を留めておらず、スーツの方もボロボロだった。
俺はというと、戦うこと事態初めてのことだったので、相手からの攻撃を捌ききれずに、何度もスーツに直撃をくらったせいで、風鳴さんよりも酷い有り様だったが、それでもスーツとしての役割を果たしてくれたおかげで、ノイズの攻撃を受けても俺の体が炭になることは無かった。

この後、少し休憩したら小町たちのいる救護施設に戻ることになった。
と言っても救護施設に向かう道のりでノイズの倒し忘れと生存者の確認をしながらだが....

先のことは後回しにして、俺は今日起こったことを思い返していた。
初めてライブに来て、盛り上がっていたところに爆発と共にいきなりノイズが現れた。
そして、俺は小町たちを逃がすためにノイズたちの囮になり走って逃げた。
だが、普段から運動していない俺が長く逃げ続けることができず、生きるのを諦めた

時に天羽さん助けられた。けど、そのあと天羽さんと立花が瀕死になって、都合よく現れたいまだによくわかっていない力を契約して手に入れた。

そんなことを考えていたが、そろそろ小町たちのところに向かおうと思い風鳴さんに声をかけようと風鳴さんの方を見ると、今にもノイズが後ろから攻撃しようとしていた。

風鳴さんは気づいていない、それにこの距離からだと攻撃するのは難しい、けど移動するだけなら……

次の瞬間、俺は今出せる最高速度で風鳴さんの方へ飛ぶ。

いきなり俺がこちらに向かって来たことに風鳴さんは驚いていた。

だが、今は説明している暇はない、それに話していたら間に合わない。

ドン

「なっ、何をしている貴様⁉?」

俺は風鳴さんを突き飛ばすことにより、ノイズの攻撃から守ろうとしたのだ。

それにより、彼女はノイズからの攻撃を避けることができたが……　突き飛ばした俺の方は直撃していた。

流石にこれ以上のダメージは耐えられなかったらしく身に纏っていたスーツが砕けて倒れこむ。俺はライブに来た時の服装に戻っていたが、右手だけが真っ黒なままで、

すぐそばに、刀が突き刺さっている。
スーツがなくなったことで、体が、急に重くなり動けなくなるのと、同時に先程まではとは比べようもない疲労感が全身を襲った。
「ーーー、ーーーー、ーーーーーー」
風鳴さんが何か叫んでいるように聞こえたが、なんて言っていたのかは結局わからないまま、意識は遠のいっていった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜風鳴ｓｉｄｅ〜
その男は、いきなり私を突き飛ばしたかと思うとノイズの攻撃を受けて地面に倒れた。奏のガングニールと似ているギアらしきものも先の戦闘で限界を迎えていたらしく変身が解けている。
今目の前で、私を庇ったこの男はいったい何者なのだろうか……
ことの始まりは、奏と２人で突然の爆発から現れたノイズを倒していたときまで戻る。
２人でノイズを倒していたら、ふとした瞬間から奏の姿がみえなくなった。

私には、居なくなった奏を探しに行くという考えもあったが、出てきたノイズたちに四方を囲まれてしまい、安易に抜け出せる状況ではなくなってしまったので、目の前のノイズたちを先に斬り伏せることにした。

だが、圧倒的な数に徐々に押され気味になっていたところに、いきなり、奏のギアに似ているものを纏って現れた。奏とは違い武器は槍は持ってはおらず、体の動かし方からして、あまり戦い慣れをしているようにはみえなかった。

突然のことに驚いていた私は、彼に対して色々質問をしていた気がする。

纏っているものはなんだとか、お前は何者なのかと聞いたら、後にしてくれと言われ、確かに今は喋っている場合ではなかったことを思い出した。

しかし、彼が知っているかどうかはわからないが、奏の安否だけは、どうしても気になったので聞いてみると、彼は、何故か奏の安否を知っていて、無事だと言うことを教えてくれた。

胸のつかえが取れた私は、この男と一時的に共に戦うことになった。

そして、大半のノイズを倒したので、一度救護施設に戻ることになったのだが、先の戦闘で体力をひどく消耗していたので、少し休憩を挟むことにしたのだ。

休憩の間も、頭の中は奏のことでいっぱいだった。

気付いた時には、この男がいきなりこちらに、飛んできて私を突き飛ばしたのだ。

そして、同時に彼はノイズにやられた。
本当に彼は何者なのだろうか。
倒れている彼は何故私を庇ったのだろうか……
「……っ、今はそんなことよりも」
彼を倒したノイズをもうほとんど使い物にならない刀で切り裂く、そのまま彼を抱えて、全速力で救護施設まで走る。
彼の体が炭になっていないことから、あのギアが最後の最後まで仕事をしていたことを意味する。そして、ギアが解けて出てきた刀は、置いてきてしまった。
あの刀からは、何故か嫌な気配がした、それに私のギアも何故か刀に触れようとすると、激しい痛みが全身に流れたので、今回収は無理だと判断した。
「くっ、防人が守るべき一般市民に守られるとはな……」
私の不甲斐なさに悔しく思いながら、彼を救護施設まで全速力で翔ける。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

～八幡ｓｉｄｅ～

「うっ・・・ どこだここは？」

眩しい光を浴びて目を開けるとそこには、知らない天井だった。

起き上がって周りを確認してみると、そばに花瓶が置かれており、自分の服は緑色の服で、まるで病院患者が着るような服だ。それに人気も無い。

今までのことは夢だったのではと思い、契約した時に黒くなった右腕を確認してみるが、右腕は黒くなったままだった。ということは、ここは現実であり、夢ではなかったということになる。

「ってことは、ここは病院か？それにしては、ベッドは俺が使っている一個しかないということは個室か、だけどいったいどうしてここに・・・」

俺は最後に覚えている記憶を思い出す。

確か風鳴さんをノイズの攻撃から守ってそれから・・・
そこからの記憶が無いということは、俺は死んじちまって天国ってことか？
流石にあのスーツの耐久値が限界を迎えていて、あのノイズの攻撃によって死んじちまったてとこか、
だが、そんな思考を遮る声が聞こえる。
『違うよ、八幡。君は生きている、だから、ここは天国ではないよ』
その喋り方はここがどこか知っているような口ぶりだった。
起きたばかりで、頭が働かないが、死んでいないのならここは病院だろう多分と自己解釈するが、
『ここは、病院でもないよ、ここがどこなのかは、僕の口からじゃなくてこれから来る人に詳しく聞くといい』
そう聞こえた瞬間入口の扉がウィーンと音を立てて開く、入ってきたのは、巨漢のマッチョ男と頭がソフトクリームみたいな髪型をした女の人だった。
巨漢の男がこちらに近づいて来る。
「まずは、目が覚めてよかった、俺の名は、風鳴弦十郎よろしく頼む」
巨漢の男はあのツヴァイウイングの風鳴さんと同じ名字らしい、何かしら関係があるのだろうか、

「私は、出来る女と評判の櫻井了子よ、よろしくね」
続いて自己紹介をした、ソフトクリームみたいな髪型をした女の人は櫻井了子さんというらしい、だが、この2人は一体何の目的で俺を訪ねてきたのだろうか、すると風鳴さんが、こちらをまっすぐ見てくる。
「君が、第三呪具、識別名阿修羅丸の適合者だね、比企谷八幡君」
第三・・・ なに?そんなものは、知らないが、阿修羅丸という名前なら聞いたことがある、というか知っている。
第三ホニャララみたいな、中二臭い名前のことはよくわからない。
それに、適合者?というものもよくわらないが、阿修羅丸との契約だというのならそれは俺だろう。
それに、俺の名前まで知っているとは・・・
「君のことは、奏と翼から話を聞いている、目が覚めたばかりで悪いが、少し、話をさせてくれ」
そして、俺は契約した阿修羅丸のことを少しだけだが知ることなる。

契約した力の正体は....

俺の頭は、パンクしそうだった。

目覚めたら知らない場所で、目が覚めたばかりで混乱している最中に、風鳴翼さんと同じ苗字を名乗る筋肉マッチョの男と頭ソフトクリームな女性がやってきたり、さらには、その男たちは、こちらの名前も知っており、俺のことを阿修羅丸の適合者であるという。

色々聞きたいことはあるが、一番初めに聞いて置かないといけないことがある。

「あ、あの、小町たちは無事ですかね?」

俺の発言に2人は目を見開いて驚いてた。

そんなにこの質問がおかしかったのだろうか?

だが、俺としてはおかしなことを聞いたつもりはない。

俺が覚えているのは風鳴さんを突き飛ばしたところまで、そこから後の記憶がないということは、小町や立花が無事に助かったかどうかがわからないということだ。だから、俺は一番初めに小町たちの安否を確認しておきたかった。

「あ、ああ、君の妹とその友達なら命に別状はないが....」

何故かそこで言い淀む風鳴さん、それに、思いのほか櫻井さんの方も顔色が悪い。命に別状がないのに何故だろうか？

俺は続きが気になり催促する。

「別状はないが・・・ 何なんですか？」

２人は顔を見合わせ、しばらく何かを考えるようにしていたが、再度こちらをまっすぐに見つめる。

「君の妹の小町君の方はたいした怪我はなかったのだが、立花君の方は、かなりの怪我だったらしく日常生活を送れるようになるには過酷なリハビリをしなければならないらしい」

風鳴さんは、とても悔しそうにそう告げた。小町に怪我が無かったのは良かったが・・・・

「えっ？で、でも、リハビリをすれば元の生活には戻れるんですよね？」

僅かな望みにかけて聞いてみる。

「それは・・・・ 正直に言えば、リハビリでどこまで回復するのかはわからない。もしかしたら、完全回復するかもしれないが、もしかしたら、ずっと寝たきりかもしれん」

それほどの怪我だったのだと風鳴さんは言う。俺は、唖然としていた、それは小町と

小日向と立花の3人で仲良く遊んでいたあの光景がもう二度と見られなくなるかもしれないという喪失感だった。

　すると、いきなり櫻井了子と名乗った女性が話に割って入ってきた。

「残念だけど、悪いことはそれだけじゃないのよね、今のあなたは、彼女よりももっと、危ない状態なのよ」

　自分の右腕を見てみなさいと言われ自分の右腕を確認すると目覚めた時と同じように黒く染まったままだ。

「それはね、君が適合した阿修羅丸という刀の呪いなのよ、その黒い部分が全身を黒く染めた時、貴方は、死ぬわ」

　それは、知っている、阿修羅丸と契約した時に彼女から聞いている。俺は、その代償を払う覚悟はあの戦場でとうにつけた。

　その話を聞かされて、何のリアクションも起こさない俺を見て2人は不思議がっていた。そして、櫻井さんは何かに気づいたように再び口を開いた。

「いえ、それは適切な言い方ではないわね、正確に言えば、貴方という人格が消えて、貴方の肉体は阿修羅丸のものになると言ったところかしらね」

　その言葉に俺は絶句した。俺の人格だけを消す･･･

　そして、肉体は彼女が貰う。

俺が死ぬのは覚悟していたが、その後彼女が俺の肉体を貰うとなると話は変わってくる。

それに、そんなことは、契約した時には・・・

「そんなことは、契約した時には言われてない、とでも言いたそうな顔ね」

でも、契約違反ではないわよ、だって、死んだ肉体をどう使おうが貴方には関係が無くなるものと櫻井さんは告げる。

櫻井さんの言ってることは最もである、契約内容は力を与える代わりに俺の命を与えること、そこに細かい制約などはしていない。

だから、俺が死ぬのなら、彼女のやり方は契約違反ではない。

それに、死んだ後の肉体をどう使うのかは、彼女の自由ということだ。

つまるところ、本当の契約内容は、彼女自身の復活ということだろうか。

「あっ、だけど安心して流石にそんなに早く貴方が死ぬ事にはならないと思うわ」

先程までの雰囲気とは違い明るい声色で話しかけてくる。

多分櫻井さんはそう確信しているのだと思う、何故かはわからないけど

「私が何でわかるのかって顔ね、いいわ、それじゃあ今回の本題に入りましょうか」

っていうか、この人さっきから俺の考えてること当てすぎでしょ、エスパーかなんかですかね？

若干の恐怖を覚えつつも話は進んでいく、
「あなたが手にした力は、何なのかっていう話に入るわね、まず初めに、あなたが手にしたのは、第三呪具と呼ばれる妖刀、阿修羅丸」
第三呪具、妖刀と全然わからない単語ばかりがでてくる。
とりあえず今は話を聞くことに集中することにした。
「第三呪具とは何か、から入るわね、呪具とは……」
それから、櫻井さんが阿修羅丸と呼ばれる刀の話をしてくれた。難しい話ばかりだったが、俺がわからなそうな顔をすると、俺にもわかるように話してくれた。おかげで、なんとなくだがわかってきたような感じがする。
感じがするだけだが……

まとめると呪具とは、聖遺物と呼ばれる世界各地の神話や伝承に登場する超常の力を秘めた武具に、人間を取り込ませたものらしい。
となると、阿修羅丸は元々人間ということになる。
そして、呪具は風鳴さんや天羽さんたちが纏っていたスーツとも違う種類らしく、彼女たちが纏っていたものが、自称できる女の櫻井さんが作り出したシンフォギアと呼ばれるものらしい。

シンフォギアは、聖遺物の欠片から作り出されたスーツに、身に纏ったものの戦意に共振、共鳴して戦慄を奏でる機構が内蔵されており、その旋律に合わせて彼女たちが歌うことにより、バトルポテンシャルが上がるという仕組みらしい。

つまり、彼女たちのシンフォギアは、歌う事でノイズたちと戦うことができるらしい。

逆に、呪具と呼ばれるものは、身に纏う人と聖遺物に取り込まれた人との契約を交わした場合のみ、力を得ることができる。

つまり、俺の場合は阿修羅丸と契約を交わしたため力を得ることができたということだ。

そして、シンフォギアとは違い代償を背負うことになる。

それは、契約の代償とは違い、徐々に精神が汚染されて、最後には力を振りかざすだけの狂人に成り果てるらしく、全世界で、例外を除く呪具と呼ばれる武器の生産及び使用は禁止されていて、シンフォギアシステムのみがノイズに対抗するための兵器だそうだ。

そして、第三呪具の第三とは、作られた順番ではなく、それを使用した際の能力の汎用性、危険度などを考慮した順番になり、番号が小さくなればなるほど、汎用性が高く、危険度も増すそうだ。そして、俺が契約した阿修羅丸は、第3位なので、かなり厄介なものらしい。元々は第2位だったらしいのだが、それよりも強くて危険な呪具が出来た

らしく3位に繰り下げになったと教えてくれた。
阿修羅丸が持つ能力としては、今のところ3つわかっているらしい。
1つ目が、吸収。
この力で、天羽さんのスーツと適合するための血を吸収した。
2つ目が、再生。
この力で、天羽さんのスーツに似たものを構築した。

3つ目が、影操。
この力は、影を操ることができるらしい。これについては、まだ使ってはいないので何ができるのかよくわからなかった。
上の2つの力で、俺は天羽さんと似たスーツを纏うことができたらしい。
なぜ、ここまで阿修羅丸の力がわかっているのか聞いてみたら、俺よりも前に阿修羅丸の適合者がいて、その人が使っていた力らしいので、ここまでわかっているとのことだ。
だが、どの力もまだ詳しくわかっていない。
それを解明するためにも、ライブの日に実験をしようとしていたところある聖遺物が爆発したらしく、刀の無事を確認しようと思ったら無くなっていたらしい、そして、確

認してみるとライブ会場で俺が使っていたらしい。
代償に支払った黒い右腕のことだが、黒い部分には特殊な呪いがかけられているらしく解呪することができないとのことだ。
日常生活で黒い右腕とか厨二くさくて嫌なんだがそれは、まぁ仕方がない。
だが、問題はこれから先日常生活を送ることができるのかという話である。
櫻井さんの話にもあったように精神が汚染されれば、俺が死ななくても、身体は阿修羅丸のものになるのと同義である。そんな人間を国が野放しにするわけにはいかないだろう。となると、俺を殺すか、それとも実験材料になるかの2択だろうか？
俺が櫻井さんの話を聞いて考えこんでいるのを見て風鳴さんが肩を掴んできた。
「本当にすまないが、君は日常生活に戻ることはできないだろう。そして、君に残された選択肢も少ない。」
そう言って、風鳴さんが俺に選択肢を教えてくれる。
1つ目は、先程俺が考えていたように実験材料になること。
まだわかっていることの少ない呪具についての実験を毎日行うことになるとのこと。
2つ目は、一生監視部屋で過ごすか。
こちらは1つ目とは違い実験を行うことはないが、1つの部屋に死ぬまで幽閉されるらしい。

そして、最後に風鳴さんが教えてくれた選択肢は、
「3つ目だが、俺たちの組織『特殊災害対策機動部』に所属してもらい、了子君に君の身体を診てもらうのと同時に、ノイズが出た際には、出撃してもらうことになる。」
どれを選んでも君を元の生活に戻してあげることはできない、本当にすまないと俺の肩を強く握りながら頭を下げてくる。櫻井さんも不甲斐なさゆえか、目を伏せている。
そんな、風鳴さんと櫻井さんに俺は驚いていた。
俺には、選ばせてくれるということだけでも十分にありがたいことなのに、この人たちは、それしか選ばせてあげられないと、嘆いているのだから。
この中で選ぶなら俺はどれにするべきだろうか……
だが選ぶ前に、1つ聞いておきたいことがある。
「すいません、風鳴さん、小町たちには俺のことはどう伝わるのでしょうか」
そう、俺の扱いである、どれを選んでも元の生活には戻れない以上小町たちにはなんて伝えるのか気になったのだ。
風鳴さんは下げていた頭を上げこちらを驚いた顔で見てくる。
「君は、本当に……。それなんだが、君のことは妹君たちには死んだということを伝えることになっている。」
まぁ、確かにそれが一番妥当なところだと俺も思う。

二度と会えないのなら、死んだも同然だもんな。
そうか……　なら、最後に小町たちには言っておきたいことがある。
だが、それを伝えてもらうには、風鳴さんに頼むしかないが、風鳴さんが許してくれるかどうかにかかっている。
恐る恐る聞いてみると、
「風鳴さんすいません、小町たちに伝言、いやこの場合は遺言になるんすかね、それを小町たちに伝えてもらうことはできますか」
「ああ、それくらいなら、なんとしてでも通してみせよう。君をこれから味わう理不尽さに比べればそれくらい伝えてみせよう必ず。」
そう力強く宣言してもらえるとは思っても見なかったので、少し驚いてしまった。OKをもらえたので伝えてもらう内容を考え始めた。

１０分ほど経って内容が決まったので風鳴さんに伝える。
「ありがとうございます、なら小町たちにはーーーーーって伝えてもらってもいいですか」
「ああ、必ず伝える、男と男の約束だ!!」

さっきから、握られている肩がさらに強く握られる。
すごく熱いけどこの人は多分悪い人ではないんだろう、なにせ初対面の俺の処遇を嘆いてくれるような人なんだから。
なら、俺はこの3つから選ぶならこれにしようと思う。

俺が、選んだ選択肢は……

2年後

～2年後　とある遺跡の近く～

「はぁ、疲れたぁ、早く部屋に戻りてぇ」

あたり一面が砂漠のこの場所で、もう何時間も呪具とやらの調査をしていて、俺が着ている洋服は汗でびっしょりになっている。

「おいおい、そんなこと言ってる暇があるならとっとと頼まれたもんを見つけちまおうぜ八」

そう提案してくるのは、元ツヴァイウイングの天羽奏さんだ。

なぜ元なのかというとあのライブ会場の惨劇の後、彼女は書類上は死んだことになったからだ。理由としては、俺の監視あるいは俺が暴走した時には殺せるような人物を監視につけるにあたって、当時、死んでもおかしくない怪我をしていたので国にそれをうまく使われる感じになったというわけだ。それに彼女の家族はもういないので、家族の説得もなくあっさりと決まったらしい。

本当にクソみたいな理由だ。嫌になる。

そのせいで、彼女が俺から離れることはほとんどなく、こうして俺に任務がくると、彼

女が付いてくるのがいつものことになっていた。それと彼女が俺を八と呼ぶのは、天羽さんが苗字が呼びづらいから名前の八幡から一字取って八になったと本人から聞いた。普通に比企谷の方がよかったんですけどね、俺の精神衛生的に……

「そんなに気を緩めてると、どこかの国のやつにブスリとやられちまうぞ、まぁ、でもそん時はあたしが守ってやるけどな」

あんたは殺させやしないさと笑いかけてる天羽さんに少しありがたく思う。

それに、そう忠告してくるのはやはりあの出来事があったからだろう……

なぜ他の国の奴らから狙われるようになったのか、簡潔にまとめると2年前のあのライブ会場の惨劇を全て俺のせいにした。そのおかげで、元々あった選択肢は全て無くなり、国によって櫻井さんの実験材料という立ち位置が今の俺である。

「まっ、でもあたしはさ、あの時の行動が間違っていたとしても、救われた奴はいるだろ……ほら、八の妹の友達の立花とかさ」

そう思うぜと告げられて、少し照れる、自分の行動であまり褒められた事がないせいでこういう不意打ちには弱い。だが、天羽さんの言う通り、あの行動は褒められたものではない。現にあれのせいで司令には多大な迷惑をかけてしまったしな。

いたたまれない空気になってしまったので、少し雑に返してしまう。

「うるせ、あれは俺がしたくてしたことだ、他の誰にも関係はねぇ」

そう言って彼女から顔を晒す。その態度を見ていた天羽さんは、やれやれと言った感じだった。

「わかったわかった、本当に素直じゃないな」

いいから目的の物を探すぞと声をかけて、作業を再開したものの、あの時のことを思い出してしまう。

それは…2年前のライブの後のことである。

俺が風鳴さんの組織に入らせてもらう事になってからしばらくして、ある噂を耳にしたのだ。

その噂とは…【立花響のせいでツヴァイウイングの天羽奏は重傷を負った】というものだった。

どこの誰が流した噂かはわからないが、噂というのは広がるのが早いもので、しかもそれが今人気上昇中のツヴァイウイングのこととなれば尚更だった。

そしてその噂は、外出できない俺の元にも流れてきたのだった。

俺はそれを聞いて、すぐに風鳴さんに真偽を確かめに行った。

いてもたってもいられなかったのだ、大勢の人が傷ついたあの惨劇の中で立花自身も

大怪我を負ったのにもかかわらず、それに加えてそんなことを言われなければならないのか、なぜ立花ばかりが理不尽な目にあうのだろうか。

「風鳴さん‼?-どうゆうことですか‼?-立花のせいで天羽さんは怪我を負ったんじゃない、ノイズを倒そうとして、それで、怪我を負ったんじゃないんですか‼?-」

その怒りを柄にもなく関係もない風鳴さんにぶつけてしまった。

すると風鳴さんは申し訳なさそうにこちらに頭を下げてきた。

「すまない、その事なんだが…」

それから聞かされた話は、くそみたいな話だった。まず、噂自体は全くのデマであること、本当は絶唱と呼ばれる技のバックファイアが主な怪我らしい。天羽さんの身体が連戦による疲弊と大技の発動に耐えられなかったとのことだ。それに、シンフォギアシステムとは国家機密であり、国として、その構造などを国民に教えるわけにはいかず、ことの真実がバレなければなんでもいいとのことらしく、風鳴さんも国から何もしないようにと厳重注意されているらしい。本当にすまないと何度も謝ってくる風鳴さんは本当に悔しそうだった。

そして、その説明を聞いていた俺には、国は真実がバレなければ誰が犠牲になろうともいいという風にしか聞こえなかった。その考えは国の考え方としては間違っていないのだろう、小を犠牲にして大を救う、よくある話だ。ほんとに胸くそ悪い。

国としては間違っていない…………だがそれは、立花が犠牲になっていいという訳ではない。
俺は話の後、部屋に戻りなんとかして、この噂を払拭できないか考えていた。
だが、考えていても一向に良い案が思いつかない、
国は噂を止める気はなく、真実も話す気がない。
そして、国民は、真実か嘘か関係なくあの災害に対してのストレスを発散できるものがほしかったのだ。そして、そのストレスのはけ口に悲惨にも立花に白羽の矢が立ったというわけか、本当に気持ちが悪い。
結局その日は、何もいい案が浮かばず、そのまま寝てしまった。

～～

『八幡、八幡、起きてよ』
「うっ」

誰かに呼ばれて目を開けるとそこは、
「俺を呼んだのは…阿修羅丸か、何か用か」
あいも変わらず真っ黒な空間に刀の上に乗ってこちらを呼んでいる少女がいた。
阿修羅丸がいるということは、ここは俺の心の中という事になる。
先日櫻井さんから教えてもらったことだ、呪具に封じられている人が契約時に心に入り込んで、徐々に精神を汚染していくらしい。だが、その汚染もメンタルを鍛えたり、俺の前の契約者の時に作られた抑制剤を使う事で、汚染の進行をほとんどなくすことができるらしい、そのせいでここに所属してから、真っ先に行われたのがメンタルトレーニングだった。あのトレーニングのことを思い出すたびに震えが止まらなくなる。
だが、今はそんなことを思い出している場合ではないと、あの地獄のトレーニングのことを頭から切り離し、彼女の方に視線を向ける。
すると、やっと話を聞く準備ができたのがわかった阿修羅丸は刀から降りてこちらに近づいてくる。
『ねぇ八幡、君はどうするの?』
どうする?意味がわからない。いきなり彼女がこちらにしてきた質問に俺は理解が追いつかなかった。
阿修羅丸は、はぁとため息をついて、続けて言った。

『立花ちゃんのことだよ、さっきまでそれで悩んでいたんじゃなかったのかい？』

なぜ知っているか？とは聞かない、契約した時に呪具の中の人物は、契約者の外で見たことや聞いたこと経験したことを契約者を通して全部見ていると聞いていたからだ。

たしかに……そうである、だが、それを考えていたら急にここに呼ばれたのだから忘れていても仕方ないと思うぞ

『そうやって屁理屈ばかり言ってると碌な大人にならないよ』

別に屁理屈じゃないし、しかも思っただけで言ってませーんだ。

俺の考えている事に流石の阿修羅丸も唖然としていた。

うん、なんか気持ち悪いわ、俺がやるとここまでキモいとは思わなかった。

八幡反省

それにこんな馬鹿なことを考えているのには理由がある、それはこの空間の中だと阿修羅丸には俺の心の中を覗くことができる。だから、真剣に相手の話を聞いてしまうと、彼女の欲望に飲まれる事になるので話をする時は深く考えるなと櫻井さんに言われていたが、次の言葉はそういうわけにはいかなかった。

『ふ～ん、八幡はさ僕が彼女の噂をなんとかできるって言ったらどうする？』

それは、嘘だと俺は思った。

聞いた話だが契約した呪具の依り代の人物はそこから動けない、それに阿修羅丸の能

力は、催眠系ではない。なので、彼女がなんとかできるというのは俺に話を聞かせるための嘘だろう。

しかし、

『違う違う、僕がなんとかするんじゃなくて、君がなんとかするのさ、僕はただなんとかする方法を知っているだけ』

そう言ってこちらの顔の前でニコニコしながら知りたい？知りたい？と言ってくる姿に可愛いと思ってしまった自分を殴りたい。

彼女の話をまじめに聞けば聞くほど汚染される可能性が上がると櫻井さんは言っていたが……今はそんなことよりもこの噂をなんとかする方法があるなら知りたい。その一心で阿修羅丸に聞いてしまった。

「なんとかできるのか阿修羅丸？」

彼女は首を横に振った。

『だ～か～ら～僕がなんとかするんじゃなくて君がなんとかするのさ、僕はその方法を教えるだけ』

おんなじことだろうと思うのは俺だけだろうか、やり方を教えてもらうのだから、なんとかできるかどうかは阿修羅丸の案によるしな。

まぁ、ここはとりあえず続きを聞いてみることした。

「じゃあ、どうすれば彼女の噂を無くすことができるんだ？」
『う～ん、結構単純な話なんだけど、立花ちゃんは、あの災害のせいで、天羽さんに怪我を合わせたって噂になってるんだよね？』
確かにあの災害のせいで立花は天羽さんに怪我を負わせたと噂になっているがそれがどうかしたのだろうか？
『ならさ、その上をいく噂を流せばいいんじゃないかな？例えばあの災害を引き起こしたのは君だと全世界に報じればいい』
それだけで、立花ちゃんから君に矛先が変わるよと微笑む。
衝撃の提案だった、全世界に俺がやったと報じる、確かにそうすれば立花の噂も元を辿れば俺のせいにはなるが…
しかし、彼女は俺に考える時間を与えるつもりはないのか、彼女は俺の両頬を掴み再度問う。
『君に世界を敵に回す覚悟はあるかい？』
彼女を救うために、そう言いながら見惚れるような微笑みに俺はしばらく思考停止してしまった。

彼が取った手段とは……

俺はさっき阿修羅丸に言われた言葉が頭の中で反復している。
彼女は俺に向かってこう言ったのだ。
ー世界を敵に回して、立花を救う覚悟はあるのかー
と、そしてこちらを見つめる真紅の瞳は俺を捉えて逃さなかった。
さらに、こちらの頬を両手で掴んで、俺が彼女から視線を逸らさないように固定されている。
それに、なんだか顔が近づいてきてる気が……って近い近いそれになんだかいい匂いがする。
目の前には阿修羅丸の顔が鼻先がくっつきそうな程近くにあり驚いた俺は、急いで阿修羅丸の拘束を解き距離を取る。
あ、危なかった、あのまま彼女の瞳を見ていたらなんかやばそうな気がした。
それから、少し呼吸を整えてから阿修羅丸が言った方法について冷静に考えてみる。
立花を救うために原因であるコンサート会場の出来事を俺のせいにするか…考え自体は悪くないが、やるやらないの前にどうやってそれを実行するのだろうか。

俺は今特別災害対策二課にいるわけだが正確な場所は聞かされていないので現在地もわからないし、そもそも風鳴さんが行動できないのに俺なんかの行動が上から許可されるわけがない。それに、俺は未だに謎が多いこの呪具の適合者なわけだからな。現状その案を実行するにしても、分からないことが多すぎる。だから、俺には立花の噂をどうにかする方法がわからなかったわけだし。

だが、阿修羅丸が俺にこの案を提案してきた以上彼女にはこの案が実行できるだけのプランがあることになる、はずだ。多分、きっと、おそらく…

『ひどいなぁ～そんなに僕のことが信用できないの？それに僕はできないことを言うためにわざわざ君を呼ぶわけないじゃないか』

いやいやいや、信用も何も契約してから全然時間たってないですし、第一に最終的に俺の体を奪うことが目的の奴に信用なんてあるわけ無いだろ。それともなに？どこかのｅｘｔｒａの続編みたいに今まで過ごした時間を俺だけ失ってたの？それは大変だ、今すぐ月の表側に戻らないと。

とまぁ冗談はさておき、前半はともかく後半は、確かに彼女の言う通りだ。ここに来た回数自体多くはないが、俺がここに訪れた時は今のところ何か大事な選択を迫られた時だけな気がする。

『まぁいっか、とりあえず方法を先に教えてあげよう、やるかやらないかはそれを聞いた後でもいいよね』

彼女は俺の返事も待たずにその方法とやらを説明していく。

『まぁ、どうするかって話だけど人がたくさんいるところで、話せばいいんだよ、ね簡単でしょ？』

え？今の方法？どう考えてもなんか最終的な流れしかなかったんですけど、そこにたどり着くまでのプロセスとかはどうしたんだよ！これじゃあ聞いても聞かなくてもどちらにせよ判断できない。

そもそも人がたくさんいるところに行くこと自体が今の俺には無理だ、というかまずこの施設から出れることさえ今の俺にはわからないし、出れたとしても監視がつくだろうし、それに妙な真似をしようものなら、すぐに取り押さえられる筈だ。

俺の内心を読んだのか阿修羅丸はため息交をついた。

『はぁ、今のでわからないの～全く手がかかるなぁ。まぁいいや、じゃあ詳しく説明するね』

彼女はやれやれと言った様子で説明し始めた。

いや、詳しく説明するなら初めからそうしてくれよ、というかあれだけでわかる奴なんて何人いるんだよと心の中で愚痴を吐きつつ、彼女のいう具体的な方法を聞くことに

した、ちなみに『具体的な』だからな、ここがポイントだ。さっきのが説明とは断じて認めんぞ。

〜〜

数十分ほどで彼女の具体的な説明は終わった。

「なるほどな、確かにその方法なら、立花の噂をなくすことが出来るかもしれないが…デメリットが多すぎないか？」

あれから阿修羅丸の詳しい説明を聴いて、率直に思ったことだ。

確かに立花の噂を払拭することはできるがそれとは別にこちらが受ける被害の方がはるかに大きかった。これなら、他の方法を探した方がマシだと思うくらいには…しかし、

『ふ〜ん別に僕はやることは強制しないよ、人の噂は７５日っていうしね、でも、彼女はその間耐えられるかな？周りの大人や子供達からの悪意にさ、それに噂っていう奴は、時間が経てば経つほど収集がつかなくなるものだよ』

それに、これ以外の方法は知ってても教えないよと、ここまでで阿修羅丸の三連コンボにより少しずつ俺の心は揺れている。

デメリットも俺が被るものだけならいいのだが、少なからず国にも影響を与えること

になる。そうなれば風鳴さんたちに多大な迷惑を与えることなる。俺のために頑張ってくれたあの人たちに迷惑をかけたくはないが…しかし、阿修羅丸が言っている通り、人の噂は怖いし、時間が経てば経つほど取り返しがつかなくなるものだ。その環境に立花が耐えられるかどうか…

しばらく考えた結果、俺は阿修羅丸の提案を実行することにした。

風鳴さんすいません、俺は俺の大切なものを守るために貴方に迷惑をかけることになります。

俺は風鳴さんに心の中で謝罪をしながら、阿修羅丸の案を実行することを彼女に伝えた。

『そっかそっか、やっぱり君はやるって思ってたよ。それじゃあここから君の勇姿いや、愚行の方が似合ってるかな、まあとりあえず見届けさせてもらうよ』

それじゃあもう行きなよと阿修羅丸が言うと俺の意識がだんだんと薄れていく。

最後に見えていたのは彼女のニコニコとした笑顔だった。

『ふふふ、やっぱり面白いなぁ彼は』

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

目が覚めるとそこは見たことある天井だった、というか自室の天井だ。

ということは、阿修羅丸のところから帰ってきたのか。

ふと、今の時間が気になったのでそばに置かれている時計を確認すると、7時30分と表示されている。これなら今からでも阿修羅丸の案を実行することが可能だ。

思いたったが吉日って言うしな、覚悟が鈍らないうちにやってしまった方がいい。

俺は自分の右腕の侵食が以前より進んでいるのを見て、契約者の名前を呼ぶ

「阿修羅丸来い！さっさとすませるぞ」

彼が叫ぶと彼の影から一本の刀が出てくる。出てきた刀は彼があのコンサート会場で使っていた黒く光る刀であった。

彼はすかさず刀を手に取り胸に突き刺して叫ぶ、自身が身に纏う鎧の名を

「モード〝ガングニール〟」

瞬間、彼の体はコンサート会場の時と同じ赤黒いスーツを見に纏っていた。それは、以前よりも禍々しさが増していた。

これのモデルは、天羽奏が纏っていたガングニールと呼ばれるシンフォギアだと櫻井さんから聞いている。

だが、俺の場合は阿修羅丸の力によりガングニールに適合しているのではなく、阿修羅丸が、ガングニールの性質を取り込みそれを彼女ように再構成したものらしい。だから、ガングニールであってガングニールではないとのことだ。なので、禍々しいこのスーツはガングニールではなく、阿修羅丸の力であるらしい。

彼はある程度体を動かして問題なく動けることを確認してから、行動に移った。

「”影深”」

言った瞬間徐々に彼の体が自身の影に沈んでいく。

【影深】とは、本来なら今の俺では使えない能力である。自身の影に潜り、移動を行うことができると言うものだ。制限時間も１０分と短い。

そもそもこの技は、阿修羅丸の能力の一部である影を操る能力をマスターしてから覚える技なのだが、今回に限り阿修羅丸に代償を払うことにより、今自身が使えないものも一時的に使えるようになっている。阿修羅丸によると使用期限は１日。それが過ぎた場合は能力の発動が１週間できなくなるらしい。ちなみに今回の代償も契約時と同じく俺の寿命である。結果、前までは右肘までだったのが今では右肩まで侵食されてい

る。
そして影深の一番の利点は、阿修羅丸曰く、あらゆるものに感知されないとのことだ。そして、俺は阿修羅丸に教えてもらった脱出ルートを通り地上を目指す。それにしてもなんであいつは脱出ルートを知っていたんだろうか。
そんな疑問を抱きつつ、影深の制限時間内に外に出られるよう全力で移動していた。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

「ふぅ、目的地に着いたか、まだ追手は来ていないということはまだ脱走はバレていないということかな」
今俺は、平日でも人がゴミのようにいる新宿に来ていた。あの後、外に出た俺は全速力で近くの駅に走り、そのまま新宿行きの電車に乗ったのだ。なぜ新宿に向かったのかと言うと阿修羅丸的に一番人がいそうなところだそうだ。
それに、電車に乗っているときは追手が来るかとヒヤヒヤしたが、何事もなかったので首尾よく進んでいると言えるだろう。順調すぎて怖いくらいだ。
俺は準備のために一旦路地裏に行き、そこで変身し、阿修羅丸の力で仮面を構築する、

と言っても今まで吸収したのがガングニールしかないので必然的に赤黒い仮面が出来上がる。
俺はそれを顔につけて、路地裏から出る。
もう、後戻りすることはできない。立花を救うため、世界を敵に回すと決めたのだから。

俺は、すぐ下の地面を思いっきり、ぶん殴った。
ズドン!!!
地面がひび割れる。
それをやった本人に全員が目を向け、悲鳴をあげる。
なんたってそいつは赤黒いスーツを身に纏っていて更に顔にはスーツと同じ色合いの仮面をつけている。その姿はまるで悪鬼のようだった。
「騒ぐな!!!」
悪鬼の怒声に固まる民衆。逃げようとしていた人々も彼の声により動けなくなってしまう。それほどの迫力が今の彼にはあるのだ。そして、彼が口を開く。
「静かになってくれてありがとう、今日は皆様に大事なことを伝えたくてやってきました。」

民衆は、彼の外見とは違い、紳士的な言葉に戸惑っていたが、それもまた次の発言で再び恐怖に染まった。

「今回はツヴァイウイングのコンサート会場に続き、この新宿が標的になりました。皆さん死なないように逃げてくださいね」

言い終わると同時に、彼は再び地面を殴る。その振動により、恐怖で固まっていた人たちはわれに返り一目散に逃げ始める

何を言っていたかは理解できなくても今ここにいたら死ぬことだけは確実だとそう本能が訴えっていた。

逃げ始める人々から目を離して、彼は人がいなくなっているところなどを壊しながら、移動する。

先程と同じことを言いながら新宿全体に彼の言葉を伝える。伝わらなくても彼の恐怖は、広がっていく。

ある程度騒ぎを起こし終わった俺はとあるビルの屋上で、待ち人が来るのを待っていた。

これで、立花の噂から謎の破壊人の噂に塗り替わるだろう。民衆には立花の噂の真偽

を教えたのではなく、それ以上の恐怖をもって立花の噂を塗り潰そうとしたのだ。なぜなら、誤解でも解は出ているので直させるのはすごく難しいが、それ以上のものをもってきてしまえばその問題自体を有耶無耶にできる。

パタパタパタと屋上にヘリの羽の音が響く。

やっと俺の待ち人が来たみたいだ。

ヘリから降りて来たのは風鳴さんと櫻井さんそれに何人かの黒服の人たちだった。仮面越しに彼らの表情を見るが、すごく悲しそうなそれでいて困惑の表情がみてとれた。

「どうして君は…」

「早く捕まえてください、抵抗はしません。スーツも今解除します。」

風鳴さんの言葉を遮り、捕まえるように黒服の人たちに促す。

スーツを解除し終わると黒服の人たちが、俺の両手両足を拘束具で止めヘリの中へと押し込んだ。

ヘリで飛び立った後も俺を見る2人の表情を思い出して罪悪感にさいなまれる。

だが、こうなることをわかっていてやったのだ、後悔なんてしていない。だが、ここまで心にくるとは思ってもみなかった。だから、まあ風鳴さんたちにはなるべく被害が

でないことを願う。

それとあとは、無事立花の噂が塗り潰れるのを祈るだけだ。

経緯

俺は今、両手両足に拘束具を取り付けられ椅子に座らされている。部屋にはトイレとベッドがあるのがわかるくらいの質素な牢獄に入れられていた。

さながら、重大犯罪者のような体験をしている。いやまあやった内容としては、引けをとらないものなんだが…

あの後俺はヘリから直接この場所に連れて来られた。

場所はアイマスクをヘリの中でつけられていたのでわからないが、目の前には柵があり、その外には看守と思われる人が2名いる。

このことから、どこかの牢獄だと思う。

今回のことは、出来るだけ人に対しての被害がでないようにしたが、流石にあれだけの事態を引き起こしたのだから、死刑もありえるだろう。しかし、本当に風鳴さんたちには申し訳ないことをした。自分の独断とはいえ、彼らが監視役をする事で二課の所属を許されたようなものだ。今回の件で少なからず迷惑をかけることになると考えれば考えるほど申し訳ない。

だが、俺は俺のとった行動に関しては後悔はしていない。少なからず、俺の行動によ

り世間は、立花の話題から外れ謎の男の話題に移るだろう。そして、政府はその真実を公開することはできない。立花の噂とは違い、俺に関しては、国民に国家機密を公開するわけにはいかないだろう。

だから、現状政府が取れる手段はそう多くないはずだ。

なんにせよ、何日もこのままというわけには行かなくなるだろう。国民の不満が爆発するだろうし、何の説明もしないわけにはいかないだろう。

まぁ、後数日で俺の命運が決まるというわけだ。

どう転んでも、バッドエンドなのはほとんど決まっているようなものなので、最後の平穏な日々をこの質素な牢獄で過ごすことにしよう。

そんなことを考えながら目を閉じた。

数日後

ガチャンと牢の扉が開く。

柵が開き2人の女性が中に入って来た。

～～～

数週間前

ーｓｉｄｅ天羽ー

ベッドの上で全身に包帯をぐるぐる巻きにされている。

はたから見れば、ミイラ男のようだ。いや、男じゃないからミイラ女ってとこか。

そんな冗談は置いておいて私は、コンサート会場での絶唱のバックファイアを受けて全身がボロボロだったらしく、後一歩病院に搬送されるのが遅ければ命はなかったそうだ。と二課のみんなに怒られてしまった。特に弦十郎のだんなにはキツく怒られた。

簡単に死のうとするなってな。

それに話によると、あの時私が守っていた少年が助けてくれたらしい。

あたしが倒れた後その少年が呪具と契約し、私を助け、翼と一緒にノイズを殲滅した

とのことだ。

「まったく、守る側のあたしが逆に守られちまうなんてな、情けない話だぜ。まだ、お礼も言ってないことだし怪我を治したら会いに行くかね」

ダンナの話によると少年の名前は比企谷八幡っていうことと、二課に正式に配属されることが決まったことくらいしか聞いてないしな。あとで部屋の場所を聞いておくかな。

今は一刻も早く体を治すために、あたしはそのままベッドの上で眠ることにした。

それから、数日あたしはリハビリと治療により、日常的な生活を送ることになるまでに回復していた。あたしを診た医者も余りの回復の速さに驚いていた。かくいうあたしもこの回復力には疑問を抱いていた。医者によれば1ヶ月はまともに動けないと聞いていたのに、それが1週間で治ったとあれば誰であろうと疑問に思うだろう。

まぁ、難しいことは全部二課の研究者に任せて、あたしは何も考えずに戦場で槍をふるうだけだ。それに、あたしには家族を殺されたノイズへの復讐しかない。それに、家族を殺されたあの日からあたしの時間は止まったままなのだから…

「うーん、とりあえず少年のところに礼を言いに行こうかそれとも翼に会いに行こうか」

しばらく考えた結果、先に礼を言いに行くのが先だと思ったので、
「少年の方に先に行こう」
よしと意気込んで、まだふらつく足取りでダンナに教えてもらった少年の部屋へと向かうが…

少年の部屋の周りには人がむらがっていた。何やら慌てているような様子だったが緊急事態なのだろうか？
「なんかあったのか？」
と近くの職員に話しかけると
「あぁ、天羽さんか、回復おめでとう。それとこの騒ぎなんだが、この前入って来た比企谷という少年が見つからないらしくてみんなで探しているんだ。」
天羽さんも見つけたら教えてくれと言ってそのまま去って行ってしまった。
「いなくなったねぇ、来たばかりってことはどうせ迷子になってるんだろ」
そのうち見つかるだろうと思い、見つかってから改めて礼を言おうと思い代わりに翼に会いに行くことにした。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

あの後、翼と一緒に会いお互いの無事を喜び終わった後自分の部屋に戻って来たのだが、まだ比企谷が見つからないらしく、先ほどよりも慌ただしくなっていた。
とりあえずダンナに状況の確認をしに行こうと司令室に向かうことにした。
「病み上がりには、ちょっとキツイかな」
そんな愚痴をこぼしつつ、司令室まで向かう。

司令室まで、なんとか辿り着くと、モニターが点いており、ダンナも了子さんも他の職員さんもモニターに釘付けになっており、何が映っているのか気になったあたしも中に入ってモニターを見る。

「なっ!!こいつは…」
そこに映っていたのは、赤黒いガングニールを纏った少年が新宿の街を破壊している光景だった。逃げ惑う人たちに何かを叫んでいるが悲鳴が大きくて上手く聞き取れない。

「ダンナこれはなんだ!!」
　すぐに気を取り直して、ダンナに状況の説明を求める。ダンナもあたしの存在にようやく気付いたのかこちらを見る。
「っ!!奏か、俺にも状況がよくわかっていない。彼はこのような行動をとる人物ではなかったはずなのだが…」
　ダンナにもよくわからないなら誰がわかるってんだ!…いや、もしかしたら彼の契約した呪具によるものでは…と了子さんを見るが
「残念ながら私の計算によるとこんなに早く彼女に体を奪われることはないわ、だから彼自身の意思で動いているとしか言いようがないの」
「っつ」
　申し訳なさそうに謝る了子さん。彼女にもわからないらしい。こうなったら本人に直接聞かなければ答えはわからないらしい。
「俺たちは、今から比企谷君を止めに行ってくる。ここからの脱出など、色々聞きたいことはあるが何より今は市民の命優先だ。」
　奏は病み上がりだからギアを纏わせるわけにはいかない留守番だと言い残すと急いで了子さんと出て行ってしまった。
「なんなんだよこいつはよぉ」

今もなお、画面の中で新宿の街を壊し続ける彼は一体何を考えているのかそれがわからなかった。

あたしが助けられたコンサート会場で出会ったのも彼が妹たちからノイズを引き離す囮になったからだった。呪具と契約したのも妹たちを助けるためだったと聞いている。そんな誰かの為に命を賭ける奴が今モニターの中でしている行為は、本当に同一人物なのか疑いたくなった。

あれから、どうやって自室のベッドに帰って来たかは覚えていないが、今日の疲れか先ほどのショックかはたまた両方のせいか、ベッドに入ったらすぐに意識が沈んで行った。

翌朝、起きると比企谷が捕まったことを聞かされた。

彼の新たな居場所は…

～天羽奏ｓｉｄｅ～

比企谷が、捕まったと報告を聞いたあたしは急いで弦十郎のダンナに経緯を聞こうと部屋を飛び出て司令室に向かっていた。

「はぁはぁあいつがなんであんなことをしたのか絶対に聞き出してやる」

全速力で走りながら必ず理由を聞き出してやると意気込んでいた。

ようやく司令室に辿り着き、一息ついて中に入った。

すると中にはダンナや了子さん、他の人たちも概ねそろっていた。

だが、ダンナ達の顔色はあまり良くない。

「ダンナ!!?·あいつはなんて言ってやがるんだ!!?·」

事情を知っていそうなダンナを問い詰める。

「奏か…、実は彼は昨日俺たちが止めに行った時にはあっさりと捕まったのだ、それまでの行動が嘘のようにな。そして、そのままヘリで移送されたのだが、特に行動の理由などは話していないそうだ。」

それに、政府はそんなことよりも民衆の不満を抑えるので精一杯だそうだ。

「これを見てみろ」
ダンナが見せてきたのは昨日の新宿での惨劇だった。
「幸い死者はいなかったが、新宿の建物の3割が被害を受けたそうだ。国民達が事態の詳細を求めて国会に押し寄せてきている。呪具のことは明かせないのは当然として、ここまでの事態をどう収束させるべきかそれが今の一番の問題だそうだ。」
俺と了子君も監督責任として上に呼ばれているそうで今から向かうそうだ。
なら、あたしも…
「ダンナ!!?あたしも連れて行ってくれ、あいつにはどうしてあんなことをしたのか直接聞きたいんだ。」
「いや、しかしだな…彼に会うことは今はできないと思うぞ」
ダンナはあたしを連れて行くのを渋っているようだが、あたしもここは引けない。
ダンナが考え込んでいると了子さんが
「いいじゃない、連れて行くくらい。それに種類がちがうとはいえ同じ適合者なのだから上も少しは意見を聞きたくなるかもしれないわよ」
「……うむ、わかった連れて行こう。すぐに準備をしろ奏」
了子さんからのナイスアシストによりついて行くことに許可がおりた。
この後、すぐに上の連中のところに向かった。

～～～

技術の発展の為のモルモットにしようとする人たちの3つに分かれている。
互いが互いの意見を押し付け合い一向に進まない、何か大きな後押しがない限りは進みそうにない。
ちなみにあたし達は3つ目の技術の発展に賛成している。これなら了子さんが、おそらく面倒をみることになるだろう。なぜなら、シンフォギアも作り出した彼女にならきっとさらなる発展のために今回の件も回ってくるだろう。
そうすれば他の2つよりもまだ人道的な扱いになるだろうと考えたのだ、ダンナと了子さんが。あたし?あたしに頭を使うのは専門外だ、体を動かすのが専門だからな。
すると何時間も続いた会議にも終止符が打たれようとしていた。
「ねぇ皆さま方彼の件ですがもう一度私たちに任せてくださいませんか、今回の件の被害よりもさらなる研究成果を上げることを誓いますわ」
了子さんの一言で周りの空気が一変した。

この後、了子さんの意見に乗った研究に賛成している人たちの後押しもあり、なんとかあたし達の意見を押し通すことができたが、払った代償も大きい。
まず、彼は新宿での一件で死んだことにし、彼を了子さん直轄の部下もといモルモッ

トにする、この際彼の自由行動は許可されず常に監視とともにあること、暴走の傾向が見られるようなら監視の手により処分することを決定した。
それと、監視の白羽の矢はこのあたしに立ったわけだが、それによりあたしはコンサートの一件で死んだことになり、ツヴァイウイングも解散するようにとのご命令だ。
なぜなら、彼をそばで見張りなおかつ殺せるほどの力を持つのは翼とあたしの２人だけだ。なら、復讐のためだけに生きてきたあたしが適任だろう。
あたしとしてはもう少し翼と歌っていたかったが、翼にこの役目をさせるわけにはいかない。翼にはあの輝くステージにまだいてほしい、これは単なるあたしのわがままだ。

細かい処理はダンナに任せてあたし達は比企谷の引き取りの手続きに向かった。
数日後、あたし達は柵の前にいた。比企谷の引き取り手続きが終わり、ようやく迎えにこれた。
ガラガラと音を立てて開く柵の中には拘束具にぐるぐる巻きにされた彼が椅子にくくりつけられていた。
彼の顔色は悪くこの数日でどのような扱いを受けたのかは想像にしやすい。

音に反応して、彼はこちらをみる。
「よお、コンサート以来だな比企谷、元気にしてたか。」
なるべく明るく話しかけてみるも彼の反応は無い。とりあえず一刻も早くこの場所から出した方がいいと思い。了子さんにお願いして鍵を外してもらう。
彼をニ課に運ぶ車の中で軽く了子さんが彼の体を見ていたが体のいたるところに痣があるのとろくな物を食べさせてもらえなかったらしく栄養失調らしい。
彼の行動のせいとはいえ、ここまでの扱いは流石のあたしでも酷すぎる。
彼は今回の件により人権の剥奪、彼の行動の責任は全てニ課が負うことになっている。ここまでの条件を全て飲むことにより、彼の再びの保護を認められたのだ。
そして、あたしと比企谷それに了子さんだけの独立機動部隊としてニ課の所属になるらしく、業務もほとんど変わらないがそれにプラスして呪具の研究成果を上げなければならないらしい。基本仕事の指示は全て了子さんから出るらしく、緊急の場合のみダンナに指揮権が渡るらしい。
スヤスヤとベッドで眠る彼を見ているとこれからの事はなんとかなりそうなのが不思議に思えてくる。
「目が覚めたら、なんであんなことをしたのか絶対に話てもらうからな」
眠っている彼にそう告げあたしは部屋を出た。

目覚めると…

～比企谷八幡ｓｉｄｅ～

目を開けるとそこは何度か見たことがある天井だった。というかニ課の自室だった。

あれ？俺はいつのまに帰ってきたのかと思い、覚えている最後の記憶を思い出す。

確か最後に覚えているのは誰かが牢に入ってきたところまでだ。それから、誰かが何か言っていたような気がするが覚えていない、そこから先の記憶はない。

帰ってきた覚えがないという事は、ここは夢の中だろうか？

辛い現実からの逃避行ってわけか。

「だけど俺には、逃げることは許されねぇよな」

捕まった後の扱いは、俺の想定していた物よりも酷いものだった。食べ物が出てくることはなく、取り調べとは言えないような事をされた。何度も蹴られ、踏まれ、殴られた。

阿修羅丸を使えばこの状況もなんとかなったのかもしれないが、また逃げ出せば今よりももっと風鳴さん達に迷惑をかけることになると思い実行することはなかった。

いつまでも逃避行はしてはいられない、だってこれは俺の行動の結果なのだから、ど

んな事をされようとそれから逃げるわけにはいかない。この平和な夢から覚めようとしたが…

「……あれ?全然目覚めないんだけど。むしろ、どんどん目が冴えてきたんだけど?」

色々な方法で目が覚めるような事をしてみたが一向に変化は無い。というかますます眠気が取れていくんだけど?

「……これって、もしかして現実か?」

そんなはずはないと俺は即座に首を横に振った。風鳴さん達には多大な迷惑をかけたのにまた俺を引き取るメリットがない。仮に引き取ろうとしたとしても国がそんな事を許すわけがない。

ならここは…

「あっ!わかったぞ、ここは天国ってとこか」

「違うぞ、ここは二課だぜ比企谷、頭でも打って混乱しちまったか?」

俺がここがどこなのかを考えているとドアが開きオレンジ色の髪をした女性が入ってきた。

ワァ、ナンカアモウサンミタイナヒトダナ、ウン、コレハユメダナ、ユメニチガイナイ。

いや、だって俺天羽さんと関わりとかないし!きっと、おそらく、多分。

しかも会ったのなんてコンサート会場以来だよ。
なのに、この人なんかすげぇ親しそうな感じで話しかけてきたんだけど。
しかも、俺の名前知ってるし。
「どうした?やっぱり頭でも打っちまったのか?」
「いやいやいや、頭なんて打ってないですよ、というかなんであなたがここにいるんですか?というかどうして俺は二課にいるんですか?俺は牢にいたはずなのに…」
「あーそういえばお前牢屋の中で気絶して今まで寝てたから事情知らねえのか…ちょっと待ってろ今了子さんに確認する」
そう言って了子さんに電話をかける天羽さん。

「……おう、了解だ。比企谷お前体は動かせそうか?」
天羽さんに聞かれたので、腕や足を軽く動かしてみると多少重く感じるが問題はなさそうだ。
「はい、歩くくらいならなんとかなりそうです。」
「そうか、なら付いて来い。今から行くところで全部説明してやる。」
「はぁ、一体どこに行くんですか?」
「これからあたし達が働くところだよ、そこであんたがなんであんな事をしたのかも聞

かせてもらうからな」
　そう言ってすたすたと先に行ってしまう天羽さん。
「ちょ、ちょっと待ってくださいって、働くところってなんですか？っていうか天羽さんも一緒に働くんですか？」
　俺の質問には行けば全部わかるの一点張りで何も喋ってはくれなかった。
　でも、あの行動の理由を聞かれるのは予想はしていた。また、ニ課の本部にいるということは、あの人たちにまた迷惑をかけたに違いない。
　本当にあの人たちには大きな借りを作ってしまったようだ。

　さっさっと行ってしまう天羽さんを追いかける。
　これから先の未来に不安を抱きながら…

～～～

「あっ、えっと歩くくらいなら問題ありません。それと…今回の件はとんでもない迷惑をかけたと思います、本当に申し訳ございませんでした。」

そして俺は頭を地面に思いっきり叩きつけて土下座する。勢いよくやりすぎて頭から血が出てきたが、今顔を上げるわけにはいかない。彼らには俺のせいで沢山の迷惑をかけてしまったであろう。当然怒っているに違いないと思っていたのだが…

「……顔を上げてくれ比企谷君、今回の件確かに俺たちには、少なからず責任問題が発生するだろうが、子供ってのはな大人に迷惑をかけてなんぼな生き物なんだよ。これくらいの迷惑を受け入れられなくて大人なんてやってられんよ」

「えっ?あ、あの怒ってないんですか?新宿をあんなにめちゃくちゃにしたのに…」

しどろもどろになりながら俺は風鳴さんに聞き返す。

「その件だが、建物や道路などの損害は酷いものだったが、行方不明者及び死傷者はゼロだ。それに命があれば何度だってやり直せるのさ……まぁしばらくは始末書地獄だが、そんなことは気にするな。代わりになんであのようなことをしたのか教えてほしい。君のことを全て知っているわけではないが、君が理由もなくあのようなことをするようには思えんのだ。」

そう言ってニカッと笑う風鳴さんは本当にかっこよくみえた。怒られるとそう思っ

ていたのに、この人は子供の迷惑だから許すとそういっているのだ。これが本当の大人ってやつなのだろうか。

気づいたらいつのまにか目から涙が流れていたらしく、天羽さんがハンカチを渡してくれた。いつもの俺なら断っていたが、今はありがたく使わせてもらった。

しばらくして、落ち着いた俺は天羽さんにハンカチは洗って返すと伝え、本題に入ることにした。

「それでは、俺がなぜあのような行動したのかを説明します……」

それから俺は、立花の噂をなんとかしようと考えていた時に阿修羅丸に誘われてそれに乗ってしまったこと、その時さらに代償として阿修羅丸に侵食されたこと、そして新宿での凶行に至るまでを全て話した。

全ての話を話し終わった後、風鳴さんがこちらに近づいてきて思いっきり抱きしめられた。

「比企谷君、君がやったことは到底許されることではない。しかし、君は本当にそれだけのことで事を起こしてしまえるのだな。だが、1つ言っておくぞ比企谷君。君の方法では、本当に誰かを助けたくなった時助けられないぞ」

だから、大人である俺たちをもっと頼れと背中をバンバンと思いっきり叩かれた。

少し苦しくなってきたので、肩をタップして離れてもらうように促す
「?ああ、すまない少々苦しかったか、今離れる」
「い、いえ、大丈夫です、少し苦しかっただけですから」
風鳴さんが離れると先程まで何か考えている様子だった天羽さんがこちらにやって来る。
「…なぁ、お前はそれだけのためにあんな事をしたのか?」
そう聞いてくる天羽さんに俺は
「はい、そうです。立花自身は望んでいないのかも知れませんが、これは単なる俺のエゴです。それに例え何回やり直したとしても俺は必ず同じことをすると思います。だって、おかしいでしょう、あのコンサートを大怪我を負って生き延びたのに根も葉もないうわさでこれ以上傷ついて欲しくなかったんです!」
これ以上辛い思いはして欲しくなかったとそう天羽さんに告げる。
牢での疲労が取れてないせいか、われながら珍しく感情的になってしまった。
しばらく考え込んでいた天羽さんがこちらを見る。
「……そうか、納得はできないが理解はできた。だから、これからは危なっかしいお前をあたしが守ってやるよ」
よろしくなと差し伸べられた手にどうしたらいいのかわからなくなってしまう。

え？これからよろしくって何？それに守るってなんだよとフリーズしている俺を見て察してくれたのか了子さんがあの事件の顛末を語ってくれた。

まず、国の決定は俺こと比企谷八幡は、櫻井さんと天羽さんとの独立部隊を新しく設立しそこに配属になること、そして、俺はコンサートで死んだ扱いなのは変わらないらしいのだが、新宿の件により人権の剥奪、そして、行動するときは常に監視と一緒に行動すること。もし、少しでも怪しい動きをすれば監視により処刑されること。

ここまで聞いておかしな点がいくつかある。

まず、俺がコンサート会場ですでに死んでいるのなら新宿の件は、誰が犯人として発表するのか聞いたところ、仮面のお陰で顔がばれていなかったので、国がすでに架空の戸籍を作りそれを犯人として発表すること、そして、俺が使っていた阿修羅丸に対しては、どこかの研究所で人体実験により手に入れた力だと発表し、詳しい解剖はまだ終わっていないと発表したそうだ。

少し無理矢理感があるが、なんとかこれで国民の不満を解消することはできたと櫻井さんは言っていた。それに情報操作はあたし達の十八番だからねとも。

で、次に気になった監視について聞いてみた。まさか、俺を捕まえにきた黒服の人たちとこれから先永遠に過ごすのではないかと思うと少し気持ち悪くなってくる。だが、そんな心配をよそに櫻井さんは天羽さんに指を指す。

???なんで天羽さんに指を指すのだろうか？
「櫻井さん、監視について聞いてるんですよ、なんで天羽さんを指さすんですか？」
「あれ？言ってなかったかしら、あなたの監視は奏ちゃんがやるのよ」
「え？う、嘘ですよね。だって監視ってずっと一緒にいるってことですよね、女子とずっと一緒とか俺死んじゃいますって、それに天羽さんだって嫌でしょうし、それにアイドルですし俺と一緒にいるところとか見られたら大騒ぎになっちゃいますよ」
とあまりの事態に驚き、まくし立ててしまった。すると口を開いたのは櫻井さんではなく、天羽さんだった。
「…あんたの監視はあたしが引き受けたんだ、文句を言う気はない。それにツヴァイウイングなら解散することに決まった、あんたの監視をするにあたって、あたしもコンサードでの怪我が悪化して死亡したと国が発表するらしい。」
天羽さんから衝撃の発言を受けて、俺は何も言えなくなってしまう。
天羽さんが死んだことになり、それにツヴァイウイングもやめるって…そんなのあまりにも…
「勘違いすんな、これはあたしなりの恩返しだ、あんたがコンサート会場で助けてくれなければ、あたしは今ここにいない。どちらにせよ死んでいたってわけだ。だから、助けてもらったことへの礼はこれで返させてもうぞ」

と天羽さんが言うが、恩返しなど俺がしたことに比べたら大きすぎてお釣りがいくらあっても足りないくらいだ。返せるあてもないのにこんなに大きな借りを作ってしまうなんてな。

「それにあんたは国からの命令を拒否することはできないから諦めな」

まぁ、そうだよな、あれだけの事をしておいて死刑にもならず、二課で働くことと監視がつく事なんて緩い条件になったのはきっと二課の人たちが頑張ってくれたのだろう。受けた恩は死んでも返さないといけないしな。

俺は再び頭を下げた。先程とは違い土下座ではなくお辞儀、これからよろしくお願いしますとそう言う意味をこめたものだ。

「これからお世話になります。今回の件で皆様に多大な迷惑をおかけしましたが、このご恩はこれから先死んでも返していくのでよろしくお願いします。」

ところどころで拍手が起こる。だが、再び天羽さんが口を開く。

「あんたは死なせないって言っただろ。だから、死なない程度に返してくれ」

そう言って天羽さんは俺の頭を撫でる。

ああ、本当にこの人だけには、一生頭が上がらないきがする。

再び現在へ…

～比企谷八幡ｓｉｄｅ～

あれから2年か…時間が経つのは早いものだな。それもそうか、この2年色々あったしな。

俺は側で作業している奏さんを見る。俺の行動のせいでアイドルを辞めざるを得なくなった奏さんは今は政府の命令により、俺の監視をしているわけだが本当は翼さんと一緒に再びステージに立ちたいと思っているのではないか。

以前天羽さんに聞いてみたことがある、その時は…

「うん？翼と一緒にステージでまた歌いたいかって？そりゃあ、まあ歌いたいさ、でもさ、あたしは今の生活も気に入ってるんだぜ、あたしと了子さんと八の3人での研究や任務なんかをさ、それにステージじゃなくたって翼と歌うことはできるしな」

そう言いながら遠くを見つめる奏さんは少し悲しげだった。

奏さんが、シンフォギアを手に入れるのも、アイドルになるにも死ぬ気で努力をしたときいている、言葉のあやなどではなく、文字通りの死ぬ気でだ。

それを奪ってしまった俺は、もう何もこの人から奪わせるものかと誓ったのだ。

こちらをみているのに奏さんが気づいたらしい。
「なんだよ八?あたしの顔になんかついてんのか?」
俺は首を横に振る
「いやなんもついてねぇよ、それよりまだ見つからないのか?ここまで来て何もないとか無駄骨すぎるだろ」
上手いこと話を誤魔化して、今回ここにいる目的について話を変える。
俺たちは今砂漠にある古代遺跡で反応があったらしい呪具の調査に来ているのだが、一向に反応がない。
それにそもそものここに了子さんが来ていないのに俺たちだけで呪具を探せというのが無理すぎる。了子さんはなんか重要な仕事があるらしく今回は奏さんと俺と残りは調査員の人たちだけの調査なのだ。
了子さん的にはあったらラッキーくらいのものだと思って行ってきてと言われているが、こうも何もないとは流石に思わなかった。
とりあえずこうも発見がないと了子さんに連絡を取った方が良さそうだ。
「奏さん一回了子さんに連絡とりませんか?こうもなにも無いと俺たちだけでは見つけられませんよ」
「ああ～たしかにそうだよなぁ、素人のあたし達には限界もあるしな、一回連絡取ってみ

るか」
　その時調査員の1人がこちらに向かって走ってくる。慌てている様子から何かあったのだろうか?
「天羽さん風鳴司令から緊急通信です、失われていたネフシュタンの鎧が見つかったそうです。」
「なっ!」
　ネフシュタンの鎧とは、二年前のコンサート会場での出来事の時に無くなった完全聖遺物で、コンサートはフォニックゲインと呼ばれる歌の力によりネフシュタンの鎧を起動させるためのものだったと後から聞いた。
「それは本当か! 一体どこにあったんだ!」
「ほ、報告によりますと少女が纏っていたらしいです、それ以上のことは何もわからないとのことです。」
　奏さんの気迫にたじろぎながらも報告を終えた調査員はそそくさとその場を後にする。
「奏さんどうしますか?このままここにいても…」
「わかってるって!今すぐ日本に戻るぞ、みんなに準備をするように指示してくる」
　そう言って、テントがある方に走って行ってしまう、俺を1人残して。

「まったく奏さんらしい。…それにしてもネフシュタンか…なんで今頃出てきたのかね」
しかも報告によると少女が纏ってるときた。今まではノイズが相手だったからいいものの、もし敵が人だとしたら俺は……闘うことができるのだろうか

～～～

をくらましたらしく、少女を倒すために翼さんが絶唱を謳ったとのことで、一命はとりとめたようだが危険な状態らしく、それに目も覚めていないらしい。

それを聞いて奏さんはいてもたってもいられないらしくさっきからずっと落ち着きがない。

「翼ぁ、ぜってぇ死ぬんじゃねえぞ、あたしが行くまで頑張ってくれよ」

奏さんは翼さんのことで頭がいっぱいのようだが、俺には気になることがある。いや、翼さんのことはもちろん心配だよ、だけどそれよりも新しい装者ってのが誰だってことだよ。装者ってのは、聖遺物を纏って戦う人のことだが、了子さんによれば聖遺物を纏うもとい適合するということはとても難しいらしく、成功例はほとんどないらしい。ここにいる天羽さんも前までは時限式のギアを使っていた。

今は…おっとそんなことより、新しい装者の話だ、司令に聞こうと思ったのだが奏さんが翼さんのことを事細かに聞いているせいで、聞いている時間はなかった。

日本に着くまでの間俺は新しい装者のことを考え、奏さんは翼さんのことを考えていた。

～～～

〜空港〜

「八!!?遅いぞ、早くしろ」

「ちょ、ちょっと待ってくださいって…」

空港に着いた瞬間奏さんはすぐに降りて待ち合わせ場所であるエントラスへと向かっている。

前を進んでいる奏さんを必死に追いかけながらエントラスへと向かうと、司令と了子さんそれにあれは…

「弦十郎のダンナ!!?翼の容態はどうなんだ!無事なんだろうな!!?」

見つけた瞬間に司令に駆け寄って行く奏さんに周りは驚いていたが、そんなことよりも俺は司令たちと一緒にいる少女を見て固まっていた。

俺の見間違いではなければ、いやそんな訳はない、なぜ彼女が…

「立花…」

「お、お兄さん?」

俺たち2人は互いを見つめ合っていたが、次の瞬間には腹部に鋭い痛みが生じる。

「お兄さんお兄さんお兄さんお兄さん…」

そう、立花が俺の腹部にタックルをかまして、そのまま頭を胸に擦り付けたまま、俺

のことを呼び続ける。
　それからしばらく立花が俺から離れる気配はなかったが、場所を変えて話をすることになり、渋々離れてくれた。
「ほんとうにお兄さんなんですよね…に、偽物じゃなくて、本物の…」
　泣きながら尋ねて来る立花にどう応えたものか考える。俺のことは機密のはずなので話していいわけではないが、司令が連れて来ているということは無関係ではないのだろう。なら…
「…ああ、本物の比企谷だ、すまんな今まで黙ってて迷惑かけたな」
「い、いえ、そんなことは、無いです、私、私ずっと…」
　また泣き出してしまう立花の頭を昔小町にしてやってたみたいに撫でてやると
　だんだんと落ち着いてきたらしく、俺から一歩離れて距離を取る。
「あの後私、私のせいでお兄さんが死んじゃったんじゃないかってずっと思ってて、でも…でも…生きていてくれて、ほんとうによかったです」
　さっきまでとは違った明るい笑顔で立花は無事を祝ってくれる。
　そして、また抱きついて頭を擦り付けて来る。
　自分でもまさかここまで立花に自分の死が影響を与えていたとはおもわなかった。
自分の失態のせいで立花が責任を感じていたとは…

「すまんが感動の再会は後にしてもらってもいいかな、場所を移動してこちらで何があったのかを説明しようと思う。」

いいかなとこちらを確認する司令を見てみると先ほどの奏さんよりも人目を集めている。

そりゃそうだ、二年を経て美人になった立花が腐った目の男に抱きついて頭を擦り付けていれば何かしら如何わしい感じがするだろう。

そそくさと立花を連れてその場所を離れる。

そのあと、司令に連れられて車に乗る。

二課に向かう車の中で立花は俺から離れることはなく、泣き疲れたのか俺の肩ですぴーと寝息を立ててねていた。

肩で寝ている立花の顔を見ていると憑き物が取れたような晴れやかな寝顔だった。

彼女が奏者になった理由

「さて、それじゃあこちらで起こったことを話そうと思う」
あの後無事に二課にたどり着き、そのまま司令室まで案内された。
そして一服したところで司令がこちらで何かあったのかを話してくれるそうだ。
ちなみに奏さんは翼さんの病室に了子さんと一緒に向かったため、今いるのは目の前の司令と俺から離れない立花と俺、そして翼さんのマネージャーを務めている緒川さんだ。
「どこから話したものか…」
どこから話せば良いものかと悩んでいる司令に俺は今一番聞きたいことを告げる。
「あの、立花が奏者になった理由というのはなんなんですか?」
「ん?…そうか、それじゃあ響くんの経緯から話し始めるとするか」
そう言って司令は立花がどうやって奏者になったのかを少しずつ話し始める。
「融合症例?融合症例ってなんですか?それに立花は何と…」
「きっかけは二年前のコンサート会場だ。そこで響くんは奏のガングニールの破片が胸に突き刺さり死にかけた。」

そこには君もいただろと司令が問いかける。確かな二年前のあの日、立花は奏さんのガングニールの破片を胸に受けて危険な状態だったが、奇跡的に生き残ったのだ。
「そして、その時に受けた奏の破片は今の技術では摘出不能とされ今も彼女の胸に残っている。」
「胸に残ってるって、それは問題ないんですか?」
「ああ、日常生活を送る上では問題はなかったはずなんだ」
問題はなかったはずって、ならなんで立花が今ここにいるのだろうか。彼女には小町たちと三人で平和な暮らしを送って欲しかっただけなのに…
俺は隣で寝ている立花を見る。安心したような眠る立花を見ると彼女の現状が嘘のように思える。
司令はだがと話を続ける
「先日ノイズがこの近辺に出現してな、その時に彼女は小さい女の子と一緒に逃げていたようなのだが追い詰められたらしく、死ぬのを覚悟したそうだ。するとな…」
そこから先はなんとなくわかる、司令の話を遮って確認する。
「…胸に歌が思い浮かんできたんですね」
「その通りだ。そしてそのあと響くんを二課に連行して検査を行ったところ彼女の胸からガングニールが発見されて、ガングニールとの融合が確認されたというわけだ。」

なるほどな俺自身未だ整理できてはいないので推測になるが、立花の死にたくないという願いがガングニールを起動させたというわけか
「それでだな響くんにもニ課に協力してくれないかって話をしたんだが、なんて言ったと思う？」
立花がニ課に協力する理由？そんなものは俺が知る限りでは思いつかない。だが、昔から一直線だった彼女ならきっと誰かのためにとかそんな理由なのではないだろうか、
俺がなかなか答えを見つけられないのを察したのか司令が口を開く。
「響くんはな、ニ年前からずっと君を助けられなかったことを後悔していたんだ、だから二度と君みたいな犠牲を出さないために私にできることならお手伝いしますだとさ」
「っ!?」
会った時から彼女が俺の死について後悔していたのは知っていたがここにいる理由まで俺のせいなのか…
だとしたら俺は死んでも立花の枷になっていたのか…
俺は立花たちの幸せを願ったが立花は今いつ死んでもおかしくない職場にいる、それも俺のせいで…なら俺のやったことは全て無駄だったのか
「それは違うよお兄さん」
いつのまにか起きていたのか立花がこちらに近づいてくる。

「何が違うっていうんだ、俺は…俺は…」
「お兄さん、あのね私あの時死んじゃうんじゃないかって思ったんだ。でもさ、お兄さんが助けてくれたんだよね？私はあまり覚えてないけど小町ちゃんが教えてくれたんだ。私はすっごく嬉しかったよ助からないって思ってたのに私も小町ちゃんも生きてたんだもん。でもね…」
　立花が俺の頭を両腕包んで、抱きしめてくる。
「お兄さんが死んだって聞かされた時はすっごく悲しくなったんだよ、司令にお兄さんの遺言を聞かされた時は三人で一日中泣いてたんだよ。だからね、その時決めたんだ私、お兄さんみたいな人が出ないように私にできることを頑張るって」
「だけどそれじゃあ…」
　俺が言おうとしたことを遮って立花は話を続ける。
「お兄さんは私たちに危険な目にあって欲しくなかったんだよね。でもねそれは私たちもおんなじなんだよ、私たちもお兄さんに危険な目にあって欲しくなかったの。だから、協力してくれって言われた時はお兄さんみたいな人を出さないために協力することに決めたんだ。それに、司令からお兄さんが生きているってことを聞いた時はすっごく嬉しくて嬉しくて嬉しかったんだ。」
「そうか、だが俺はどんな理由があれ、お前たちが傷つくことを許すわけにはいかない、

立花に譲れないものがあるように俺にも譲れないものがあるんだ」
俺の反論に立花は一瞬驚いた表情をしていたがすぐにもとにもどる。そして次の言葉に俺は呆然としてしまった。
「そっか、ならさ私はお兄さんみたいな人が出ないように頑張るからさ、お兄さんは私が傷つかないように守ってよ」
「は？」
そうすればどっちの意見も通るよとキラキラとした目でこちらを見てくる。
へ？いやいや、さっきまでシリアス展開だったのに今じゃ立花のおバカ発言ですっかり空気が変わっている。緒川さんなんてこっちを見ながらなんか生暖かい視線を送ってきてるし、司令に関してはうんうんって頷いてるし、そもそも戦場で怪我をしないように守るとかどこのクソゲーだよ、そんなの通るわけが…
「お兄さん、だめ？」
うぐっ、それはずるいぞ立花どこでそんな上目遣いなんて高等テクを学んできたんだ、いやしかし、このやり方なんだか見たことある気が……あっわかったぞ小町だな、これは今度会った時にお仕置きだな
俺は一度頬を叩き気持ちを入れ替える。
……いや俺には今度なんてなかったな、それに立花は戦場を舐めている。誰かを守っ

て戦えるほど俺は強くないし、戦場とは何が起きるかわからないものだ。隣で戦っていた仲間が次の瞬間には死んでいることだってあるんだからな、だからここは…
「比企谷君、俺からも頼む。それに響くんはまだ戦場に立たせるわけにはいかないからな、なのでノイズ発生時の避難誘導などでの面での協力を考えている」
「私からもお願い、お兄さん」

「はぁ、わかりました立花のことを認めます、けど絶対にノイズとは戦わせませんからね、何があっても」
　２人からの熱烈なアプローチを受け結局俺が妥協することになった。
「約束しよう、響くんには避難誘導のみをしてもらう、戦闘行為は禁止だ。ノイズと遭遇した場合は、逃げるか応援を求めるんだ、わかったか？」
「わかりました司令、逃げるかお兄さんを呼べばいいんですよね」
「ああ、もうそれでいい……それで司令ネフシュタンの鎧が見つかったっていうのはどういうことですか」
　応援がなぜ俺限定なのかはさておき、そろそろ例の鎧についての話を聞いてみる。
　先程までの雰囲気とは違い真剣な表情になる司令。
「そのことなのだが、先日響くんと翼がネフシュタンの鎧を纏った少女と交戦し、その時

翼は絶唱を歌い少女を撤退させることに成功したが、絶唱の反動で今も翼は予断を許せる状況ではない。」

概ねのことは聞いていたがやはり驚きを隠せない、あの翼さんが絶唱まで歌ったのに倒しきれないなんて、やはり聖遺物の欠片と完全聖遺物との差は埋めようがないのだろうか。それにしても、ネフシュタンを纏っている少女は何者なのだろうか。司令に今わかっている少女のことを聞いてみるり

「司令その少女について何かわかっていることはないんですか?」

「それなんだが、彼女については全くわかっていないんだ、それに加えてノイズを操る道具も持っていた。そこから推測するに近頃のノイズ発生の大元の原因は彼女にあると思われる。」

目下少女の行方を捜索中らしく、ネフシュタンを纏っていたこととノイズを操る道具を持っていることしかわかっていないらしい。

それにしても、ノイズを操る道具ときたか…

ネフシュタンの鎧だけでも十分な脅威だが、ノイズを操れるとなるとこれから戦う際の被害がますます増える気がする。それに…もしその道具が二年前も彼女の手にあり、何かの目的で使われていたとするのなら俺は彼女を許すことはできなさそうだ。

「これから対策を練ろうと思うのだが、比企谷君たちに関しては帰ってきたばかりだ少

し休んでからにしよう」
「わかりました、それじゃあ少し部屋で仮眠を取るのでミーティングを始める時間になったら起こしてください」
そう言って、部屋を出て自室に向かおうとすると服を引っ張られる
振り向いて確認すると
「…立花か、どうしたんだ?」
両手で俺の服を引っ張り行かせまいとする立花にどうかしたのかと問いかける
「お兄さんまたどっか行っちゃうの?またお兄さんがいなくなったら私…私」
涙目でどこにも行かないでと訴えてくる立花、だが、しかし久しぶりの自室のベッドでゆっくり眠りたいと俺の本能が訴えている
「ああ~えっと自分の部屋でちょっと寝てくるだけでどこにも行かねえよ、それか、あれだ、今までの小町たちの近況を聞かせてくれないか?」
「うん!わかった!それじゃあ早く行こうお兄さん」
結局立花の涙目には抗えず久しぶりのベッドでの睡眠はしばらく後になることが決定した。
ていうか、俺立花に弱すぎやしないか、さっきから何一つ立花に逆らえていない気がする。

だとすればそれは立花に対する罪悪感からくるものだろうか、それとも…
そんなことを考えながら立花に引っ張られていた。
二課のみんなが生暖かい視線でこちらを送り出していた。

鎧の少女

「お兄さん！お兄さん！」
　俺のことを呼びながら立花が俺の肩を揺すってくる。
「お、おうなんだ立花」

「お兄さん私の話聞いてた？眠ってるように見えたけど？」
「い、いやちゃんと聞いてたぞ、聞いてないわけないだろ、ははは」
「じゃあ、なんの話してたか言える？」
　マズイマズイ、疲れからか立花を自分の部屋に連れてきてから眠気が襲ってきたのだ。なんとかそれに抗いながら立花の話を聞いていたのだが、少し眠っていたらしい。そのせいで何の話をしていたのかまるで思い出せん。
「えっ～とあれだろあれ、ほら、その、はい……寝てました」
　立花の疑いの目線に耐えられなくなり、素直にゲロってしまった。
　当の立花といえば俺が聞いていなかったのがお気に召さなかったらしく、可愛らしく頬を膨らませて怒っている。

「立花、その、寝ててすまん。立花が良ければもう一度話してくれないか？」
「……もう、次は寝ちゃダメだからね」
「わかってるって、次寝たらなんでも言うこと聞いてやるよ、俺のできる範囲でだが」
すると、先程までの怒った様子から一転して目を爛々と輝かせてこちらを見つめる立花
「ほんとに！ほんとのほんとに？なんでも言うことを聞いてくれるの？」
「お、おう、ほんとのほんとだ」
あまりの立花の豹変ぶりに軽くびびっていた。
これもしかして、とんでもない約束をしてしまったのではと今更ながら後悔していた。
眠らないためにエナジードリンクを飲もうと冷蔵庫に向かうと…
部屋全体にアラートが鳴り響く、これは…
「っ!!お兄さん、この警報は…」
ｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉ
立花が言い終わる前に俺の携帯に電話がかかってくる。俺はすぐさまポケットから携帯を取り出して電話に出る。
「比企谷君か！また市内にノイズが現れた今すぐ戻ってきてくれ!!」

「わかりました、すぐ立花を連れて戻ります」
やはり、この警戒音はノイズ発生の知らせということで、さらに司令の焦り様からして結構な数のノイズが出現した可能性が高いな。
俺はすぐさま立花の手を引き自室から司令室へと走っていく、その際立花が何か言っていた様な気がするが今はそんなことを気にしている場合ではないと無視して、一刻も早く司令室へと急いでいた。
「お、お、おおお兄さんが、わ、私の手を握ってる／／／」
一方、立花の方はいきなりの出来事に戸惑っていた…
「…お兄さんの手大きいなぁ、それにあったかい…えへへ／／／」
…のか？

～～～

「戻ったか比企谷君、さっそくで悪いがこのまま響くんを連れてノイズの殲滅及び、逃げ遅れた住民の避難に向かってくれ」
詳しい状況は車で向かいながら伝えると言われ、またもや立花を引っ張りながら司令に言われた場所へと向かう。

指定された車に立花と一緒に乗り、司令との通信を行う。
司令によると、ノイズは複数箇所に同時に出現したらしく、避難も間に合っていない最悪な状況の様だ。
それに加えて、今戦えるのは俺と奏さんの２人だけである。立花に関しては避難誘導に徹してもらうので戦力に加えない、それに翼さんは重症で今は動けないそうだし、２人で複数箇所はキツイものがあるが、なんとかするしかない。

…それにしても先ほどから立花が静かすぎるような気がするが、まさかノイズに対して怯えているのだろうか？
立花の様子がおかしいので一応確認しておくか
「立花、お前大丈夫か、ノイズとの戦いになるのが怖いのか？さっきからお前様子がおかしいぞ」

「ふぇ?」
ふぇってなに?あれまさか様子がおかしそうだったのは俺の勘違いか?もしかして、また黒歴史増やしちゃったパターンこれ?いいもん、もう八幡お家帰る……って言っても帰る家とかもうないんですけどね、それに気持ち悪いし
「い、いえ、全然大丈夫です、立花響いつもより数十倍元気です!!!」
「お、おう、それならいいんだが、お前はノイズとの戦闘を極力避けて逃げ遅れた住民の避難に徹してくれわかったな?後、俺の見える範囲からいなくなるなよ助けられなくなる。」
立花の変わり様に多少ビビってしまったが、ノイズへの恐怖とかではない様なので、とりあえず今回の立花の役割と注意事項を伝えた。

現場に着くと周りにはノイズにやられたのであろう人たちの残骸もとい炭がところどころにある。さらに、目視できるだけで１００以上はいるであろうノイズたちを見てみれば、でかいやつから小さいやつ、空を飛んでいるやつなどがいる。
まるでノイズの動物園にでもきた様な気分で最悪だ。
それに見物料に命を取られるなんてたまったもんじゃない。

「立花は、俺より前には出るな、ノイズと接触することになる。俺より後ろで逃げ遅れた連中の避難誘導をしてくれ、それと散々言ったがノイズとの戦闘はどうしてもって時以外は避けろ、ネフシュタンの鎧が出ても同じだ。俺か奏さんに連絡を入れろそうしたらすぐに助けに行くぞ、奏さんが」
「わかりました……ってお兄さんはきてくれないんですか⁉?」
「いや、うん、その…行けたら行くわ」
「それ絶対来ない人のセリフですよ‼?」
なんとまあノリのいいツッコミだこと。
だがまぁ、あまりふざけてはいられなさそうだ。
先ほどからノイズたちがこちらに向かって来ている。
さっさと行けと立花に言おうとしたら立花が口を開く
「私、お兄さんのこと信じてるんで大丈夫です、立花響行ってきます‼?」
一方的にそう告げて立花は避難誘導へと向かった。
いやまぁ、本気でピンチになったら、助けないことはないが……
「そんなことにならない様に、俺がここに立っているんだけどな」
俺はポケットから了子さん特製の侵食を抑える薬を飲んで、阿修羅丸を手に取り叫ぶ、俺が纏う鎧の名を

その名は……『ガングニール』天羽奏が纏っていたシンフォギアだ。
それを阿修羅丸が取り込み俺用にカスタマイズされたものだ。
それに2年という月日を経て、今では刀を胸に刺すモーションをしなくても変身できる様になった。
代わりに侵食も増したが、後悔はしていない。
だって、一々胸に刀を刺すと痛いし、変身時間が長いからノイズにやられるかもしれないだろ？
と、バカなことを考えているうちに俺の身体は黒い瘴気を纏った黒いガングニールを身に纏っていた。
そして、右手には黒く光る緑色の刀、阿修羅丸を手にしている。
今ではこんなに簡単にできるが慣れるまでには相当の時間がかかったものだ。あの時の了子さんを思い出すだけで冷や汗が止まらん。
そんなことを考えていたせいか、いつのまにか目の前にノイズがいた。それはもう、目と鼻との先ぐらいの距離に
「あっぶねぇ」
後ろに思いっきり飛び攻撃を躱す、今のは間一髪のところだった。
俺が先ほどまでいた場所にはノイズの鋭い腕が地面にに突き刺さっていた。

そして先ほどまでのことは全て後回しにして今は目の前の敵にだけ集中するとしよう。

とりあえず今攻撃してきたノイズを一閃する。

炭となり消えたのを確認してから近くのノイズを斬り伏せて行く。

1体、2体、3体…と近くにいるノイズを斬り伏せて行くが、一向に減っている気がしない。むしろ増えているんじゃないかと思うほどだ。

『そんな、攻撃じゃあいつまでたっても終わらないよ八幡』

そんなことはお前なんかに言われなくてもわかっている。

『へぇ～ならどうするの？』

1体ずつ倒して行ってもらちがあかないのなら、一気に削るしかない。

俺は阿修羅丸に力を集中する。すると、阿修羅丸は先ほどよりも深く黒く光り始める。そしてそれを目の前のノイズたちめがけて振り下ろす。

「纏めて、吹き飛べ!!?」

激しい爆発音とともにノイズたちは吹き飛ばされて行く。それと同時に砂煙が舞う。

『うん、正解だけどその程度じゃあ…』

徐々に砂煙が晴れてくると、目の前には未だに大量のノイズがこちらに向かって来ていた。

そんなことは、阿修羅丸に言われなくてもわかっている。今のだって阿修羅丸を使うために覚えたエネルギー操作の応用でしかない。数十体は倒せても今のように何百体も相手だとただのジリ貧でしかない。

それでも、使った理由はこれを使うためだ。

「影操」

そう言った瞬間阿修羅丸に黒いオーラが纏わりつく。先程とは違う深い深淵のようなオーラは、阿修羅丸を覆うように伸びていき、最終的にはおよそ2メートルくらいの長さになった。

そして、それを力任せにノイズ目掛けて振り下ろす。

「これで、終わりだ‼?」

次の瞬間にはゴオゥンと先程とは比べようのないほどの轟音と地響きと共にノイズが消えていく。

激しい衝撃のせいで地面には無数の亀裂がはいっている。

目の前を見てみれば先ほどまで数百体いたノイズもかなり減らすことができたようだ。

この調子なら後数十分で立花たちの応援に向かうことができそうだな。

残りの残党をパッパッと片付けようとした阿修羅丸を構えたが…

カキンカキン

何者かの攻撃を阿修羅丸で防いで距離を取る。攻撃して来た方を見ると白い鎧を来て両手にムチを持った少女が立っていた。

「おいおい、アタシ様の攻撃を防ぐたぁ中々やるじゃねぇか」

こちらを不敵に笑いながら見てくる少女は、痴女だった。

新たなる槍

俺たちは突然街に現れたノイズたちを倒していたのだが、全滅させる目処がたったところで目の前の痴女に襲撃された。

目の前の痴女は、両手にムチのようなトゲトゲの武器を持ち、白い鎧を纏っている。だが、その白い鎧はあろうことか胸の下部分にはついてなく、側から見ればただの痴女である。

俺はそれとなく彼女から視線を外す。流石にあの鎧を直視してたら速攻で捕まる未来が見える。いやでも、この場合は外に来て出歩いている方が捕まるのだろうか？いや、それでもお前が無理矢理着させたんだろなどとあらぬ疑いをかけられてそのままお縄につきそうだ。やはり、この腐った目か、この腐った目が悪いのか‼？

「おいおい、このあたし様を無視するたぁいい度胸だ。一発目は運良く防いだようだが、二発目はどうだ‼？」

痴女はどうやら俺の態度が気に入らなかったらしくトゲトゲのムチをこちらに向かって振りかざす。

「つぶねぇ‼？」

目の前まで迫っていた痴女の攻撃を間一髪で回避する。
それにしても、白い鎧に少女とくれば司令が言っていた翼さんを倒したやつだ。それにここ最近のノイズの異常な出現率についても関係があると思うべきか…
まぁ、あの痴女が司令の言っていた少女ならば彼女が纏っているのは完全聖遺物のネフシュタンということになる。流石に呪具でも完全聖遺物相手は分が悪いな。
それに今の攻撃であのムチが伸びたことから伸縮自在の可能性がある。
俺はバリバリの近接戦闘特化だから、リーチが変わるのは少し、いやかなりやりづらい。
こうして、考えている今も彼女の手が休むことなくこちらに襲いかかっているわけだが、俺もそれをなりふり構わず避けることで直撃は避けている。だが少しずつ相手の攻撃が俺を捉えはじめている。
「オラオラ、どうした避けることしかできねぇのかよ、ちっとはやり返してこいよ、これならまだ青髪のやつの方が手応えあったぞ」
痴女が言った青髪とは翼さんのことだろう。
そもそも俺は翼さんに練習相手をしてもらった事があったが、俺は模擬戦では翼さんに今の今まで一度も勝ったことがないのだ。
だから、彼女が勝てなかった敵を彼女すら倒したことがない俺が勝てる見込みはほと

んどないだろう。
だが、例え勝てる見込みが無かったとしても、こんな厄介者と親しく接してくれた相手をボコボコにされて黙っていられるほど俺の心は腐っていない。
「これで終わりだぁ!!?」
痴女の攻撃が目の前まで迫る。左右からの攻撃で俺の後ろにはでかい岩がある、これでは上空に逃げたとしても直撃はさけられないだろう。
結論から言うと俺の逃げ道は完全に断たれている。

「影深」
俺は短く告げ影に落ちる。俺を狙った一撃は対象を失ったことで、岩にぶつかりその岩を粉砕する。
「なっ!!?あの一撃を避けたのか。へぇ、逃げることに関してはあの女よりは上みたいだな」
必殺の一撃を避けられて驚いている彼女を見ながら影に潜り彼女の隙を狙い好機を待つ。それにどうやら敵さんには俺がどうやって避けたのかまではわかっていないらしく、辺りをキョロキョロして俺を探している。
しばらく、俺がどこにいるか探していた彼女は探すのがめんどくさくなったのか、辺

り構わず攻撃をしはじめた。
「ほらほら、早く出てこないとここら一体焼け野原になっちまうぞ。いいのかよ、あんたらの仕事は被害を最小限に防ぐことも含まれてるんじゃないのか？」
ほう、どうやら敵さんは俺たちニ課について、知っているらしい。それも詳しくな。
こちらの仕事内容までバレていると言うことは内部に共犯者がいる可能性が高い。
それに彼女が言ったこともあながち間違いではない。このままここら辺を焼け野原にされると後で始末書の束を書くことになりそうだ。
まぁ始末書だけで済めばいいけどな。戦闘終わって次の日からここの復興の手伝いなんかさせられた日にはさすがの俺も過労で死ぬぞ。
俺は彼女の後ろまで移動して影から浮上して、思いっきり背中に斬りかかる。
「なっ、後ろからだと!!?」
敵の死角からの完璧な奇襲。死にはしないだろうが、深手くらいはおわせるつもりで切りかかった。

だが、阿修羅丸の刃はネフシュタンの鎧にかすり傷1つつけることはできなかった。

「はっ！何だよその程度かよ、今のが全力だと？そんななまくらじゃあ、あたしに傷１つつけられるわけねぇだろ」
そのまま彼女の振るう二本のムチの直撃を全身にくらう。
彼女の攻撃は俺の纏っているガングニールの鎧を砕きながら、俺をそのまま後方に吹き飛ばされる。
「ぐぇっ」
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。
全身をナイフで切り刻まれたような痛みだ。
彼女の鎧に傷１つつかなかったことに驚きすぎて、防御行動を取るのが遅れてモロにくらっちまった。
鎧は攻撃を受けた部分がえぐれている。次に同じ攻撃を食らったら確実に終わりだ。
だが、阿修羅丸はネフシュタンの鎧に傷１つつけることはできなかった。
このままだとどう転んでも俺がやられる未来からは逃れようがない。
せめて、ネフシュタンの鎧に傷をつけることができれば、あるいは…
すると突然阿修羅丸がこちらに語りかけてくる。
『八幡、僕と取引をするかい？更なる契約を結べばネフシュタンの鎧を壊すことも可能だよ。なんたって僕たち呪具も聖遺物を丸ごと１つ飲み込んでいるんだからさ。』

今はリミッターがかかっていて、本来の力を発揮できてないけどねと阿修羅丸は言う。
「おいおい、本当にもう何もねぇのか？お前といい青髪のやつといい、全然歯ごたえねぇな、なんでこんなやつをフィーネは気にするのかねぇ。」
彼女がこちらに向かって近づいてくる。
俺の体は避けようと体に力を入れるが
「いっつ！」
先ほどの攻撃で足もえぐられていたようだ。
このままでは本当に何もできずに終わってしまう。
彼女を嘲笑われたまま、何もできずに終わってしまう。
それだけは……それだけは……力の差だとか聖遺物の差だとか、そんなの関係なしにただ何もできずに終わるのだけは…他の誰かが許しても俺が許せねぇ
『そうだよ八幡、さぁ僕と更なる契約をしよう、そうすれば君は彼女よりも強くなれる。君とペチャパイを嘲笑ってたあの女を倒すことができるんだよ。
さぁ八幡僕の手を取って‼？」
眼前にはトゲのムチが迫ってきている。今度こそは本当に避けることはできないだ

ろう。影深も連続戦闘の疲れで発動するまでに時間がかかる。俺には本当に打てる手立てはない。

阿修羅丸は俺に向かって僕の手を取れと叫ぶが、俺は阿修羅丸の手を取ることはなかった。

なぜなら、俺にはもう手立てはないが、あの人ならもしかしたら…という淡い期待を込めて、俺は阿修羅丸の手を取らずにこの数年間迷惑を一番かけてきた彼女に託すことにしたのだ。

そして、遂に彼女のムチが俺を貫く…

ガキン

ことはなかった。

「おいおい八そんなに血だらけで大丈夫か?でもまぁこのアタシが来たんだ安心しな」

彼女の槍が俺をムチから守ったからだ。

俺のとは違い、正真正銘本物のガングニールを纏った奏さん。

彼女のギアはあのライブでバラバラになり、櫻井さんによる再生&改造という恐ろしい過程を経て、彼女のギアは数年前よりも何段階も向上している。

それに改造の段階で俺の阿修羅丸も関わっていることもあり、彼女のギアはガングニール改め、ガングニール・シャドウと呼ばれている。

翼さんの練習に一度も勝ったことはなかったが、奏さんには傷1つつけることはできなかった。

「まぁ、そこでおとなしくしてな、あんたと翼の分まとめてアタシが返してきてやるからさ。」

彼女は俺に向かっていつもの勝気な笑顔で微笑んだ。

彼女の力

戦場に彼女の唄が鳴り響く、元ツヴァイウイングの片翼の天羽奏が奏でる戦場の歌が…

槍で彼女からの一撃を防いだ奏さんは、俺から離れ俺を襲った張本人に体を向ける。

「で、あんたが翼と八を痛めつけてくれたクソったれか？」

「あ？……ああそうだよ、青い髪のやつとそこで転がってるやつをぶっ倒したのはこのあたし様さ」

名前を聞いた時は一瞬誰のことかと考えていたのか、少し間があったがすぐに奏さんに向けて武器を向ける。

「…それとなあたしにはクソったれじゃなくて雪音クリスって名前があるんだよ‼？」

そう言いながら奏さんの方にネフシュタンのムチを振るう。

彼女のムチは先ほどとは比べようもないほどの速さで標的である奏さんの方へと向かう。

奏さんは気づくのが遅れ、一瞬のタイムロスが生じる。

槍を手に取り構えようとするが、それよりも早く彼女のムチが奏さんを襲った。

直撃だった。

彼女はろくに構えも取ることなく、彼女の一撃をくらった。

「あはははは、まぁもう死んじまった奴には名前なんて関係ねぇか」

辺りには直撃した際に舞い上がった砂煙が充満しており、完全に手応えがあったのか彼女は勝利の愉悦に浸っている。

俺はそんな彼女を見て哀れに思っていた。俺たちの中で一番強い奏さんがこの程度でくたばると思っているのか？

そんな中で砂煙の中から人影が現れる。

「おいおい、勝手に人を殺さないでくれねぇかな、あたしはこの通りピンピンしてるんだからさ」

答えはＮＯだ

砂煙から現れたのは先ほどと全く同じで傷１つ付いておらず、元々白かった部分が阿修羅丸との融合で黒く染まったガングニールを纏った奏さんだった。

「な!?・お前あたしの一撃をくらってなんで立っていやがる!!・?」

敵さんも傷１つ負っていない奏さんを見て動揺しているようだが、単純な話だ。

「そんなもん、あんたの一撃があたしのガングニールに傷１つ負わせられないへなちょこだったんじゃないのか？」

そう単に雪音クリスの一撃は奏さんのガングニールを打ち破る程の威力がなかった、ただそれだけの話だ。

「んだとコラァ‼?あたしに喧嘩を売るなんて１００万年早いんだよ‼?」

彼女は先ほどよりも思いっきりムチを振るう。

だが奏さんも先ほどとは違い黒い槍を待ち構えて迎撃態勢をとる。

そして彼女のムチと奏さんの槍がぶつかる。

ガギンと激しい武器と武器とのぶつかり合う音が辺りに響き渡る。

俺が見た中で一番早かった一撃を奏さんは余裕そうな表情でいなしてみせた。

「おいおい、この程度か?ならとんだ期待外れだな」

奏さんも翼さんをやられているせいか、相手をかなり煽っている。

いつもならこんな茶番など行わずノイズを迅速に倒しているが、よほど腹を立てているらしい。

「っ!!ふっざけんな‼?あたしが期待外れだと…違う違う違う違う…」

奏さんの言葉に何か引っかかったのか彼女の様子がおかしい。

頭を抑え何かから、怖がるように身を守っている。

体は小刻みに震え顔色も先ほどより若干青い。

「あたしは、あたしはぁぁぁぁぁ!!」

急に叫んだと思うと再び奏さんへとムチを振るう。
そして、それを奏さんがいなしているが、先ほどより段々と速度を上げてきている。
先ほどの余裕そうな表情も今はなく、真剣な表情で彼女の攻撃を捌く、左へいなし、右へと受け流す。二本のムチを左右にさばいていくが、流石は完全聖遺物といったところか受け流されたムチが当たった場所への被害がとんでもない。
今や奏さんが立っている周りはムチの衝撃で凸凹に凹んでいる。
流石にこれ以上好きにさせると後が大変になりそうだなんて思っていると
「こりゃ、藪をつついて蛇を出しちまったかな、初めから全力でやっとくべきだったか、あぁクソ失敗しちまったなぁ。こりゃ思ったよりもめんどくさいことになりそうだ」
一向に攻撃の手を緩めることのない雪音を見てそう呟く奏さん。
彼女は幾度塞がれても即座にムチを振るうことによって、奏さんの身動きを塞いでいるのだ。彼女なら避けることも可能だが、彼女は多分彼女の後ろにいる俺のことを気にしているのだろう。
彼女が避けた場合その後ろにいる俺に当たる可能性がある。もし当たった場合先ほどの手加減された一撃でも俺のガングニールはボロボロだった、なら、今半狂乱でムチを振るっている一撃が当たれば最悪死ぬ可能性がある。
だから、彼女はこの場を動けないのだ。くしくも二年を経てまたあの時と同じような

場面に陥っているというわけだ。
二年前のコンサート彼女が俺をノイズから守ってくれたあの時と…
だが、二年前と違うことは、奏さんは雪音には負けないということだ。
昔とは違い、今の彼女の力は偽物（リンカー）ではなく本物（正規適合）であるということ。
今の彼女は元々正規適合者である風鳴翼をも凌ぐ力を持つ。
それが、例え完全聖遺物相手であろうと負けるはずがない。
彼女が力を欲した理由その経緯から今までを知っている俺は彼女が負ける姿が想像できない。
ただの気持ち悪い理想の押し付けであるが、血反吐が出るような訓練を経て改造があり、その全てを喰らい尽くしてきた。
ならば、たかだかネフシュタンに適合しただけの少女など彼女の敵ではない。

そして、俺も…二年前とは違い確かな力を持っている。阿修羅丸という呪われた力を。
だから…
「八!!?」
ああ、分かっている、彼女が言おうとしていることはだから…

「行け‼?」
「おう‼?」
　刹那奏さんは雪音からの攻撃を避ける。
　そしてその後ろにいる俺へと向かってくる。
　このまま何もしなければ確かに直撃するが…
「ずっと寝たままでいるわけねぇだろうが‼?」
　阿修羅丸で彼女の一本目のムチを受け止める。
　ものすごい威力で俺の足は思いっきり後ろに押し出される。
　刀を握っていた手は痙攣が止まらず、阿修羅丸に関してはヒビが入っている。
　二本目のムチは防ぎきれず、後方へと吹き飛ばされる。
　阿修羅丸は手元から弾き飛ばされ後方へと吹き飛ばされる。
　ガングニールも限界だったのか今の衝撃で変身が解除される。
　次の一撃が来れば間違いなく、俺は死ぬだろう。
　だが、まぁ来ればの話だが
「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇ」
　槍の矛先から強烈な風が巻き起こり巨大な竜巻を纏いながらそれを彼女目掛けてぶ

つける。
【ＬＡＳＴ∞ＭＥＴＥＯＲ】
竜巻を纏った一撃は彼女を倒せはしないが痛手を負わせられる威力だと俺は思った。
だが、彼女は先ほどの一撃を受けて気を失っていた。
ネフシュタンの鎧もボロボロに砕けていたが、驚くべきことに再生を始めたのだ。
ネフシュタンの鎧は徐々に回復していき、やがて元に戻った。
鎧は戻ったが、纏っている本人は気を失ったままだ。
今がチャンスだと思って、奏さんに捕まえるように頼む
「奏さん今なら、奏者が気絶している今なら捕まえられます。」
奏さんに向け歩いていると奏さんから静止の声がかかる。
「待て!!?八は何があってもいいように離れてろ、あたしが行く。」
こちらにくるのを止め、彼女の元へと歩く奏さん。
だが…
「奏さん後ろだ!!?」
突如どこからともなくノイズどもが現れだした。
そしてそれは一直線に奏さんに向かっていた。
俺の声に反応して奏さんは後ろに迫っていたノイズを槍で消しとばす。

だが、消しとばしても消しとばしても現れてくるノイズに対して違和感を覚える。
それはなぜか奏さんではなく敵である彼女に向かっているような。
そして、奏さんの猛攻をかわした一体は奏さんではなくその後ろにいる雪音クリスの元へと向かう。
「やばっ」
彼女はまだ気絶しているのかノイズの接近に気づく気配はない。
「くそ仕方ねぇ、まだ聞きたいことも聞けてないし、ここで助けるのはそのためだ。」
自分自身にそう言い聞かせ阿修羅丸の元へと体にムチを打ち取りに行く。
そしてそのまま阿修羅丸を彼女の元へと放り投げる。
阿修羅丸が彼女の元へと届いた瞬間彼女は消えた。
そして、彼女の消失を確認した瞬間俺の意識は薄れていった。
流石に限界だったらしく、身体中から悲鳴をあげる痛みがでてくる。
「後は…頼みます奏さん…」
そして、完全に俺は意識を失った

事の顛末

目を開けるとそこは異世界だった……なんていうことはなく、二課の医務室の天井だ。

俺が二課の医務室にいるということは俺が気を失った後奏さんが連れ帰ってくれたのだろう。また彼女には大きな貸しができてしまった。辺りを見回してみるが誰もおらず俺一人だけだ。

ふと、自分の体を見てみると体中包帯でぐるぐる巻きにされていて、阿修羅丸の刀を握っていた右手にはギブスをはめている始末だ。

俺のことを知らない人が今の姿を見たら現代に蘇ったミイラ男と断言するだろう。むしろ知り合いでもミイラ男と間違えるのではないだろうか？

立花あたりならアホの子だから間違えそうである。翼さんが見たら私の剣は物の怪と言えど斬り伏せるとか言って斬りかかってきそうだ。…いや、今の状態でやられたら洒落にならないんだけどね。

とは言えまずは現状の確認をしてみる。

右手はギブスで固定されているが左手は動かすことができる。

次に足を確認してみると包帯は巻かれているがギブスを嵌められてないことから折れてはいないようだ。
次に今の状況を確認するためにベッドから立ち上がろうとするが、
「いてぇ」
そう立とうとした瞬間足から激痛が走る、おそらくネフシュタンとやりあった時の怪我と無理して動いていたからその反動の筋肉痛のダブルパンチの痛みであろう。
だがまぁそれでも状況の確認は最優先事項なのでゆっくりとであるが司令室を目指して進むことにした。

〜〜〜

あってこの程度で済んだならむしろ得です。……まぁ最後は奏さん頼りにはなりましたが」

俺の言葉を聞いた司令はいきなり笑い出した。

いやまあ俺としては特に面白いことを言ったつもりはないのだがまさか笑われるとは思ってはいなかった。

俺が怪訝そうにしているのを見て司令が謝罪をしてくる。

「いや、すまない。大怪我をして、まさかこの程度で済んで良かったなんて言われるとは思っていなくてな。確かに命に別状が無かったのは良かったが体が治るまでは戦闘に参加するのは禁止する。わかったな？」

先程までとは違った真剣な表情で司令が言う。

確かに戦闘に参加しなくていいってことは働かなくていいことと同義なので俺の中では文句はないのだが…

「司令!!?：商店街方面にもノイズの出現反応多数」

藤堯さんが焦ったように叫ぶ。

俺は今の発言に違和感を覚えた、藤堯さんは今商店街の方にもと言った。ということは他の場所でもノイズが出現していることになる。

一応敵の雪音クリスは俺の影深で捉えたので、奏さんが１０分以内に司令室まで戻っ

ていれば雪音クリスが逃げることはできなかったはずだ。
俺の影深は１０分間しか影に潜れない代わりにどんなことをしても俺が技を解かなければ逃れることはできない。
「何だと!!?.奏たちの状況はどうなっている?」
司令の方も焦ったように奏さんたちの状況を確認している。
「奏さん、響さん両名ともに現場のノイズで手が離せません。それに、先程からノイズの数が減っておらず、むしろ増えていっています。」
オペレーターの友里さんが奏さんたちの状況を伝える。
だが俺は違和感を覚える。奏さんはわかるが、確かに友里さんは響とも言った。と言うことは立花も奏さんと一緒に出撃していることなる。
俺は司令に問いただそうと一歩司令に近づく。
「司令、立花が戦っているってどういうことですか、今の話じゃあ奏さんと一緒というわけでもなく、立花一人でノイズと戦っているってことですよね、まだ戦闘訓練も初歩の初歩の立花を戦わせるって、立花を殺す気ですか!!」
あれだけうるさかった司令室が俺の叫びで静まり返る。
司令も俺の方に向き直る。
俺は司令と約束したはずだ、立花を戦場に出すのは妥協したが、戦わせるのだけはダ

メだと、だから戦闘だけはさせないでくれと……なのに、立花が戦っているとはどういうことだ。

それに立花は融合症例という初めてのケースだ。戦って何か起きてからでは遅いのだ。だから…だから…

「え？」

司令がいきなり近づいできたと思ったらいきなり抱きしめてきた。

「すまない、わかっているんだ、響君を戦わせる危険性も君との約束だって響君を想ってのことだいうことも。俺だって止めたんだ、響君を戦わせるぐらいなら俺が出るってな。だが、彼女は誰に止められても行くって言ったんだ。例え君に止められても彼女は止まらないって言っていた。なら、俺たちにできることは彼女を死なせないように最大限バックアップすることしかない。だから、本当にすまない、君との約束を守ることができなくて…」

司令の言葉に嘘偽りはないだろう。この人は本当にいい人だ。子供の俺たちがしたいことは精一杯応援してくれるし、間違ったことをしたら怒ってくれる。だから、司令は本気で立花を止めたのだろう、それでも立花が戦っているのは立花の意思が固かったからだろう。だから、司令たちは立花を死なせないように最大限のバックアップしていた。そこに俺が来たというわけか…

なら、俺がすることは決まっている。
「…いえ、立花がそう決めたのなら俺にどうこう言う権利はありません。俺こそすいませんでした急に叫んだりして」
俺がそういうと司令は俺から離れ再度モニターを見る。
モニター見つめる司令の顔は厳しい。
それにさっきの友里さんの言葉からして立花も奏さんはその場から動けないということで商店街の方に割ける人員がいないということだ。
「藤堂、あとは頼んだぞ、商店街には俺が行く」
「なっ、それは無理ですよ司令。いくら司令と言えどもノイズ相手に生身で勝てるはずがありません。考え直してください。」
司令の発言にみんながざわつく。
確かに生身の人間でノイズを相手にするということは、すなわち死を意味する。
それに司令は二課には必要不可欠な存在だ。ここでいなくなられては困る。
だがら…
「響君たちが頑張ってるんだ、大人として子供ばっかりに迷惑をかけるのは情けないんだよ‼?俺が商店街に…」
「いえ、その必要はありません司令はここに残ってください。」

司令が驚いたようにこちらを振り向く
「どういうことだ比企谷君、俺が向かわないなら誰が商店街に向かうんだ、いや、まさか…」
「はい、そのまさかですよ、俺が出ます。俺が商店街のノイズを相手にします。」
「ダメだ‼?君は重傷の体でノイズと戦うつもりか、そんなこと俺は許可しないぞ」
司令が叫ぶが、この場での俺の命令権を持っているのは櫻井さんだ。
なので俺が司令に従う理由はない。
緊急時なら特例が出るが、その緊急時でも櫻井さんの指示の方が司令よりも優先される。
「司令、俺に命令を出せるのは櫻井さんだけです。それに俺は先程櫻井さんから出撃の許可をもらっています。なんなら確認してもらってもいいですよ。なので、司令が俺を止めることはできません。それに俺もそのためにここにきましたし。」
全部嘘だ、櫻井さんにもあってはいないし、ここにきたのも状況確認のためだ。だがそれでもこの状況では、こう言うのがベストだろう。
「っ…。わかった、比企谷君に商店街に行ってもらう。だが必ず生きて帰ってくるんだぞ。約束だ、それとこの約束を破ることは許さんぞ。もし破ったらどこまでも追いかけて連れ戻す、わかったな?」

全くこの人は本当に優しい人だ。
約束ね…。
絶対とは言わないが俺だってただ死にに行くわけじゃない。
「ええ、分かってます。こんなところで死にたくないですしね。必ず帰ってきますよ。」

そう言って俺は司令室を後にする。
未だ怪我が治りきっていない体を引きずって商店街を目指す。
いろんな所でノイズが発生しているなら、避難対応も遅れているはずだ。
その状況はノイズや敵さんにとっては好都合だろう。
雪音クリスを捕縛してもノイズの異様な出現から考えるに彼女の後ろに黒幕と呼ばれる人物がいるのだろう。
聖遺物の扱いに関しても俺たち二課と同じかそれ以上の知識を持っていると思われる。
少なくとも俺はノイズを出現させたり、命令できる聖遺物なんて聞いたこともないし、完全聖遺物であるネフシュタンの鎧もあちら側だ。
それに関してうちは奏者の数ではこちらの方が多いが、立花はズブのズブで、翼さんと俺はネフシュタンにやられている、唯一の優位性といえば奏さんただ一人だが、彼女

に関しても一度に多方面の援護には向かえない。
それに比べて敵はネフシュタンを失ってもなおノイズを自由自在に出現させることができるなら敵の方が有利である。それに相手の戦力がわからないがこちらの戦力は恐らく割れているのも不利な点だ。
だが、例え不利だとしても俺のやることは変わらない。
彼らには恩がある、死んでも返しきれないほどの恩がそれに立花を守るのも俺の仕事だ。俺のせいでそうなってしまったのならやはりそれは俺のせいなのだろう。
だから、彼らを守るために俺は自分の体を酷使する。
腕が取れてもいい、足が折れてもいい、目が潰れてもいい、内臓がえぐれてもいい、生きて彼らに恩を返せるのならそれでいい。
俺のせいで人生を歪めてしまった子を守るためなら命だって惜しくはない。
だからこそ、今ここで俺に力を貸して欲しい阿修羅丸。
この体でも戦える更なる力を俺は求める。
この先の敵にも対等にいや、圧倒できるような力を求める。
俺が求めるのは何者をも圧倒する力。
奏さんのような強さを俺は欲しい。
『うん♪待ってたよ八幡、本当はそんなボロボロになる前に僕と契約して欲しかったけ

ど…いいよ、僕はそんな八幡を気に入っているからね』
彼女を捕まえても状況は更なる悪化をした。ならここからさきは、雪音クリス以上の強さを持つものも現れるだろう。
そうなれば奏さん一人では厳しい戦いとなるだろう。
だからこそ、俺は今より強くならなくてはならない。
『覚悟が決まってるなら僕から言うことはないかな、今回も契約内容は僕の力の解放と引き換えに君の命を削る、それでいいかな?』
「ああ、それで問題ない、今ここで戦う力と引き換えにするのなら、それは必要なことだったということだ。」
『いいよ契約成立だ、今回は僕なりに少しサービスをしておいたよ、そんな体じゃあ満足に戦えないだろうしね』
阿修羅丸との更なる契約を結んだ瞬間体の痛みがなくなる。
ギブスを巻かれていた右腕も振り回せる。
走っても足に痛みははしらない。
まさしく全快といった所だ。
『あぁ、勘違いしてほしくないんだけど、今のは治ったわけじゃないよ。痛みを感じなく

しているだけだよ。しばらくしたら元に戻るから早めにやることを済ませた方がいいよ、それじゃあ頑張ってね八幡♪』

そう言って阿修羅丸との会話は終わった。

俺は2、3度体の調子を確かめた後、ガングニールを纏い商店街を目指す。

一刻もはやくノイズを殲滅してほかの二人の援護に向かうために。

願わくば立花の友達たちが巻き込まれていないことを祈って

「それじゃあお仕事再開と行きますか」

側から見れば気持ち悪いと言われるニヒルな笑みを浮かべながら全力でダッシュをしている

運命の再会

商店街…普段は沢山の人達で賑わっている。
学校帰りの学生や主婦、仕事帰りの人など老若男女問わず様々な人が和気あいあいとしているこの場所は、突如現れたノイズによって地獄となった。
ほんの数分前まで穏やかな日々を過ごしていた人達は、ノイズによって炭素になった。それを見た誰かの悲鳴がきっかけとなり商店街はノイズと人間の鬼ごっこの会場となったわけだ。
鬼ごっこといっても、デッドオアアライブの生存をかけた命がけの鬼ごっこだが、そんな場所で商店街から逃げようとする少女2人。
普段は仲のいい三人組だが、そのうちの一人が最近用事で忙しく、最近は二人で過ごすことが多くなっていた。
そして、今日も本当は三人で行きつけのお好み焼き屋を帰りに寄って行く約束をしていたのだが、急用が入ったとかで授業の途中で帰ってしまったので、二人でお好み焼き屋に行ったのだが、その帰りに突如ノイズに襲われたのだ。
誰かの悲鳴が聞こえノイズを見つけた時の二人の対応は早かった。

周りのみんなに大声でノイズの発生を知らせ、避難所に行くように促した。
自分たちもノイズに捕まらないように細心の注意を払いながら行動していた。
普通ノイズと出会った人は恐怖のあまり固まってしまう人が多い。
だが、この二人は不幸中の幸いか、ノイズと出会うのは初めてではなく、二度目だ。それが幸いして、彼女たちは固まることなく動くことができた。
「皆さん逃げてください!!?ノイズです、ノイズが出ました!!?急いで近くの避難所に逃げてください!!?早く!!?」
なぜなら二年前のあの日、兄を失った妹比企谷小町と小日向未来は、兄のようにノイズで人がこれ以上死なないように出会った時の対処法を二年前のあの日からずっと考えていたのだ。
だが、対処法とは言ったが大したものではない、ただ出現の瞬間に驚いて固まらないように、素早く行動をうつせるようにする。ただそれだけなのだが、言うがやすし行うが如しと言うように、わかっていても体が動くかは別問題だ。
それでも、二年前のあの日から続けてきたことは、今日この瞬間に活かすことができた。
「小町ちゃん私たちも早く避難所に向かおう」
「そうだね、早くしないとノイズに追いつかれちゃうし、それでも今日は響ちゃんがいな

くて良かったね、あの時一番苦しんだのは響ちゃんだったし、本当に良かったよ」
「うんそうだね、本当に響がいなくてよかった。こんな光景響には二度と見て欲しくないから」
二人は走りながら今いないもう一人のことを考えていた。
二年前のあの日、重傷を負ったもう一人の少女立花響。
手術は無事成功したが、そこから待っていたのは地獄のようなリハビリだった。何度も挫け、何度も転んだ。それでも彼女は一生懸命リハビリを続けた。
なぜなら、少女は知っていたからだ、自分が2人の犠牲のもとに生き残ったことを、だから、一刻も早く良くなって、みんなに心配をかけないようにと頑張った。リハビリを頑張ってくれればみんな喜んでくれると思ったから…
だが、現実は甘くはなかった。リハビリを終えて、帰ってきた立花に待っていたのは地獄のような責め苦だった。
何でお前が生き残った？
何で代わりに死ななかった？
人の税金で食べるご飯は美味しい？
お前なんか死ねばいいのに…
更には立花のせいで天羽奏が死んだと言う、根も葉もない噂が巻き起こり、立花の環

境はますます悪くなっていった。
だが、ある時1人の男が現れた。
その男は新宿で大暴れしながら、コンサート事件を引き起こしたのは俺だと言いながら新宿の建物を壊しまくった。
すると自体は急変した、立花の周りは立花も被害者だと言う認識に変わり、今までの嫌がらせはピタリとやんだ。
代わりにその男に全ての悪意が流れていった。
民衆の悪意を全て背負った男は年齢、住所、これまでの経歴全てを晒されて、死刑にされた。
彼が使っていた道具なんかの説明は全くといっていいほど要領を得なかったが、それでも、その男の死という形で立花たちへの嫌がらせはなくなった。
だからこそ、2人はまた立花に同じ体験をして欲しくなくて、今この場にいないことを喜んだのだ。
「うわぁぁん、ままぁどこぉ、おいていかないでよぉ」
少年の声が2人に届いた。
「小町ちゃん」
小町の方へと視線を向ける未来、その視線が何を意味するか言わなくも小町には分

かっている。
「わかってるよ、未来ちゃん、伊達に幼馴染やってないって、あの男の子を連れて一緒に避難しよう」
そういうと2人で少年のところまで走った。
少年の近くには人は1人もおらず、みんな逃げたあとらしく、少年はどうやら母親とはぐれてしまったらしい。
2人は泣いてる少年のもとまで走ると一緒に逃げようと提案した。
「ほら、泣いてないで、一緒に逃げよう？お母さんも先に避難所に向かってるから、後から会えるよきっと」
「そうそう、私たちに任せなさいって‼？」
「…ほんとに？」
先程まで泣いていた少年は少女たちの話を聞いて泣くのをやめた。
「ほんとにほんとだよ、ほら早く逃げないとノイズが来ちゃう」
そう言って未来は少年の手を取り走り出す。
最初はぎこちなかった少年の走りもだんだんと落ち着いてきた。
ノイズがおってきてないか後ろを振り返る。
「はぁはぁ、追ってきてないみたいだね。少しは安心かな」

「そうだね、でも避難所に着くまでは油断対決だよー」
　未来は小町の方へと顔を向けた。
　それもとても残念そうな表情で
「お姉ちゃん、それって油断大敵って言うんじゃないの？」
「ふぇ？……ウンウンそうとも言うんだよ、ほら、アレだよ、場の空気を和まそうと思って、ちょっとした冗談だよ冗談、小町は初めからわかっていたのだよ、それをあえて知っているか試しただけだよ」
　などと本人は供述しているが、当の２人は先ほどよりも残念そうな顔で小町を見ていた。
「な、なにさ、その顔は、ほんとだって、ほんとのほんとにわかってたよ」
　未来はそんな小町を見てため息をついた。
「はぁ、帰ったら一緒に国語の勉強しようね、響と一緒に」
　勉強という言葉を聞いた瞬間小町の顔が青くなる
「未来様、ほんとの、ほんとにわかってたんですって、どうか未来様のスパルタ勉強コースだけはご勘弁を」
　祈るように未来は懇願する小町を見て未来は一言
「ダメ♪」

「いやぁぁぁぁぁ」
　1人の少女の絶叫が響渡った。

～～～

ノイズはもう追いかけてきていないと。
たしかに、普通のノイズであったのならそうであろう。
先程まで全く追ってきていなかったのに突如現れたりしない。
だが、そもそも今起きている事態ことが普通ではないのだ。
3人が振り返ったすぐ後ろには、直径2メートルはあるノイズが佇んでいた。
「「きやぁぁぁぁぁ」」
3人はすぐさま避難所まで逃げようと走り出すが、少年が石につまずきころんでしまった。
そして、手を繋いでいた未来もそれに引っ張られてころんでしまう。
小町は2人が転んだことに気づきすぐさま2人の元へと向かった
「大丈夫、立てる?」
「う、うん、痛いけど大丈夫、早く逃げないとノイズに…」
「それじゃあ行こう、手を出して」
今度は小町とも手を繋ぎ2人で少年を引っ張りながら走ることにしたが、
それでも、ノイズの速さに比べると格段に遅い。
徐々に追いつかれていることに全員気づいているがどうしようもない。
彼女たちにはノイズに抵抗する手段はないのだから、

少女たちを追うのを諦めるか、勝手に自壊してくれるのを待つしかない。
だが、それよりも早く私たちを捕まえる方が早いだろう。
それに少年の体力もそろそろ限界だ。
私たちのスピードになんとかついてこれているが、もう体力は残っていないだろう。
ここで、少年を見捨てればノイズは少年を取り込み炭となってきえる。
そうすれば2人は生き残ることができるが、この2人はそれをしない。
なぜなら、2人は命がけでノイズから人を守った人達を知っているから、だから、彼女たちは見捨てない。
それが自分たちの破滅へとつながっていても。
とうとう少年は体力の限界がきたのか座り込んでしまう。
「まだ走れる?」
そう未来は聞くが少年は首を横にふる。
「そっか、それじゃあしょうがないよね」
小町の方へと視線を向ける未来、そして、それに頷きを返す小町
「しょうがないか、少年1人を置いていくなんてできないしね」
置いていかれると思っていたのか、驚いた顔をしていら少年に未来は言う
「私たちはね、もうこれ以上誰かを犠牲にはしたくないの、だから…だから…」

それ以上未来の言葉は続かない。
わかっている。
そうやって覚悟しても、やはり死ぬのは誰だって怖い。
できることなら生きていたい。
だけど、この状況では生き残るのは絶望的だ。
そんな中小町は、二年前のあの日を思い出していた。
二年前のあの日私たちが生きるのを諦めていた時に天羽さんがかけてくれた言葉を、もやがかっかっていて良く思い出せないが、なぜか思い出さなくてはいけないような気分になっていた。

3人で手を繋いで座り込んでいた。来るべき死神を、せめて3人一緒にと…
ノイズとの距離はもうほとんどない、後数秒もすれば自分たちは仲良く炭素になるだろう。
「あっ」
突然大きな声を出した小町に未来はどうしたのと問う
「こんな時なんだけど、思い出したんだよ、二年前のあの日こんな感じの絶対絶望の時に天羽さんがかけてくれた言葉をさ」

だが、それは三年前だからこそだ。あの時は目の前に戦える人がいた。
今いるのは少女2人に少年1人。戦えるような人は1人もいない。
だけど、この2人には伝えたかった。
天羽さんが二年前言ってくれた言葉を
そんな話をしていると目の前にはノイズが接近していた。
もうだめだと2人は目を閉じた。振り下ろされるノイズからの攻撃をただただ待っていた。そして…

「そう確か……

「「生きるのを諦めるな‼?」」

小町の声と誰か男の人の声が響く。

そして今にも襲いかかろうとしていた目の前のノイズは緑と黒の槍で一突きで炭へと返った。

男はノイズが消滅したのを確認するとこちらに近づいてきた。

「大丈夫か?怪我はないか?」

こちらの安否を気にかけてくれる私たちの命の恩人。

だけど小町だけなぜが顔色がおかしい。

それにこの男の人私もどこかで見たことがあるような顔つきだ。

「……お、お兄ちゃん」

兄妹

時が止まるとは一体どういう状況のことを指すのだろうか

ありえないことが起こった時に時が止まるという表現を使うとするのなら、それは今を置いて他にはないだろう。

なぜならば、今目の前にはもう二度と会うことなど出来ないと思っていた妹と出会ってしまったのだから。

二年前のあのコンサート会場での事件以降、俺は死んだことになった。

ならば必然的に比企谷八幡と関わりがあったものとの接触、会話などは禁止されていた。そもそも俺と関わりがあったのは家族と妹の友達くらいだが…

だが、それでも妹と会えなくなるのは死ぬほど辛かったが、呪具と呼ばれる阿修羅丸との契約をした以上、誰がこの力を狙っているかわからない。そもそも、今になっても完全には阿修羅丸の力を制御できていない。俺なんかと一緒にいたら巻き込んでしまう。

だから、小町のためを思って俺は小町ともう会えないことを快く了承した。

だが、今目の前にいる少女は間違いなく、妹の小町であると断言できる。
二年前とは見違えるほどに大きくなってはいるが、妹を見間違えるほど腐った目を持っているつもりはない。
そしてそれは、妹も同じようだ。二年前に死んだ兄が目の前に現れてそれでも兄と呼んでくれるとは思わなかった。
俺は小町に一歩近づく、すると小町も目から涙を流しながら俺の方へと一歩歩み寄ってくる。
「本当に？お兄ちゃんなんだよね？本当の本当に？」
まるでそうであってほしい、そうでなければ嫌だと小町は俺に問いかける。
だが、ここで小町の兄であると認めてしまえば小町を俺の事情に巻き込んでしまう可能性がある。だから今ここで俺が兄であると認めないのが一番効率がいい筈だ。
それを踏まえた上で俺が取る行動など決まっている。
俺はガングニールの変身を解く

俺は更に小町に近づき抱きしめる。
力強く抱きしめる、1人にして悪かったと
優しく包み込む、悲しい思いをさせて悪かったと

そうだ、例えそれが一番効率の良い方法だとしても兄として妹を悲しませるわけにはいかない。
「そうだ、お前の兄の八幡だ、すまんな今まで悲しい思いをさせて」
俺は先ほどよりも力を入れて小町を抱きしめる。
すると小町も俺を抱きしめ返す。
顔を俺の胸に擦り付けながら泣いているのがわかる。
「あぁ本当に悪かったな小町」
抱きついている小町の頭を撫でる。
そしてふとあたりを見渡すと目と目が会う少女
「え、えーと小町ちゃんのお兄さんってことは本当に八幡さんなんですか?」
そう聞いてくる黒髪ショートの女の子を俺は知っている。二年前のあの日本当は俺の代わりにコンサートに行く予定だった女の子小日向未来。
あまり俺とは接点は無かったが妹の小町を通じて少しは知っていた。
「ああ、さっきも言ったが本当に小町の兄の比企谷八幡だ」
動揺している小日向に向けて嘘ではないと告げるがやはり俺のことを怪しく思っているらしい。
「で、でも二年前のコンサート会場で事故にあって死んだって……」

一般的にはそう伝えられているが、うーむ本当の理由を話していいものか俺だけでは判断できない。阿修羅丸のことはトップシークレットだし…

どう説明しようか悩んでるいると司令室から通信が入る。

「比企谷君今の状況の説明をしたまえ。」

いきなりの通信に驚いたが、今の状況ね……この状況は何と言ったらいいのだろうか

「え、えーとですね、あの、少々困った事態というか、何というか…」

俺は今現在俺に抱きついて泣いている妹とそれを疑いの眼差しで見つめている友達と何が起きたかわからない少年を見て言葉を詰まらせた。

だが、それを司令室は危険な状況だと判断したのかすぐに現在の状況の報告を求めてきた。

「何‼?·まさか体の怪我が悪化したのか‼?·くそ、やはり俺が出て入れば……、比企谷君そこから逃げられるだけの体力は残っているか、ないならなんとかそこで耐えてくれ、今からそっちに俺が迎えに行く」

待て待て待て、なんかすごいピンチだと思われているぞ、いやたしかにピンチだがそういうピンチではないというかなんというか、俺は慌てて司令に状況を説明する。

「ふむ、なるほど大体状況はわかった、そちらに緒川を向かわせる。少年を避難所に連れて行った後、彼女たち2人には説明をに二課で行う。響君のこともあるしな」

「了解しました、緒川さんは後どれくらいでこちらに来れそうですか？」
「いや、緒川のやつならもう…」
「はい、ここにいます司令。それでは、少年を避難所に連れて行き次第、彼女たちを二課に連れて行きます。」
　いやいやいや、おかしいでしょ、なんなん？二課は奏者だけでなく、オトナも化け物揃いかよ、司令が来るように行ってから全然時間経ってないよ？どこから来たのかは知らないけど緒川さん来るのはやすぎん？
　おっと、あまりの超常現象に頭がおかしくなっていたようだ。

「それでは、あなたたちをまず避難所に連れて行き、そこからあなたたち２人は我々の本部に来て説明をさせてもらいます。それでいいですか？」
「わかりました、そこで全部教えてくれるんですよね？八幡さんのことと二年前本当は何があったのか」
「はい、本部に呼ぶということはそういうことかと、それではそろそろ…」
　緒川さんは小町を見ている。いや厳密には小町が抱きついている俺を見ている。いや、わかってるよ、だからさっきから引き離そうとしてるんだけど全然離れないんだよ。
　ダイソンの掃除機かっていうくらいの吸引力ですよ、くっついたら離れないなんて

だがずっとこうしているわけにはいかないので仕方なく小町を揺さぶり緒川さんに着いて行くように促す。
「この人について行ってもお兄ちゃんとはまた会える？ずっと一緒にいれる？」
難しい質問だ、司令が２人をどうするのかわからない以上俺からはなんとも言えないし、これ以上俺と関われば小町に危険が及ぶかもしれない。
だから、俺は嘘をつく
「あぁ、大丈夫だ、緒川さんから後で俺を呼んでもらうように頼んでおく、だから、安心して行ってこい。」
妹を悲しませないように俺は、俺が嫌った嘘をつく。
小町は俺から離れて小日向の方へと向かう。
「わかった、それじゃあ小町行ってくる‼？でもね、もしお兄ちゃんと会えなかったら、わかってるよね？」
⁉？⁉？⁉？⁉？⁉？⁉？
なぜか、振り向いた小町の笑顔がすごく黒かったような気が……もし会わなかったらどうなるのだろうか……ウン、ハチマンウソツカナイ
最後まで俺を警戒していた小日向と最後の最後で今まで見たことのないような笑顔

を見せた小町と俺が来てからずっと空気だった少年を連れて、緒川さんは避難所に向かった。それにしても、あの少年昔の俺みたいだったなぁ、最後まで空気だったところとか俺そっくりだわ、マジで。

そんなことを考えながら再度ガングニールを纏う。

しかし、今までのただ黒いガングニールではない。

先の阿修羅丸との契約により力の解放が進み、ガングニールには緑色のラインが幾重にも張り巡らされている。

それに刀だった阿修羅丸は奏さんのアームドギアそっくりの黒と緑の槍へと変わった、というよりは変化した。

これが今までなかったアームドギアの構成だ。

とは言え、これは奏さんの真似しただけのただの模倣品。

本物に比べれば数段劣る。

だが、これのいいところは変化するところだ。阿修羅丸の特性の1つ分解と構築。これにより、俺のアームドギアは常に変えることができる。

なので、戦いながら槍から刀へと変えることもできるというわけだ。

そして戦いの中で武器が変わるというのはとんでもない優位になる。

なぜなら、一瞬でリーチや間合いが変わるからだ。

どんな人物でもいきなり武器が変わればそこに隙が生じる。
だが、この契約により更に俺の浸食は進み、上半身の右部分を半分浸食している。
しかし、今回は阿修羅丸と契約したおかげで妹の小町を助けることに間に合ったので、不幸中の幸いだ。
俺は黒と緑の螺旋を描く槍を構え、商店街のノイズを倒しに向かう。

捕獲

新しいガングニールを纏い商店街の方まで急いで来てみたが酷い有様だ。
ところかしこに人が炭になった跡があり、更には店もノイズによって壊されている所が多い。
場所は違えど2年前のコンサート会場を彷彿させる光景だ。
そして、もちろん目の前には大量のノイズの群れが湧いている。
俺は槍を構えて、目の前に立ち塞がるノイズを貫き通す。
「おわっとと、これは今までよりも出力が格段に上がってるな」
たった一度振るっただけで目の前の五体のノイズを炭へと返す。
阿修羅丸との契約により、基本スペックも底上げされているようだが、目の前のノイズの群れを見ればたかが五体倒しただけに過ぎない。しかも小型のノイズだ。あの群れの中にはここから見えるだけでも大型のノイズが多数存在している。
「はぁ本当にどっから湧いて来てるんだか…」
だがまぁ溜息ばかりついていてもノイズの数が減るわけでもない。
それに今回の俺には時間制限がある。

今は体に痛みは感じないが後から痛みが出てくると阿修羅丸は言っていたことから、そう長い時間は戦えないと考えるべきだろう。
この数相手に短期決戦とはなんとまぁ非現実的だこと。
それでも一刻も早く立花の元に駆けつけなくてはならない。
「とりあえず影操で槍に影をまとわりつかせ大きくする」
それにより身の丈ぐらいだった槍はふた回りほど大きくなる。
それに、大きくなったと言っても増えた部分は影なので質量も変わらず、軽々と持つことができる。
とりあえず動くだけで被害が増える大型ノイズから倒して行くのが得策か
そう考えて、ふた回り大きくなった槍を大型ノイズがいる方向に向ける。
「直線上に無数の小型ノイズがいるが、纏めて吹き飛んでもらおうかぁぁ」
腰のブースターを作動させ、槍を先頭にノイズの群れに突っ込む。
凄まじい勢いに直線上にいた小型ノイズどもは吹き飛ぶがそれでも彼は止まらない。
「これでどうだぁぁぉぁぁぁ」
狙っていた大型ノイズ目掛けて突撃する。
そして、槍が届いた瞬間大型ノイズは爆発する。
これでまずは一体倒せたのだが、倒した本人はスピードの出し過ぎで止まらないでい

た。
「やべぇぇぇとまらねぇぇぇだれかとめてくれぇぇぇぇ」
槍を地面に突き刺し、足で踏ん張りをつけることでようやく止まることができた。
彼が通った跡には綺麗な直線上の道がノイズとの間にできていた。
「目標一体は倒せたが、これはあんまし使わない方がいいな。使った後に止まるのに一苦労するしな」
そう言って彼が見たのは目標がいた地点と今自分がいる地点。
大体止まるのに２ｋｍぐらいかかっている。
これでは直線上に味方や一般人がいた時急に止まらないとぶつかる可能性がある。
それに止まったとしても、今のままだと止まりきれない自信がある。
そんな不完全なものを戦場で使うわけにはいかないしな
「それじゃあ次は目の前の小型ノイズにするとしますか」
そういうと先程まで槍にまとわりついていた影が槍から離れ、幾重もの槍の形を形成し始めた。
これは奏さんが使っていた技に近いが、俺のは槍を増やすのではなく影で槍をコピーして敵に投げつける技だ。
まぁ、実際大して変わってはいないが。本体か影かの違いぐらいだし

やることも同じだからな
そして彼が本体の槍を投げるのと同時に他のコピーもノイズに向かって一直線に飛んで行く。
当たったコピーはノイズの消滅とともに元の影へと戻る。
「今ので小型はかなりの数がやれたはずだ、しかしまだまだ敵さんは健在ですよねぇ」
彼の攻撃を受けて消えていったそばから後ろのノイズがこちらに向かってくる。
彼は本体の槍が敵の真ん中あたりまで飛んでいったところで次の技を使う。
「影深」
彼が一言そう言った瞬間槍もろとも槍の周りにいたノイズどもが消えた。
次の瞬間には彼の足元の影から槍が出てくる。
その槍で、目の前まで迫っていたノイズを突き破る。
「いける!! いけるぞ!! この力があれば!!」
強くなった自分に若干ハイになってる彼は再びノイズの群れへと突進して行く。
ちなみにこの台詞はもちろん今日ベットの上で悶えることになるだろう

ーーーーーーーーーーー

しばらくして、商店街のノイズを殲滅することに成功した。

大技の間に小技を挟み効率よくノイズを倒していたが数が数だけに相当な時間を有してしまった。
それに大技の使いすぎでまともに動けない。
とりあえず司令にノイズ殲滅の報告をしようとした瞬間後ろから声をかけられる。
「比企谷君」
ふり向こうとした瞬間首筋に何かを押し当てられた。
そしてそのまま押し当てられたものから首に何かが注入されているのがわかった。
すぐさま距離をとろうと後ろへ飛ぶが平衡感覚がおかしい。
目の前がぐらぐらして目眩がする。
「お、お前何をした。俺に何を打ったんだ‼?」
目眩がする頭で元凶を見上げるとそこには…
「あら～おかしいわね象でも眠らせられる睡眠薬を打ったのにまだ意識があるなんてやっぱり人間離れしてるわね」
俺の目の前には自称できる女の櫻井さんが立っていた。
「…な、なんで櫻井さ…ん……が…」
「あら、効いてきたのかしら、よかったこれで手荒な真似はしなくてすみそうね。ほら、いいのよ比企谷君眠って、あなたはもう永遠に目覚めることはないのだから」

朦朧とした意識の中で最後に見た櫻井さんの姿はいつもの櫻井さんとは違った気がした。
「ふぅこれでまた計画が一歩進むわね、それじゃあ彼を回収して戻ろうかしら」
そう言って彼女は倒れている彼を抱き抱えて去っていった

ーーーーーーーー

「おーい戻ったぞダンナ、緊急招集ってなんだ?あたしは戦闘続きで疲れてるんだ早くしてくれ」
司令室にそう言って入ってきたのはたった今ノイズとの戦闘を終えて帰ってきた天羽奏だった。
「すまないな重要な要件だ……よし、これで全員揃ったな」
そう言って司令は周りにいる人物を見渡す。
そこには入院していた風鳴翼、もう一振りのガングニール奏者の立花響、立花の友達の比企谷小町と小日向未来、緒川さん、藤孝さんたちオペレーターの人たち、櫻井さんたち二課のメンバーが勢ぞろいしていた。
ただ1人を除いて

「そのようですね、叔父様」
　入院していたはずの翼がいるのに驚いて、体の具合を尋ねた。
「おい翼体の方は大丈夫なのかよ、もう動いていいのか？」
「あぁ奏か、心配をかけたなすまない。だが防人としてこれ以上休んでいるわけにはいかないのでな」
「そうか、だけど無理はするなよ病み上がりなんだから」
　翼が元気になって良かったが、それにしても見たことない人物が２人いるがあいつらは一体誰だ？それにダンナは全員揃ったと言ってたがハチの野郎は一体どこにいるんだ？
　そんな奏の疑問に答えるように司令が口を開く
「みんな集まってもらってすまない、まずこちらの２人だが比企谷君の妹さんの比企谷小町くんとその友達の小日向未来くんだ。」
　司令に紹介された２人はおずおずと言った感じでみんなの前にでてきた。
「ご紹介に預かりました、比企谷八幡の妹の比企谷小町です。これから皆さんよろしくお願いします。」
「同じく小町ちゃんと響の友達の小日向未来です。精一杯頑張るのでよろしくおねがいします。」

「というわけでこの2人には外部協力者として協力してもらうことになった、みんな仲良くしてくれ」

新しい協力者か、まぁ立花のことはよく知らないがハチの妹なら仲良くなれそうだな。

けどこの報告のためにみんなを集めたのか？いや源十郎のダンナならやりかねないか…それなら、もう帰って風呂に入ってもう寝たいんだけどな

「そしてもう一つ嬉しい知らせがある、ネフシュタンを身に纏っていた少女雪音クリス君の捕獲に成功した。幸い特に目立った怪我もなかったので今は事情聴取中だ。」

あぁそれもあったか、ハチの野郎が上手くつかまえてたしな。あの状況だとあたし1人じゃあ捕まえられなかったからな。まぁそのあとぶっ倒れたハチを連れ帰ったのはあたしなんだけどな

「ここまで、いい知らせだったがここからは悪い知らせだ。まず一つ目は彼女が纏っていたネフシュタンの鎧が何者かに盗まれた。ニ課の警備をかいくぐってのことだ。内通者がいるのかもしれない。」

なるほど、それは一大事だが。今のニ課の戦力ならネフシュタン一つ相手に遅れはとらないはずだ。

たしかに痛手だが、そこまで悪い知らせではないな。

　纏っていた少女もこちらがつかまえているわけだし
「そしてもう一つの悪い知らせというのが…」
　心なしか先ほどよりも空気が重くなった。
　ハチの妹やその友達も顔色が悪そうだ。
　一体何があったっていうんだ…
「比企谷君の反応がロストした。恐らくは敵に捕まったと思われる。目下捜索中だがめぼしい情報は今の所ない」
「なっ、は、ハチの野郎が敵に捕まったっていうのか⁉?」
「落ち着け奏、まだそうと決まったわけではない。あいつのことだいつのまにかひょっこり現れるかもしれない」
　そう言って司令に詰め寄ろうとする奏を翼が宥める。
「比企谷君の方は必ず俺らが見つけ出すから、安心してほしい。それよりもだ、敵の正体を未だにつかめていないことだ。クリス君に関してもまだめぼしい情報を吐いてはいない。各自警戒して任務にあたってほしい」
　これで話は終わりだとダンナが締めくくる。
　そのままダンナは黒服の人たちを引き連れて部屋を出る。
　恐らくはハチを探しに行くのだろう。

それならあたしも一緒に探す。
ハチはあたしの相棒だからな
「ダンナ!!?.あたしも一緒に行くぞ」
ダンナは止まってこちらを振り向く。
少し考えるそぶりを見せるが、ダンナはダメだという。
「…いや、ダメだ奏は今日連続戦闘で疲れている。またいつノイズが現れるかわからないんだ。休めるときに休んでおけ。いいかこれは司令命令だわかったな。」
そう言ってダンナは去って行く。
その背中を見ていることしかできないあたし。
昔の何もできない自分を見ているようで嫌になる。
母親と父親をノイズに殺されるのを黙って見ていることしかできなかった自分に…
「ハチ…」

塗り替えられたもの

『…まん、はち……おき…』
誰かが俺を呼んでいる声が聞こえる。
誰だこの声は…
聞いたことがある声だ。
とりあえず目を開けてみるとそこは何もない真っ黒な空間だった。
「ここは一体…」
『はち……こっち…』
また声が聞こえる。
だが辺りを見回して見ても声の主は見当たらない。
ただただ黒いだけの何もない空間である。
『はやく……まん…ちへ…』
まただこの声は誰かを呼んでいるようだ。
だがこの空間には俺1人しかいない。
ということは多分この声は俺を呼んでいるのではないか。

これで違ったら恥ずかしいなんてものじゃないが…
とりあえずここがどこかもわからないので俺は声のする方へ進んでみることにした。

そして、声の方へ進んでみるとは言ったものの進んでも進んでも一向に声の主の元には辿り着けない。
時間にして約３０分ほどだろうか、時計を持っていないので正確な時間はわからないが、声の元へと進みだしてから大体そのくらいがたった。
しかし、一向に声の元には辿り着けず空間にも何の変化も現れない。
これはどうしたものかと途方にくれる。
そもそもこの場所はどこだ、俺はここに来る前なにをしていたかも思い出せない。
最期の記憶は小日向と小町と別れたあたりで途切れている。
まさかとは思うがあの後ノイズにやられて死んだとかそういうオチではないだろうか？
そうするとここは地獄ということか、それならこの暗さも納得できるがどうも違うような気がする。
『はち……ぼくの……よん…』
それにこの声も先程から少し言っていることが変わったような気がするが、なんて

言っているか全くわからない。
「ぼくの…なんなんだよ、全く持ってわからない。こんなときに阿修羅丸がいてくれれば少しは力をかしてくれたかもしれないな」
まあその時はまた契約を結ばされそうだけどな
それでもこんなわけのわからん場所に閉じ込められているよりはましだと思う。
いきなり目の前が光り始める。
「な、なんだ俺なんかしたか、いつのまにイベントフラグ回収してた？」
光が収まり中から出て来たのはなんと阿修羅丸だった。
『全くもう、気づくのが遅いんじゃない？』
いかにも怒ってますって頬を膨らませて抗議して来る。
しかも、気づくってなに？俺はまだ何にもこの状況についていけてないけど？
「いや、俺には全くなんのことだがさっぱりなんだが…」
『さっきからぼくがずっと呼んでいるのに君ときたら無視し続けるんだもん』
「さっきから呼んでいたのはお前だったのか？」
『そうだよ、僕がせっかく助けようとしたのに僕の言うことに全然耳を傾けてくれないんだもん』
「なるほど先程からの声は阿修羅丸からの呼びかけだったのか、だがそれならなぜもっ

とわかりやすく話してくれなかったんだ?こっちはなにを言っているか全然わからなかったぞ」

『…そういうことか』

そういうと阿修羅丸は何か考えるそぶりをし始めて1人でぶつぶつあーでもないこーでもないと何か考え事し始めた。

いやぁーできれば俺にもこの状況の説明をして欲しいんだけどな。

そんな想いが伝わったのか阿修羅丸は独り言をやめて顔を上げた。

『いや悪いね少し考えごとがあってね…それでこの場所だけど君は知っているはずだよ、2年前にここに来ているからね』

2年前に来たことがあるということは、おそらくこいつと初めて契約を交わした場所だろう。でもどうして今ここにいるのだろうか。

『ああ君はどうしてまたこの場所に来ているのか気になっているよね。それはさ、君との契約が終わりに向かっているからだよ八幡』

「どういうことだ?契約が終わりに向かっているって、俺はそんなに契約を交わした覚えはないぞ」

驚いている俺に比べて阿修羅丸はいたって冷静だ。

『ああそうだろうね、それは僕も同じさ、君との契約が終わるくらいの契約をした覚えが

ない。だけど契約していなくても君は僕との契約で少しずつ呪いが体を浸食するようになっていた。つまりそこを狙われたわけだよ』

わけがわからない。たしかに契約時の浸食の他に阿修羅丸を使ったりすると少しずつではあるが呪いが広がっていくというふうに言われていたが、それも櫻井さんの薬でかなり軽減していたはずだ。

こんないきなりその浸食だけで呪いが満たされるとは思わない。

『そういきなり浸食が広がるわけがないんだよ、何の要因もなければね…』

要因？全く持って検討がつかない、一体俺の体に何にがあったっていうんだ!?？

『八幡は覚えてないのか、それとも目をそらしているだけなのかはわからないけど櫻井了子による仕業だよ。君は小町君たちと離れた後ノイズの群れを殲滅した、けどその疲労により後ろから近づいて来る女狐に気づかなかった。その隙を突かれて強力な睡眠薬を打たれて君はまんまと敵に捕まったわけ』

「はぁ!?嘘をつくな!!何で櫻井さんがそんなことをする必要があるんだよ!!だって櫻井さんは二課のメンバーで仲間のはずだろ」

そうだ2年前のあの日扱いに困っていた俺を二課で面倒みてくれるようにしてくれた人たちの1人だぞ、それなのに櫻井さんが敵とか意味がわからない。なら、2年前のあの時どうして俺なんかを助けたのか。

『はぁ、全くもってしょうがないご主人様だなぁしっかりしてよあんまり時間は残されていないんだよ。』

阿修羅丸の声色にはいい加減現実を見ろと訴えかけていた。

『そもそもさ、今こんなところにいる時点で覆せない証拠だっていうのに。』

阿修羅丸が言っていることは正しい。

今ここに俺がいることが櫻井さんが敵であるなによりもの証拠なのだから。

「…一体いつからだ、いつから櫻井さんは俺たちの敵だったんだ」

『そんなの決まってるじゃないか、始めからだよ始めから』

始めからだと…始めとは一体いつからだ、俺が阿修羅丸を手にした時かそれとも立花がガングニールを起動させた時か?奏さんがガングニールに適合した時か……わからない、わからないことが多すぎる

一体いつから櫻井さんは俺たちの敵だった…

『言ったじゃないか始めからだって、それは風鳴翼が聖遺物である天羽々斬を起動させた時からだよ。』

「なっ!?それは本当なのか!?」

『本当だとも、僕と彼女は少し因縁があってね。その時に彼女のことを知ったのさ』

だが、それなら俺と契約した時には阿修羅丸は彼女が敵であると知っていたことにな

る。それならなぜ教えてくれなかったのか

『そんなの簡単だよ、言ったって君は信じないだろ?だから僕は何も言わなかった。実際に直面するその時までね、それで今がその時ってわけ』

そういうと阿修羅丸はこちらに近づいてきておもむろに手を伸ばしてきた。

その手は俺の目の前で止まる。

色々なことを一気に聞かされたお陰で頭の中がぐちゃぐちゃで目の前の手の意味なんて考えている余裕はなかった。

『そして、この状況で君が僕のいうことを信じてくれるなら契約を結ぼう』

阿修羅丸の言葉に思考が止まる。

契約だと?今この状況で?阿修羅丸の言っていることが本当ならこのまま放っておけば俺の魂は消えて体は阿修羅丸が引き継ぐ筈だ。

それなら今ここで更に契約を結ばなくてもいい筈だ。

何もしないことが阿修羅丸にとっては最善策のはずなのになぜここで契約の話を持ち出して来るんだ?

『君の考えている通りであってるよ八幡、このまま何もしなくても君の体はこのまま僕が譲り受けることになる。全く持ってその通りだ……そしてそのまま女狐の操り人形の完成さ』

「操り人形だと？どういう意味だ体を乗っ取った後は阿修羅丸の物になるんじゃないのか？どうして櫻井さんの操り人形になるんだ？」

『詳しく話すと長くなるから簡単に説明すると僕たち呪具を作り出したのは彼女なのさ、そしてその時に隷属の刻印を同時に施したんだよ。契約者の体が呪いに完全に呑まれてぼくたち呪具のものになったとしてもその刻印が刻まれている限り、彼女の命令には逆らえないただの人形に成り果てるというわけさ』

櫻井さんが呪具を作っただと!?

だが、それはおかしい呪具は何十年も前から存在している筈だ。

そうすると櫻井さんは呪具が生まれ出た時にはまだ生まれてもいない。

阿修羅丸の話には矛盾が生じている。

『うん？ああそうか君は知らなかったよね、彼女は何百年も前から存在するんだよ。リインカーネイションシステムって言う簡単に言えば輪廻転成をするシステムによって何百年もの間生き続けているんだ。』

そして、その条件は聖遺物の発するアウフヴァッヘン波形により呼び覚まされる形になるため、たまたま天羽々斬を起動した翼さんと一緒にいた櫻井さんの中のフィーネが復活してしまったらしい。

そして、フィーネというのが俺たちの敵であり、彼女自身の敵であると阿修羅丸は

言っていた。
なんとも信じがたいことの連続だが、それらも今の状況を考えれば信じざるおえない。
『…僕はね八幡、あの女の思い通りに行くことだけは我慢ならないんだ。だから僕と契約を結ぼう君の体に呪いが回りきる前に、それにこのままだと君が守りたいと思っていた人達も死ぬことになるよ。それでもいいのならこのまま消えればいいさ、この後の地獄に君の妹たちを残してね』
「っ!!それはどういう意味だ!?小町たちに何が起きるんだ!!」
『彼女の目的は……いけない八幡時間がない。早く決断してくれ!!今ここで僕と契約を結ぶか、それとも大切な人を残して死ぬのか。』
そう言って阿修羅丸は焦ったように手を伸ばしてくる。
俺の体に呪いが回りつつあるということだろう。それに心なしか体の感覚が薄くなってきた感じがする。
阿修羅丸との契約は今まで何度かおこなってきたが、それはいつも俺からだった。
彼女自身から進んで契約を進めてきたことはない…多分だが
だからこそ、この契約は彼女にとってはとても大事なことなんだろう。
それなら俺は……

次の瞬間には目の前が光って俺の体は光の中に消え去っていった。

～数週間後～

「こちらａ班未だ目標の手がかりはつかめていません。」

「そうか、わかった引き続き捜索を頼む」

そう言って風鳴司令は通信を切る。

彼が居なくなってから数週間一向に何の手がかりが見つからず、ノイズの発生も以前ほど頻度が減っていた。

なので、その分の人員をこうして彼を探すのに費やしているのに未だに尻尾すらつかめていない。

「それでも、必ず見つけ出す、そう約束したからな。それに子供との約束一つ守れないかっこ悪い大人になんてなりたくないからな」
すると今しがた切ったはずの通信機に連絡が入った。
「こちら風鳴だ、どうした何か見つかったか？」
「司令、対象を確認しました。場所はうわぁぁぁ」
「どうした？何があった応答しろ!!おい!!」
いきなり通信が切れてしまった。
すかさず本部に掛け直すとちょうど通信が切れた場所でノイズの発生が確認されて今奏が向かっているようで、司令は本部まで戻ってくるようにとのことだった。

ーーーーーーーー

天羽奏は走っていた。
今しがたハチが見つかったと通信が入ったがその直後おんなじ場所にノイズが発生した。
「無事でいろよハチ」

奏はなぜか嫌な予感がしていた。
幼い頃両親を失った時のような嫌な予感が…
その予感を振り払うように彼女は目的地目指して突っ走る。
そして、たどり着いた目的地には確かに彼が立っていた。
それにノイズどもも一緒に。
だが彼はそのノイズたちに襲われているわけでもなく、そのノイズを倒しているわけでもない。
その姿はまるでノイズを操っているようなすがた。
ノイズを使って人を襲わせようとする自分の相棒の姿だった。
「ハァァチィィィィィィ」
彼女の嫌な予感は的中した。
今の彼は彼女の知る彼ではなくなってしまった。
なればこそ、こんな姿を彼の妹や慕っている奴らに見せるわけにはいかない。
今ここで彼を止めてみせる。
そう思い彼女はガングニールを纏い、槍を振りかざすが、それを彼はやすやすと刀で受け止める。
『そんなものか、槍女？弱者に興味はない、消えろ』

「かはっ」

鮮血が飛ぶ。

今あたしは切られたのか？動作が全く見えなかった。

気付いた時には、上半身を斜めに切られていた。

しかも纏っているガングニールをやすやすと通り抜けて。

あれはもうあたしの知っているハチではなくなっていた。

人を斬るのに一切の躊躇いを持っていなかった。

それにあたしのことも覚えていないようだった。

薄れゆく意識の中で見えたのは以前のような腐った目ではなく紅く輝く目をしたあたしの知らない彼だった。

新たな仲間

「……ん、ここは…」

辺りを見渡せば長い間お世話になっている二課の医務室の天井が見える。

今あたしがここにいるということはやっぱりあたしを斬ったのは彼ということになる。

いなくなった数週間のうちに一体彼に何があったのだろうか

すると突然ウィーンと機械的な音を立てて医務室の扉が開き源十郎のダンナが入ってくる。起きているあたしを見て足早にこちらへとやってくる

「目が覚めたのか奏…体の方は大丈夫か？」

「ああ、体の方は見た目よりもあまり痛みがないから大丈夫だ。それよりもハチに一体何があったんだ？」

「ああそのことなんだが、あくまで櫻井くんの予想だが比企谷くんは阿修羅丸に体を乗っ取られている可能性があるそうだ。」

「なっ!?嘘をつくな‼?櫻井さんだって飲み込まれるのは大分先だって言ってた筈だろ。それがいきなり乗っ取られたなんてそんなわけあるか‼?」

「それはそうだが、何しろ相手は未知数だ。もしかしたら俺たちの知らない先史文明の技術を使い覚醒を促したのかもしれん。それに比企谷くんがもう彼自身ではない事を一番わかっているのは、彼から攻撃を受けた君なんじゃないか」
「っ!!」
全く持ってその通りだ。あたしの攻撃を軽々と受け止めて斬り伏せたハチはあたしが知っている彼ではなかった。
そんなことはあたしが一番知っている…でも、それでも、あいつが既に阿修羅丸ならあたしの知ってるハチはもう死んじまったってことだ。
「…このことは妹の小町には言ったんですか?」
「ああ伝えたさ、響くんにも未来くんにも小町くんにも伝えた。もしかしたら彼は彼では無くなってしまったかもしれないって」
そう言う源十郎のダンナは悔しそうな顔をして手から血が流れるほど拳を握りしめていた。
そんなお通夜状態の中再び医務室のドアが開く。
「目が覚めたのか奏ぇ、よかったぁほんとうによかったぁ」
中に入ってくるなりあたしに抱きついてきたのは翼だった。
「ちょっ、待てよあたしをおいていくな」

そして、翼の後に入ってきたのは見間違えようがない。
翼を倒して、ハチに大怪我を負わせた女だ。
なんだってこいつがこんなところにいるんだ。
取り調べを受けている筈じゃなかったのかよ…

「彼女の名前は雪音クリスだ。この前まで敵だったが訳あって今はオレたちに協力してもらっている。」
「なっ!?ダンナ本気で言ってんのかそれ!?この前まで本気で殺し合いをしてたんだぞ、それに翼だってこいつとの戦闘で重傷を負ったんだ。それを目的が一緒だからって今更仲間になりましただと!!そんな綺麗事真っ平御免だね」
あたしの発言に翼とダンナは顔をしかめている。
だが、あたしにだって譲れないものがある。翼やハチ、仲間を傷つけたこいつがいきなり仲間になったなんて言われたってはいそうですか…ってなるわけがない。それに翼に関しては死ぬかもしれなかったんだ。
その原因である彼女を信頼できる仲間にできるかって聞かれたらもちろん答えはノーだ。
「ああ、そんなことはこっちだってわかってんだ。あたしだってあんたらと仲良しこよ

しをするつもりなんてねえよ。あたしには絶対に倒さないといけないやつができた、だからそれを倒すための間だけの協力関係だ。それが終わればこんなところすぐに出て行ってやるよ」

そう言ってあたしが睨みつけている彼女が言い返す。

２人の間に険悪な空気が流れている。

そして、２人のにらみ合いが続きまさに一触触発の瞬間再び扉のドアが開く。

「奏さんが起きたってほんとですかー!!」

元気いっぱいに飛び込んできたのは、あたしと同じガングニールを身に宿す立花響、その後ろには小町や小日向がいた。

「こら響、医務室で大声出さないの、すいません奏さんお騒がせしました。」

「ほんとだよ響ちゃん、病院では静かにしないといけないんだよ」

そう言って2人で立花の頬っぺたを横に引っ張った。

「いひゃいいひゃいわかったからはなしてーー」

「ほらまた大声出して響ったら学習しないんだから」

２人に両頬を引っ張られながら抗議する立花を見ていると笑いがこみ上げてくる。

あたしの笑い声に気づいたのか立花の頬を引っ張るのをやめてこちらにやってくる。

「すいません、奏さん騒がしくしてしまって、ほら響も」

「奏さん元気になって良かったです。それと大声出してすいませんでした」
「いいって、あたしもしけた空気は嫌いなんだ、むしろ元気いっぱいな立花の声を聞いてあたしまで元気になれそうだ」
「えへへ、そんなに褒めないでくださいよ」
「「調子に乗らないの響（ちゃん）」」
立花が入ってきたことにより、先程までの険悪な空気は何処へやらとばかりに頬が緩む。
立花がいて、小日向がいて、そして妹の小町がいる。この光景があいつの守りたかったものならば、あいつはたしかにそれを守っていたのだろう。ただし、それは自分自身をチップとしてだが…
だから今度はあたしの番だ、この光景を守った奴を首根っこ引っ張ってでも、あいつの居場所に連れ戻してやる。それがあたしに今できることだ。
そして、元気いっぱいの立花はさっきまでいがみ合っていた彼女に気づいたようだ。
「あっ‼?ここにいたのクリスちゃん‼?」
「う、うるせぇんだよこのバカ。あたしがどこにいようとあたしの勝手だろ」
クリスと呼ばれた彼女は先程まであたしと言い合っていた敵の名前だ。翼を傷つけ、ハチをボコボコにしたあの少女の名だ。

そして今現在ハチが帰ってこれない原因の一つでもある。
なのに立花はその原因に対し、まるで友達と会った時のように彼女の元へと走っていく。
「立花こいつは…」
「はい、新しく仲間になった雪音クリスちゃんです‼?.奏さんもしってますよね、ネフシュタンの鎧を纏っていた子です」
そんなことはわかっている。あたしが聞きたいのはなんでそんなにも簡単に敵だった奴と仲良くなれるのかってことだ。
「だが、そいつは!!」
「そうですよね、翼さんとお兄さんを傷つけた人でもあります。けど、私はそれでもクリスちゃんとは仲良くなれると思うんです。クリスちゃんにはクリスちゃんの夢があってそれを叶えるために戦っていました。」
夢か…だが、そんなもの誰だって持っているものだ。どんな人間だって夢は持っているものだ。こいつだけが特別なわけではない。そして、その夢を持つもの同士ぶつかり合うことだってある。
「そして、私達にも私達の目標があります。だからクリスちゃんとぶつかっていましたが、私はクリスちゃんの夢と私たちの目標それは手を取り合えるものだと思うんです。

何度かぶつかっていっぱい怪我をしたけどそれでも手を取り合えると思うんです」
　私たちの目標？あたし達の任務はノイズが出てきたときの人的被害を最小限に抑えることだろう。それとどうしてノイズを操り被害を増大させた彼女と手を取り合うということになる？
　話題の中心人物である彼女に目線を向けると顔を真っ赤にして恥ずかしそうに俯いていた。
「立花一つ聞きたい、彼女の夢ってなんだ？」
「はい、それはですね…」
「あーあーあーあー何も聞こえなーい、何も言うんじゃねぇー」
　突然雪音が騒ぎ出す、そんなにも聞かれたくないことなのか？
「未来、小町ちゃん」
「うん」
「おっけー」
　立花が名前を呼ぶと小日向と小町は騒いでいる雪音を押さえつけ始めた。
「クリス、少し静かにしようね」
「そうだよクリスちゃんここは医務室だから騒いじゃダメだよ」
「ふが、おい、おまえら、むぐ、んーんんーん」

見事な連携プレーで雪音は2人によって無力化された。
医務室の椅子に縛り付けられ口にはガムテープが貼られている。
それでも何とか抜け出そうとする彼女を2人で抑え留めてる。
聞くなら今のうちだと思い再び立花の方へと視線を戻す。
「立花、それで彼女の夢ってなんだ?」
「はい、クリスちゃんの夢は世界から戦争を無くすことなんです。」
だから、私たちは協力しあえますと語る立花にあたしは矛盾を覚えた。
彼女の夢は戦争を無くすことだと言ったが彼女の行動ではむしろ戦火を増やしているように思える。
ならば、これは彼女がついた嘘だ。
そう思い雪音の方を振り返れば、今にも彼女は顔を真っ赤にして今にも泣きそうな顔をでこちらを親の仇のように睨みつけていた。

あっ、ふーん。なるほど彼女の反応から察するに嘘じゃないようだ。
ならなんであんな非合理的な行動を取っていたのか不思議に思ったが、あたしの反応を見て彼女のことを旦那が教えてくれた。
彼女の両親のこと、紛争地域でその両親を失ったこと、帰国の途中で消息を絶ったこ

と、それからの事は彼女から聞いた話だと旦那が言っていたがどれも酷いものばかりだった。

しかし、そんな彼女にも分かり合える人ができた、それがフィーネと呼ばれる敵の親玉らしいのだが、そんな人物にも彼女は捨てられた。

どうやって入ったのかはわからないが二課の本部からネフシュタンの鎧を強奪し、そのまま消えたらしい。

フィーネにとって所詮雪音はただの道具に過ぎなかったと言ったらしく、更にこいつよりももっといい道具が手に入ったとも言っていたらしい。

「クリスちゃんのやり方はたしかに正しいものじゃなかったのはわかります。でも、私はクリスちゃんの夢だけは間違いではないと思うんです。だから、私はクリスちゃんを信じます」

そう言い切る立花はあたしには眩しく見えた。

今のあたしはハチのことで精一杯で、翼やハチを傷つけたこいつを絶対に許せないと思ってたし、それは今でも変わらないが、ハチが信じた立花を信じてみるのも悪くないような気がする。

「ぷはっ、全くやっと離れやがったか……言っとくが、あたしには仲間なんていねぇ、誰の仲間にもならねぇ、ただ倒さなきゃいけないやつがいるから協力するだけだ」

２人から解放された雪音はあたしに向かってそう言ってくる。
そんなめんどくさい言い方をする雪音を見ているとハチを思い出す。
めんどくさい言い回しで何を言ってるのかわからないときもあるけどそれでもあたし達の仲間だ。
それを取り返すためなら鬼でも悪魔でも利用してやるさ、もちろん元敵だとしてもな
待ってろハチ絶対助けてやるからな

可能性の光

先ほどまで険悪だった病室は今は、立花やハチの妹たちの来訪によって騒がしくなっている。
そして、その中には元敵の雪音クリスも混じっている。
彼女とは敵対関係だったが、これまでの経緯をダンナから聴いて、完全に許したわけではないが、ハチを助ける為の間もとい真の敵を倒すまでの間なら協力してやらないこともないって感じだ。
そんな感じで雪音の仲間入りを認めたわけなのだが・・・・
「奏さーーんありがとうございまーす」
なんて、言いながら飛びかかってくる立花や、
「奏さんがツンデレだぁ‼?」
とか言う失礼なハチの妹。
「あはははは」
苦笑いの小日向に翼を含めた他の面子も似たような反応だった。
思った事を言っただけなのにこの始末。

あたし的には苦笑いが一番心にくるんだがなぁ。
ハチが捻くれた理由が少しわかったような気がしないでもない。
「おほん、まあ親睦会はここまでにしてこれからの事を話し合いたいと思う。」
そう言って先ほどまでの苦笑いをやめて、真剣な顔つきをするダンナ。
これから何を話すのかは分かっている。ハチの事そして一連の事件の黒幕であるフィーネとやらの事だ。
はっきり言って、あたしは今の今まで寝ていたので詳しい状況は分かっていないが、相当やばい状況なのは確かだろう。
「まず初めに、比企谷君のことだが、上からの命令により拘束、それが無理な場合は殺害せよとの指令が来ている。」
「「「「「「なっ!!」」」」」」
全員が言葉を失った。
ダンナが言った言葉を理解するのに時間が掛かった。
ハチを殺す。その言葉だけが何度も頭の中を反復している。
二年間苦楽を共にした仲間を殺す。
それは、本来あってはならないものだ。ハチは不器用だが、優しいやつだそんな奴を殺すなんて、政府の野郎はあいも変わらず腐っていやがる。

「だが、勿論そんな事をさせるわけにはいかない‼?なんとしてでも比企谷君を捕まえて元に戻してみせる。そのために、目下櫻井君に方法を探してもらっている。」
元に戻す：か、あいつは本当に阿修羅丸と言う亡霊に塗り替えられてしまったのだろうか、
そういえば、まだ先の件の被害報告を聞いていないな。
あいつが殺した数それだけでも把握しておきたかったあたしはダンナに聞いてみた。
「ダンナ、一つ聞きたいんだが先の件での死亡者はどれくらいなんだ。こんなことも言うのもなんだが、あいつが帰ってきたら自分が殺しちまった人たちの罪悪感で押し潰れちまうだろ。だから、一応の確認なんだが、あいつは何人を殺したんだ?」
あたしの一言によって、張りつめられていた空気が更に緊張感が増したような気がする。
立花達の件だって、街を壊しはしたが誰かを傷つけることはなかった。
そんなあいつが人を殺したらなんて知ったら・・・
ダンナは一度資料に目を落とすとゆっくりと口を開く。
「それなんだが・・・今回の件での死亡者に関してはいないんだ。負傷者の数は数え切れないほどいたんだが、誰一人として、死んでいないそうだ。俺もおかしいとは思ったんだが、ノイズによる炭素化の後も無く行方不明者もいないと報告を受けている。」

司令の言葉に張りつめていた空気が緩くなったのを感じた。
「死亡者が一人もいないなんて、本当なんですか叔父様!?」
そんな中口を開いたのはノイズの脅威を一番知っている翼だった。
「ああ、本当だ。再三確認を取ったが今回の件での死亡者はいない。」
それでも、信じられないと言った顔をしている翼を見てあたしもありえないと感じていた。
「それはありえません。叔父様だって知っているでしょうノイズから人間は簡単には逃げられない。それに場所も人が多い商店街です。そこに大量のノイズを払って一人の死亡者もいないなんて、それはもう奇跡ですよ!?」
翼の言う通りだ。あたし達は何度もノイズどもを駆逐してきたが、いくら早く出撃しても、慎重に動いてもあたし達が着く時には多かれ少なかれ犠牲が出たあとだった。
だから、その異常性を理解している。
だが、立花やハチの妹、小日向なんかは死人が出ていなくて良かったくらいにしか思っていないだろうが、雪音はあたし達と同じく理解しているようだ。
ノイズを駆逐してきたから知っている異常性。
ノイズを操っていたから知っている異常性。
被害者と加害者ではあるが、確実にそれが異常だと理解していた。

「奇跡か・そう簡単に片付けることはできるが俺は違うと思っている。俺は比企谷君が阿修羅丸からの侵食に抵抗しているのではないかと考えている。敵がどのような手段を使ったのかはわからないが、正規の手段ではない以上どこかしらの穴があるのかもしれない。そして、正規の手段ではなかったが故に比企谷君の意識が完全に塗りつぶされていない可能性がある。」

だからこそ、助けられるかもしれないとダンナは言った。

「「「「「っつ!?」」」」」

絶望的な状況の中、あたし達に差し込んだ光はあたし達に希望与えてくれた。

まだあの捻くれた馬鹿野郎を、何でもかんでも背負いこむあいつを、二年間苦楽を共にした友達を、なによりもアタシのもう一人の相棒を取り戻すために。

それは、あたしだけではなくて他の面子も同じだ。

立花も小日向も翼もハチの妹もそして、敵であった彼女もだ。

だからこそ、取り返してみせる。

奪われてばかりのハチのために今度はあいつ自身を奪ってやるんだ。

「だからこそ、何としてでも比企谷君を連れて帰ってくるんだ。皆で彼を連れ戻すんだ。それに加えて彼が持っていると思われるソロモンの杖と呼ばれるノイズを操る聖遺物の奪取も最優先事項とする。」

ノイズを操る杖だと⁉?
そんなものがあるなんて⁉?
「司令⁉?それは本当なのですか⁉?それが本当なら今までのノイズの件ももしかして・・・・」
翼が言いかけた事にあたしにも思い当たる節がある。
ノイズを操る杖があるならノイズに関わる事件のいくつかもしくは全てにフィーネとやらが関わっている可能性がある。
それにもしかしたら、それはあたしの件にも可能性がある。
あたしの家族を殺した事件あれもノイズの仕業だった。
それにあたしの両親は聖遺物に関する仕事をしていた。
もし、フィーネとやらがその聖遺物を横取りするためにノイズを使ったのだとしたら、フィーネには数え切れない貸しがある事になる。
「・・・ああ、その可能性もある。敵がノイズを操ることがわかった以上。関わってはいないとは言い切ることはできない。だが、奏・・」
あたしの方を心配そうに見てくるダンナに対してあたしは
「大丈夫だ、例え親の仇だとしても今は、生きているあいつを救うことの方が優先だ。それに、あいつがあたしの命を救ったから今ここにいるんだ。だから、あたしの私怨より

もあいつを取り戻す方を優先する。」
心配そうに見ていた翼とダンナは目を見開いて驚いていた。
立花達はあたしの家族について知らないため困惑していた。
そしてもう一人、雪音は顔を青くしていた。
「奏、本当に大丈夫なの？」
「成長したな奏」
未だに心配そうにする翼に生暖かい視線を向けてくるダンナを適当にあしらい話を進める。
だが、そんな中でもあいつの顔は青くなったままだった。
話は進み雪音やハチを操っているフィーネの話題へと切り替わった。
「現状彼女のことでわかっているのは、クリス君から聞いた情報のみだ。
米国政府とのつながりがあり、聖遺物の扱いに慣れていることと、比企谷君と響君を狙っていたことくらいだ。彼女の目的がわからない限り迂闊に近づくのは得策ではない。必ず対峙するときは複数で当たること、絶対に単独での応戦は許可しない、特に響君はまだ狙われている可能性がある。わかったな？」
「「「「「はい!!？」」」」」
「あっ、でも司令お兄さんがどこにいるかわからないんですよね？どうするんですか？」

立花の言葉にみんなもハッとした表情に変わる。
意気込んだのはいいが、たしかに相手の居所がわからない以上こちらから動くことはできない。
「それについては二課の諜報部隊が血眼になって探している。その間に君達は・・・・」
「君達は・・なんですか？司令」
困惑気味に尋ねる立花
その顔を見てニヤリと笑うダンナ
「特訓パートに突入だ‼？」
次の瞬間にはどうだと言わんばかりの笑い声のみが病室に響いた。
「本当にダンナには敵わないなぁ」
あたしの口からはため息がこぼれた。

対峙

「よし、準備ができたものから、かかって来い!!」
ダンナの周りには、シンフォギアを纏った翼、クリス、響そして、奏の四人が並んでいる。
「けどよぉ、本当にいいのかよ、シンフォギア相手に生身とかよ、流石にあたしら舐めすぎじゃないか?」
困惑気味に尋ねてくるクリスに対して翼は異議を唱える
「否、司令相手に四人で相手になるかどうか・」
言っている言葉とは裏腹に、顔がニヤついている翼
恐らく、久しぶりの手合わせに昂りが抑えられないのだろう。
はぁ、あの頃の守ってやりたくなるような翼は消えて、今じゃ戦闘馬鹿になっちまって、人は変われば変わるもんだよなぁほんと
「えぇぇぇ司令ってそんなに強いんですか!?」
そんな翼の言葉に動揺するシンフォギア一年生の立花響。
そりゃあそうか、入ったのも最近ってことは、司令との訓練どころかシュミレーター

すら満足に使えてない可能性がある。
それに、戦闘面に関しては、あいつが、ハチが守ってやってたんだもんな
よし、それなら‥
「立花は、あたしの指示に従いな。Wガングニールでダンナに一泡吹かせてやろうぜ」
「はいっ‼?‥立花響頑張ります!!よろしくお願いします奏さん」
さっきまでの不安そうな顔は消え、花咲く笑顔でこちらに返事を返す立花。
そんな立花の笑顔にあたしも自然と笑顔を浮かべていた。
「それじゃあ特訓開始だぁ!!」

「「「はいっ!!」」」

開始の合図と同時にクリスが動き出す。
「はっ!!あたしを舐めたことを後悔させてやるよ、先制攻撃だ!!くらいな!!」
クリスは、自身のアームドギアをガトリングに変化させ、司令目掛けてブッ放す
「おらおらおらおら!!」
ダダダダダダと凄まじい発射音を放つ。
狙いはダンナただ一人、見方によっては人一人相手に過剰に過剰な戦力だろうな。

けど、それはただの人の場合だけどな

しばらくして、ガトリングが弾切れを起こし、動作を停止する。
激しい土煙が舞っており、ダンナの様子がこちらからではうまく伺えない。
「あわわわわ、クリスちゃんやりすぎだよぉ～。司令ーー!!大丈夫ですかー?」
慌てている立花を見ながら不敵な笑みを浮かべるクリス
「へっ、あたしを舐めるからこうなるんだ、文字どうり身にしみてわかっただろう?」
勝ちを確信したクリスとダンナの心配をする立花。
けど、本当にすべきことはそんなことではない
「ほぉ･･なかなかやるじゃないか、だが物量で押せばいいってもんじゃないぞ」
噴煙の中から聞こえてくる声
そう本当にすべきことはこの煙が晴れてこっちに攻撃をしてくるダンナをどう対処するかだ。
「･･･立花、少し下がれ」
「へっ?でも司令が･･」
立花は初めてのダンナとの特訓だから、まだダンナの強さを知らないのであろう。

あの人は、シンフォギアを纏った私たち2人を相手にしても息一つ乱さずに相手にする。
そんな人がたかだが、質量に物を言わせたミサイル程度の範囲攻撃で怪我を負うはずもない。
「どうした奏、響くんの心配をしている場合か?」
「なっ!?」
早すぎる、少なくとも５０ｍは離れた位置でいつ来ても対処できるようにしていた。
なのに、一瞬意識をそらしただけで目の前にまで迫って来るなんて。
慌てて槍を目の前に差し出す形で防御する態勢をとるが遅い。
間に合わない
「はぁっ!!」
大ぶりの右ストレート。
防御が間に合わずもろに食らっちまった。
バキッと嫌な音がする方を見てみると、自分のガングニールが欠けていた。
おいおい、マジかよダンナ。ただのパンチで聖遺物のアームドギアを傷つけるなんて。
「グハッ」

ドサッと隣には先程まで勝ちを確信していた雪音がおんなじように殴り飛ばされてこちらに飛ばされてきた。
どうやら、ストレートに一発もらってしまったらしく気絶していた。
「だ、大丈夫ですか、奏さん」
立花がこちらを心配して駆け寄ってきてくれるが、今心配するべきはあたしではなく、立花お前自身だ。
「…立花くるぞ、構えろ」
翼との戦闘と呼べるものかはわからないが、あっさり終わらせてこちらに向かって来るダンナが見える。
あたしは欠けたガングニールを構え、立花はいかにも初心者ですと言わんばかりのファイティングポーズをとっている。
「ほう、Wガングニールか、いいだろう。かかってこい俺に一本もとれんようでは、比企谷くんを連れ帰るなど夢のまた夢だ!!」
どうやら、こちらから攻めさせてもらえるらしい。
立花の初めての戦闘ということで、立花の動きを見極めるためだろう。
けど、これは千載一遇のチャンスいままで一本も取れなかったが今日こそダンナに一泡吹かせてやるぜ

「行くぞ、立花」
「が、頑張ります奏さん」
２人がかりでダンナへと向かっていく、ああ今日こそは今までのあたしじゃないってとこみせてやるぜ

ーーーーーーーーーーーー
「今日はここまでだ。各自休息を取るように」
「い、いくらなんでも化け物すぎんだろあのおっさん、ほんとに人間か？」
「つ、疲れたよ～強すぎだよ司令」
「くっ、今日も一本も取れなかった」
訓練場に倒れる四人組。
特訓が始まってから、数時間あたしたちは司令相手に一本も取ることなく完封負けした。
シンフォギア奏者相手に数時間戦って一本も取られないなんてほんとに化け物じみていやがる。
まあ、初めての実戦だった立花はあたしたち以上に苦労しただろうな。
連携も上手く出来なかったしな。

まぁそれもそうかあたしたちと違って戦闘訓練を積んでいるわけでもなく、たまたま聖遺物を起動してしまった元は普通の女の子なんだから。
その聖遺物もあたしのガングニールの破片だっていうし、もしあのコンサート会場であたしが死んでたらあの子が翼と共に八と戦っていたのだろうか。
自分のことをあんまり語らない八が楽しそうに話す妹の話で友達として出てきた立花の名前。
立花のことを思って暴れた新宿の騒動。
それだけ思っているやつと戦うはめになるところだったのかハチのやろうは。
だが、残念ながらここにはあたしがいる、八に救われた命だ、せめて立花とだけは戦わさせねぇ。
あたし一人で八を取り戻してみせる。
「そのためにも、もっと力がいるあいつを圧倒できる力が」

ーーーーーーーーーーーー

あたしは目的の人物探して施設内を探し回っていた。
その人はふだんは研究室にいるんだが、ふらっといつのまにか消えるのでこうして探し回っているのだが、どうやら杞憂に終わったようだ。

「あら、どうしたの奏ちゃん、私に何か用？」
目の前にいる櫻井了子彼女こそがシンフォギアを作り出した本人で、自他共に認める天才だ。
だからこそ、シンフォギアの強化ができるのは彼女以外にはありえない。
「ああ、了子さんお願いがあるんだ、あたしのガングニールの強化をして欲しいんだ。」
そう、前回の改修はあくまで、八の阿修羅丸の成分の解析の結果、どんな形にでもなれるという特徴を使い。
あたしに適合しやすいように作られただけにすぎないガングニールシャドウは、だから、時限式から本来のシンフォギアとしての能力を引き出せるようにしただけにすぎない。
そして、それだけでは八には届かない。
だからこそ、ここでガングニールの強化をお願いする。
「うーん、強化ねぇ、でもこれ以上強化するとガングニールよりもあなたの体がもたないかもしれないわよ」
渋るようにこちらが心配だと了子さんは暗に伝えて来るが、ここで止まるわけにはいかない。
なんとしてでも八を取り戻すと決めた今、力は必ず必要になる。

「覚悟ならもう決まってる、あいつを連れ戻すために…頼む」
「はぁ、わかったわ。けどメディカルチェックと身体トレーニングをもっと増やすことになるわよ。強化自体はすでに構成案があるから難しくはないけど、纏うあなたがギアに殺されては意味がないからね」
「ありがとな了子さん」
そう言ってガングニールのギアを渡し、その場を去る。
目的地はもちろんトレーニングルームだ。
少しでも体を鍛えて早めに適合できるようにするために。
出来るだけ早く八話連れ戻せるように。
あいつらの悲しそうな顔をもう見なくて済むように。
ひたすらトレーニングに時間を費やした。

ーーーーーーー
「よう久しぶりじゃねえか八元気にしてたかよ」
目の前に立つ男に話しかける。
了子さんのギア強化が成功して数日後。
再びアラートが鳴り響いた。

すぐに目的地に向かえば無数のノイズ。
そして、その遥か後方に八の阿修羅丸の波形を感知した。
翼や雪音に雑魚は任せて、あたしは一直線に八の元に向かった。
そして、現れたの黒い影を纏いながらガングニールを纏っている男。
先日あった時よりも明らかに黒々しいオーラを放つ男。
構えているのは槍ではなく刀。
そして、その刀から溢れ出す無数の闇。
何があったのかは分からないが、どうやら八のやろうもパワーアップしているらしい。
「あの時の雑魚か、まさか生きていようとはな。せっかく拾った命大事にすればいいものを、よもやまた捨てに来るとはな呆れ果てるぞ」
ああ、どうしてだろう。目の前にいるのはあたしの知ってる八のはずなのに、中身はただの別人だ。
八は目つきが悪くても、その視線に憎悪は宿っていなかった、
八は近づくなオーラは出してたがあんな禍々しいオーラを放っていなかった。
五感で感じれば感じるほど目の前の人物が偽物であると強く訴えかけてきた。
「はっ、その余裕も今のうちだぜ、その体の持ち主はあたしたちにとって大切なやつなん

だ。返してもらうよ」
「はははは、それは面白い。俺に勝てると?本気でそう思ってるなら甚だ遺憾だ。貴様ごときが束になろうと俺には傷一つつけられんよ」
「それはこれを見てから言うんだな」
首元にリンカーを打ち込む。
ぷしゅと嫌な音ともに緑色の液体が体の中に入ってくる。
「ガングニールシャドウ改め、ガングニールイグニション。八を取り戻すために力を貸してくれ」
「ＩＧＮＩＴＩＯＮ（イグニション）」
ガングニールの強化案それは、通常時の出力上昇、それに加えてもう一つある。
ガングニールの出力の限界を超えて上昇し続ける限界突破。
一度解放すれば解除するまで出力が上昇し続ける。
ただし、それは体がついてこれるまで。
体の限界を超えると内側から、エネルギーに耐えられなくなって壊れていく。
そう了子さんは言っていた。
これを使うからには短期決戦でなくてはならない、長時間使えば命の保証はないとも言われた。

ガングニールの装甲からフォニックゲインが溢れ出す。
止まることを知らないその出力は着実に上昇していく。
「それじゃあ、手っ取り早く八の体を返してもうぜ。」